

70
NO.8
¥100

安保ファンサイへ人間の渦巻を!!

過剰アンボ

2・23

昭和45年2月23日（隔週月曜日発行）通巻第8号



■郡山吉江さんの場合

このインタビューは、東京地方裁判所の地下にある食堂でおこなわれたものです。あと二、三日で六十二歳になるという郡山さんは、十・二一事件の裁判の休憩の時間に約一時間近くも、静かに様々なことを話してくださいました。ここにその話を全部のせることが出来ないのが大変残念です。

——救援の活動を始められた、きっかけというものは、何でしょうか。

この人と語る



きっかけというようなのは、ことさら無いのです。

救援の活動を始めたのは、おとしの十・二一からなのです。救援連絡センターが出来た少し前ですね。あの時、私も新宿へ行きまして、たくさん逮捕された中から、市民が二人起訴されました。もし自分がある所で逮捕されたら、自分も起訴されたいと思うまして、そういうのが、救援の仕事を始めた、多分きっかけだと思うのです。

実際には、何からやっていいのか、わかりませんが、友人なんかと話合ったのですが、実りませんでした。結局、東大の闘争がありましたし、あの時、今まで何かやろうと思った時、連帯とか組織とかによりかかっていただけですね、でもそういうことじゃいけないんだと感じましたので、私の友人、六、七十名に自分の気持ちを書いたプリントを出したので。そうしたら反響がありまして、お金も少し集まりました。そのお金を、その時、出来たばかりの、救援センターと、「市民を守る市民の会」で分けたりしました。そんなのが、始まりなんですけど。十・二一の時に逮捕された市民の方の裁判は、四月の二三日か、二四日でしたか、第一回の裁判があつて、その時からずっと傍聴しているわけです。それからその人たちに始めて会いに行ったのは、



市民を守る市民

二月の二十日でした。それから今日までなにはなしに面会をしたり、差し入れをしたり傍聴をしたりして、一年たつてしまひまして。

——今のような、救援のお仕事を始める前は、何かこういうような運動をなさっていたのですか。

そう聞かれると、ちょっとこまるんですけどもね。戦前に少し。ですから、ずい分と昔のことです。で、あとで除名になりました。そんなようなことが、ありましたけれども。

——息子さんが、逮捕されてまだ中に入

つているのだそうですが。

去年の十・二一です。府中に入っているのです。いつ出て来ますか。ちょっとわかりませんね。長いだろうと思うのですが。私が生きているうちに、帰ってきてくれればいいと思いますけれど。

——普段のお仕事は、何をなさっているのですか。

日雇いです。失対ですね。ずっと。今は、夫はなくなりまして、子供たちは、それぞれ家庭を持って独立していますから私は一人でやっていなくてはね。本当は私の職場に来てもらった方がいいかとも思つたのですが。

——年を取った方が、体実際に動かし活動していらつしやるのを見ると、私たち若い人間は、安心するのとか、勇気を得るといふことがあるのですが。いやなところも、ありますよ。私たちの年代の人が、自分が経験した、という上立つて押し出してくるガンコさみたいなもの、私自身にもあるんだと思うのですが、そういうのは、非常にいやですね。同じ年代の人と仕事をしていて。

それと同時に、うんと若い人たちの中にも、私たちの年代が持つているのと同じ質のガンコさがありますね。本当はその二つのガンコさが結びついたところから何か新しいものが出てくるのではないかとも思うのですが。

私はやるから君もやれ・私はやるから君もやれ・私はやるから君もやれ

米領事館へ波状デモを!!

全軍労は二四〇〇人ももの一方的な第一次解雇通告に対して二月八・九日と一九日からの二〇時間ストをもって抗議した。しかしやがて万を越すであろう失業者に職を与える計画は何一つ出していない。

日本の通産省という役所はこんなことを言った。「沖繩の人口は六〇万人くらいが適当なのであって現在の百万人では多すぎる」四〇万人はどこかへ消え

私はやるから君もやれ.....	3
アンボ街へノ.....	5
人間の渦巻で安保の中身を空っぽにしよう	
小田 実.....	6
小西問題特別弁護人に関する緊急アピール.....	8

〈特集 I〉

市民運動・自省と噴出のはざままで

市民運動・変革の方向.....	古山 洋三...10
虫、虫、虫われら虫は語る.....	14
自立した市民の運動はつづく	
——インタビュー構成.....	16
①金べが種まき・私服がほじくる	
②ひとりてやろう べ平連	
③ひとつの柔かな生命が虐殺されていった	
④農村を忘れてはいないか	
⑤梅田の行動はいけぬ々しくつづく	

〈特集 II〉

70年・停滞の季節をめけ出るために

全軍労ストをつつんで全県規模のゼネストへ	
仲吉 良新.....	24
社会党再生の道への前提.....	三田 岳...27
ミニコミが語る70年.....	31
労働運動はこれでいいのか.....	座談会...44
〈外信デスクダイアリー〉核拡防条約のねらい.....	50
〈書評〉「今週の日本」.....	51
〈詩〉 ゴルゴダの丘.....	長谷川修児...52
〈小説〉 好きになるということのは日記	
深沢 七郎.....	54
〈マンガ〉 毛ア.....	ふじ沢光男...56
失われた18年の青春を返せ.....	伊川 道夫...58
〈何がその後どうなったか〉 金嬉老事件	
さとみみのる.....	62
〈三面戯評〉 まことにモッテくるうる.....	65
ラッセルと日本.....	市井 三郎...66
〈高校生のはろば〉 立川高校生の往復書簡.....	67
〈アンボ講座〉 ■写真を撮らせない権利.....	70
■公明党よまず行動で...	
■反戦派高校生になる方法	
〈新日本案内〉 東京・北爆5周年デモ	
小中陽太郎.....	72
〈市民運動入門〉 個人の自発性と個人主義	
吉川 勇一.....	74
〈グラビア〉 F・シャーマン・イン・ニイガタ	
編集部.....	35
〈表紙〉.....	柳生弦一郎...1
〈この人と語る〉市民を守る市民.....	2
〈フォーク・ソング〉20世紀の谷間から.....	75

■次号(3月9日発売)の特集は「教育の状況」の予定です

てくれというわけだ。ベトナム人を地球上から消滅させようとした米軍とその片棒かつぎの佐藤政府は、今度は沖縄県民を抹殺しようというのだろうか。

二月下旬、第三波のストは島ぐるみで準備されつつある。私たちは私たち自身の抹殺を拒否し、このストに連帯して各地の米領事館へ、また自民党県連へ波状デモをくり返し、人間の渦巻きで包囲しよう。

特に札幌、仙台、東京、横浜、名古屋、神戸、福岡のみなさん、ただちに米領事館への連

続デモをノ
(神戸では2月15・18・20・21
23・25日にデモり、連日の行動を準備中)

ステッカーといってもそんなに大変なものじゃない。たったの二字「反戦」とだけ書けばいいんです。もうわかったでしょう。そう、あの「自衛官募集」という言葉の前にはりつけて「反戦自衛官募集」にするわけ。みんな一枚か二枚のステッカーをはるだけで、町中に反戦ポスターがあふれるわけです。どうですかあなた一枚。

このごろ、いやに自衛官募集のポスターが多いと思いませんか。あのポスターを見ると、すぐ破りたくなっちゃう。でもよく考えなです。ただ破ってしまふのは、もったいないって。そこで提案なんです。みんなステッカーをつくりましょう。

自衛隊員にアンチ安保を

六号の本欄に「自衛隊員にビ

ラをノ」という私の拙文がのっていた。その中にあった小西君の「アンチ安保」のビラの大量印刷は、第二・第三の小西をノ東京行動委員会から出されることになりました。

私の提案に賛同されたかたは、同委員会から五十枚、百枚単位で買ってください。

第二・第三の小西をノ東京行動委員会の連絡先は、三鷹市牟市五十一八一。

(東京・公務員・大竹茂)

西口地下広場へ行こう

新宿駅地下広場が通路ではないと思う人は地下広場で何かするべきだと思ふ。フォーク集会が弾圧されたからといって、地下広場で何もしないのは、おかしいと思う。そこでぼくは、西口地下広場でまずピラマキをやるうと思つてゐる。西口のフォーク集会の事件で二人も起訴されている時に、そこに集つた一人一人が彼らと同じ立場にあると考え、何かをしなければ、ならないのではないだろうか。だれかが始めなければ、だれかが動き出さなければ、「ひろば」はできない。だからぼくは、一人でピラマキを始める。多くの意見に賛成の人、西口で何かをやってください。

(東京・一人ゲリラ)

自主卒業式の炎を

全国の高校生諸君、現体制下高校の欺瞞的卒業式の「形式主義」を打破ろう。学校当局による、一方的卒業式を認めることは、入学以来三年間失い続けた、我々の主体性を最後の最後まで失うことになる。おしきせの送辞、おしきせ答辞、体制側の人間である教師たちによつ

て、形作られた形骸化卒業式を排撃して、自主卒業式をおこなおう。入学式に聞いた「自由な校風」の自由の欺瞞性を知つた我々に卒業式でまた自由を説く教師たち、彼らは教育者であることを自ら拒否しているのだ。我々は高校教育のすべての告発として自主卒業式への炎を燃やそうではないか。

(群馬県・高校生・M)

「週刊アンポ」への苦言

小生一中学教師です。「週刊アンポ」を中・高校生に読ませようと努力しております。毎号十部前後購入し、町で会う卒業生(高校生)などにくばつております。現在中三担任のため、クラスの生徒にも自由に読ませております。優秀な生徒の間では、他のクラスの生徒とも連絡をとり読んでおり、少しずつものを考える生徒がふえつつあります。

しかし第六号にのつた寺山修司氏の「解剖標本になつた花嫁」はいけません。これは、中学生には絶対に読ませることはできません。まだものを考えることができない連中(多くの生徒がそうですが)がああべーじだけとりあげて、わいわい騒いだら、小生の地味な努力もだい

なしになってしまいます。

(横浜市・教師・O生)

中学生への呼びかけ

今、これを読んでいる中学生諸君、我々は余りにも、形式的教育や無味乾燥な思想を押しつけられてきたとは思われないか。ここで、すべての価値観を問い返してみよう。なにか新しいものが見えるはずだ。

今、すべての中学生は、あらゆる所で、共に考え、連帯し、コミュニケーション、意志表示の場を持つべきだ。そこで、人間性を求めてやまぬ者、反戦の意志を持つ者、十数名が集まつて、このような場を持つために、三多摩反戦中学生連合をつくつた。三多摩、及び近辺の中学生は、共に考え、行動しよう。また、あらゆる所でこのようなものをつくることを提案する。

(連絡先・東京都三鷹市牟市5-18-11 もののべなおき方 三多摩反戦中学生連合)

アンポ紙面の分譲について

前略、アンポ紙の企画について提案します。結論は、ページぐらいを手始めに20区画設け、一区画単位に各々平連その他に

分譲又は編集委譲することです。(解放するといいたいのが、財政的な面もあるのだ)

いまのアンポはページ数からして物足りない感じが有り、市民運動の武器を標榜するにはもつと津々浦々の声と活動が主体であるべきです。それには多くの大衆が必要ですが、在来の投稿や読書欄で(だけでは)代えられないと存じます。又、一般に雑誌は広告欄やPRのページのスペースを取っていますが、この部分を発展的に採用し、各々平連等の活動に分轄利用させることです。先ず広告を出し、「格安分譲」一區画千円権利十号二千円。安保フンサイノ反戦ノの根拠地を二十区画限り、早いモノ勝ち、但し営利目的、体制擁護目的オコトワリ

権利を得た団体はこの欄を自由に使い行事予定、運動の連絡意見及び論評の場にします。いかがなものでしょうか。

(葛飾平連 阿部 裕)

ミニ・コミ運動を!

現在のマス・コミの大勢は自主規制とやらで、事実を歪曲して報道し、双手をあげて体制の世論づくりに精を出しています。たまにまともな記事のをのせ

ますが、目立たないように小さな扱いをしています。よく新聞を読んでいない人ではないと見落しがちです。総合雑誌や週刊誌でもかなり深く問題を掘り下げた記事や文章のりますが、大衆受けせず、あまり知られません。そこで、私達がマス・コミを通じてあるいは体験で、あるいは口コミで知りえた真実をミニ・コミにして、大衆に還元してゆき、マス・コミの体制的世論づくりに少しでも楔を打ち込んでゆくことが、大衆情報化社会における情報闘争の方法だと思ひます。街頭で、職場でミニ・コミ運動を展開しよう。はじめのうちは、相手にされないかも知れないが、やがて固定ファンもできるだろうし、ミニ・コミをきっかけとして、いたるところで討論でも巻き起こせたら、人間の渦をつくりあげるうえで喜ばしいことだ。私達は近く、第一号のミニ新聞をつくり街頭でまく予定でいる。

下からの民主主義の定着をめざす、手づくりの民主主義の一手段として、ミニ・コミ運動を提案します。

(名古屋市、公務員、野田隆 裕)

☆旭川へ平連。週刊アンボ読書会 3月6日午後6時より旭川労働会館にて(毎月隔週の金曜日)連絡先り旭川市春光町一区十条 勝浦功一

☆市川・松戸へ平連。定例集会 2月23日、3月2日午後7時より市川五丁目会館にて9時まで(毎週月曜日)連絡先り千葉県市川市南八幡4の4の15 山田英男 氣付

☆大垣へ平連。定例デモ 2月22日午後2時より大垣城西広場にて集会その後デモ(毎月最後の日曜日)。

☆カンパ活動およびピラ配付 3月1日午後4時より大垣駅前にて(毎月最初の日曜日)連絡先り大垣市藤江町2の210 藤江明世 氣付

☆岡山へ平連。定例デモ 3月7日午後5時30分、岡山駅前に集合その後デモ(毎月第1土曜日)連絡先り岡山市津島岡大西宿舎Cの2の2 日下部 氣付

☆上福岡へ平連。定例集会 3月1日、8日午前11時、東上線福岡駅前広場にて集会 午後1時より行動自由(毎週日曜日)連絡先り不明、知らせ下さい。

☆金沢へ平連。定例デモ 3月8日午後3時、中央公園集合その後デモ(毎月第2日曜日)連絡先り金沢南郵便局私書箱25号 金沢へ平連 氣付

☆川崎へ平連。連絡会議 2月26日、3月5日午後7時から西川宅(東横線住吉)にて(毎週木曜日)連絡先りTEL044の41の5360

☆京都北地区反戦市民の会。定

例学習会 2月28日、3月7日午後6時より鳥丸上立売同大学生会館会議室にて(毎週土曜日)☆北多摩へ平連。定例デモ 3月8日午後2時より清瀬芝山遊園地集合その後清瀬町内をデモ(毎月第2日曜日)連絡先りTEL0424の91の4805

☆グループCAT。定例デモ、討論会 2月22日午後2時より中野新井菜師公園に集合その後デモ。後討論会(毎月第4日曜日)連絡先り中野区南台2の35の2 高田方 石川たか子 氣付

☆国分寺へ平連。定例集会 2月26日、3月5日午後7時より集会、場所不明(毎週木曜日)連絡先り国分寺市東元町3の14の22 宮野孝 氣付

☆小金井反戦市民行動委員会。定例集会 2月28日午後6時より小金井市民会館にて(毎月第2土曜日)連絡先り小金井市本町5の38の3 野口英次方 小金井反戦市民行動委員会 氣付

☆茅ヶ崎アンパン共闘。反戦、反安保フォーラム集会 2月28日、3月7日午後5時から茅ヶ崎駅前広場(毎週土曜日)☆静岡へ平連。定例デモ 3月1日午後2時よりスンプ公園の噴水前に集合後デモ(毎月第1日曜日)連絡先り静岡市両替町2丁目6の3 大久保満男 氣付

☆自由を我等に。筑豊市民学生連合中学解放学生戦線。定例学習、討論会 2月28日、3月7日午後2時より5時まで、場所不明(毎週土曜日)連絡先り福岡県飯塚市飯塚郵便局私書箱25号 自由連合 氣付

☆新宿へ平連。定例学習会 2月28日、3月7日、時間、場所とも不明(毎週土曜日)。定例デモ。毎月第3土曜日午後4時、大久保公園に集合その後デモ。連絡先り新宿区西大久保2の206 古屋能子 氣付

☆雑司ヶ谷へ平連。定例集会 2月28日、3月7日午後3時より鬼子母神にて集会(毎週土曜日)連絡先り東京都豊島郵便局留 中川龍之輔

☆所沢へ平連、狭山へ平連。定例デモ 3月15日午後2時より新所沢緑町公園集合その後デモ(毎月第3日曜日)連絡先り所沢市久米1234 所沢高校内「形而上学研究會」 氣付

☆名古屋へ平連。「週刊アンボ」読書集会 2月28日午後5時30分より愛知労働文化センターにて。連絡先り名古屋市中区新栄町2の1 高木ビル 名古屋アンボ社 氣付

☆長崎へ平連。定例デモ 3月1日午後2時より広馬場湊公園に集合その後デモ。週刊短信ピラ配付。3月1日、8日午後から浜町アーケード入口にて。定例事務局会議。2月25日、3月4日午後6時30分から地区労3階またはへ平連事務所(西坂公園前)連絡先り長崎市目覚町4の44 氏家久博 氣付

☆長崎へ平連。定例デモ 3月1日午後2時より広馬場湊公園に集合その後デモ。週刊短信ピラ配付。3月1日、8日午後から浜町アーケード入口にて。定例事務局会議。2月25日、3月4日午後6時30分から地区労3階またはへ平連事務所(西坂公園前)連絡先り長崎市目覚町4の44 氏家久博 氣付

☆反安保キリスト者連合・反万博市民共闘。反万博民例デモ 3月8日午後3時より扇町公園に集合その後デモ(毎月第2日曜日)

☆茅ヶ崎へ平連。定例行動 3月8日午後1時より市営球場裏

☆たになをと。小黒弘也。連絡先りTEL267の2471

☆ベトナムに平和を。非暴力反戦市民の会。定例デモ 3月1日午後1時より寿兒童公園より神社公園までデモ(毎月第1、3日曜日)連絡先り宮崎県都城市川東町 ベトナムに平和を。非暴力反戦市民の会。

☆三重へ平連。定例デモ 3月7日午後2時より津市津新町公園集合後デモ。連絡先り三重県志那郡嬉野町山本 氣付

☆鶴岡へ平連。定例デモ 3月8日午後1時30分より鶴岡公園からデモ(毎月第2日曜日)連絡先り鶴岡市末広町19の18 相沢伸一 氣付

☆三鷹反戦ちやうちんデモ。定例デモ。3月1日午後6時30分、中央線吉祥寺駅南口武蔵野公園堂前に集合7時出発(毎月1日、15日)連絡先り三鷹市井の頭5の8の11 もののべな 氣付

☆「望月優子と友達」の会。演劇「沖繩」 2月17日から3月1日まで日本青年館大ホールにて、時間不明連絡先り千代田区神田佐久間町3の21 やよいビル内 望月優子と友達の会 氣付

☆もろもろのフォーク集。フォーク集会 毎週土曜日夜刻、新宿駅西口広場にて、連絡先り不明、知らせ下さい。

☆横浜フォークゲリラ。フォーク集会 2月27日、3月6日午後5時30分から横浜駅西口にて(毎週金曜日)

☆たになをと。小黒弘也。連絡先りTEL267の2471

☆たになをと。小黒弘也。連絡先りTEL267の2471

人間の渦巻で

小田 実

安保の中身を空っぽにしよう

二月というと思い出すことがある。もちろん、北爆のことだ。五年前、北ベトナムに対するアメリカ空軍の爆撃が始まり、そして、ベ平連の運動が始まった。

その後、ある総合雑誌がベトナム戦争の特集号を出した。「ベトナム戦争はどのようにすれば解決するか」——そうした題名のアンケートがなかにはあって、三十人ほどの人が意見を述べていた。みんな、知識人という名で呼ばれていい人たちである。さまざまな考え方の人がいて、さまざまな意見を述べていた。私もその一人だった。私も自分の意見を述べたのだが、私一人だけが他の人たちとちがっていた。他の人たちがみんな左翼で、私一人だけがちがっていたというのではない。あるいは、その逆でもなかった。たいていの人がベトナム戦争に反対していて、北爆を非難していて、私もその一人だった。

ちがいは、——そう、次のようにも言

えばよいのか。ほかの人たちは、アメリカの情勢について書き、日本の情勢について書き、ベトナムの過去、現在、未来について語り、ジョンソンはこうすべきだ、日本はこうすべきだ、ベトナムはこうすべきだ、と述べていた。私はそんなことは何一つ言わなかった。ただ、私は、自分はベトナム戦争に反対だ、と書いた。その反対の意志を表明するため、あるいは、もう一つ言って、その意志を実現するために、これから自分が何をやるか、ということだけを述べていた。

私の友人、知人たちがそのちがいのことを私にむかって言ったから、ちがいを言うより、対比はあざやかであったにちがいない。

「アホウに見えるで、あんなこと言うたら」

一人が心配顔に言った。彼は次のようにもつづけた。「あんなこと言うたら、きみはほんまにやらないかんようになる

で」

「そやなア」
私は自信なげに言った。

そのことだけ昨日のことのようにおぼえている。

2

私が何故、そんな意見を書いたか。自分でもそのときにははっきりしていなかったことなのだが、たぶん、私は、自身のことをさておいて、世界について語ることにウンザリしていたのだろう。

アメリカの情勢について語り、ジョンソンはこうすべきだ、と説いたところで、世界はどのように変わるものではない。世界を変えるために、自分がどうするか——いや、そう言えば、大げさすぎる。革命家でも英雄でもなんでもない、一人のふつうの人間である（ふつうの人間にすぎない、と私は言っているわけではない。ふつうの人間である、と卑下もてらいもなく、私は事実を言っているの

だ）私には、ただ、ベトナム戦争は、そんなふうには他人事のように語ることですませる問題ではなかったのである。

「ベ平連」の運動はたんなる同情から始まった、とよく言われた。今でも言われる。そのたびに私は、そうだ、と答える。かつてもそうであったし、今もそうなのだ、と卑下もてらいもなく答えておきたい。

一つのことだけを言っておこう。同情はレンピンとはちがうということだ。レンピンは、自分を高みににおいて、他人の悲惨を見下すことだろう。それをあくまで他人事としてみなすことだろう。

同情は、他人の身になってものを考えるということだ。考えるばかりではない。たとえば、ベトナム戦争のなかのベトナム人の苦痛、あるいは、心の底、からだの底からの怒りを自分のものとして感じるということ、それが、同情の根本にある。

ベトナム人のことばかりではない。ベトナムの前線に駆り出されたアメリカの兵士たちの立場、状況を自分のものとしてとらえるそれが同情だ。彼らは、自分の意志に反して権力によって死地にまで追いやられた被害者だろう。しかし、同時に、彼らはまさにそうであることににおいてソソミの大虐殺を行なう人間たちであるのだ。私は彼らのことを他人事ではないと思った。それゆえに、自分をそうした立場、そうした状況から切り離さな

ければならないと感じた。そして、私はベ平連の運動を始めた。

ベトナム人に戻って言えば、ベ平連での私の出発点は、私がベトナム人ならどうするのか、何をなし得るのか、ということであったように思う。それは、そのまま、私がアメリカ人ならどうするのか、何をなし得るのか、に通じるだろう。日本人としてどうするのか、何をなし得るのか、いや、ひとりの人間としてどうするのか、何をなし得るのか私はそれを考え、「ベ平連」の運動を始めた。

この態度は、決して、自分を高みに置いて、世界を眺める態度ではない。自分がみんなと同じところに立っている、背丈がほぼ同じであるという状態のなかにいることを自覚する態度だろう。自分が九天の高みを飛翔する鳥ではなくて、地上をはいまわる一匹の虫であることをはっきり認める態度だろう。私はそこから

——そこからしか出発し得ない自分を感じた。それが、「ベ平連」の原理だった。すくなくとも、私にとってはそうだった。

3

私は小説を書く人間なので、小説のときとときを考えてみる。そのときふしぎな事実に今さらのようにあらためて気がつくのだが、それは、小説の主人公がすべて人間であるということだ。

あたりまえのことを言うな、と笑わないうでいたきたい。私が、たとえば、国家権力について小説を書くとする。論文を書くなら、私は国家権力についてのさまざまな事実をそのままに書きあらわすことができるかも知れない。しかし、小説を書くとなると、どうか。

たとえば、国家権力は朝七時に眼ざめたりしないだろう。七時三十分に朝メシ

を食べたりしないだろう。八時十分前に駅に駆けつけて満員電車に乗り込んだりしないだろう。つまり、国家権力を小説に書くなら、国家権力そのものではなく（しかし、考えてみると、「国家権力」そのものというものがほんとうに存在するのか）、「国家権力」の手先である機動隊員を書きあらわすよりほかに術はないのだ。具体的に言えば、一機動隊員の生活のこまかなヒダ、思想、感情、欲望、心理、その他のもろもろのなかにたたみ込まれたさまざまなものを描き出す——小説家はそうするよりほかに方法をもたない。

ここで困ったことがおこる。彼が人間である以上、そして、私も人間である以上、私と彼はどこかで強く結びつく、ずるずるとつながった存在であるにちがいない。たとえば、私が彼と正反対のところに立とうと、私と彼はまぎれもなくつな

がっている。

しかし、それでいて、彼が家庭でどのような善良なパパであるかと、同時に学生たちを理不尽に殴りつける機動隊員である事実は残る。ソシミの大虐殺を行なった人たちがおどろくほど「正常な」人間たちであったという事実と、それはきわめて密接につながっている。いや、つながっているとえば、私もまた、彼らと、その事実をふくめてどこかでつながっているのではないか。それがそうだとすれば、私はいつ、どこで、どのようにして、そのずるずるべったりのつながりを切ることができるのか——私が「ベ平連」の運動を始めた動機には、まぎれもなく、その事実認識があり、一種の決意があった。

ということは、今もしここに、同じ事実認識をもちながら、同じ決意を強力な行為のかたちであらわす人間がいるな

闘うベトナム人留学生を支援する

講演と映画の夕べ

3月 日(月)

9:00 PM

全電通会館

主催

ベ平連

ジャテック

大泉市民の会

ベトナム反戦ちようちんでの会

ら、私と彼とは、おそらく人間存在のものとも根本的なところで切り離しがたくながっているにちがいない。自衛隊の隊内で「アンチ安保」のピラをまいた小西誠氏は、そうした人間の一人だった。私と直接につながる人間だと言ってよい。

4

そうした人間の数をふやすことはできないものか。いや、そんなふうに他人事のように言うのはよそう。私自身が、そのために、何を、どうすればよいのか——小西氏の出現は、私にその問題を突きつけて来たのにちがいない。そのためには、たとえば、自衛隊、たとえば、機動隊、たとえば国家権力という名で呼ばれるさまざまな制度機構のなかの人間ひとりひとりに眼を向けて行く必要があると、私は自分にむかって言う。彼らのなかに私と同じ人間を認め、彼らが人間であるゆえに、まさにそのことのゆえに、彼らの非人間的行為を徹底的に糾弾し、同時に、彼らのなかに人間としての可能性を見出す。

そうした人間の数が増えることは、たとえば、自衛隊がたとえ存在しつづけるうとも、有名無実なものとなることを意味しているにちがいない。同じことは他のさまざまな国家権力の制度、機構についても言え、企業についても言えるだろう。いや、安保体制そのものについても

言えるにちがいない。たとえば、安保条約という名前のものが存在しつづけるうとも、その中身は空っぽのものになっている——私たちは、「人間の渦巻」を権力の内部にまでひろげて行くことによって、それをする事ができる。いや、今こそしなければならぬのだろう。

5

「安保をつぶす」運動は、決して、終わっていない。それどころか、今やっと始まったばかりではないのか。小西氏の出現は、私にそのような事実認識を強いる。次のように言えばよいのか。長いあいだかかって、私たちはようやく小西氏をもつことができたところにまで来た。そして、ほんとうのたたかいはまさに今始まったのだ、と。

私は小西氏に「同情」する。それゆえに、いっしょに行動して行きたいと思う。人間の渦巻をひろげ、安保の中身を空っぽにして行きたいと思う。小西氏は「自衛隊粉砕」、あるいは、「解体」を大所高所に立って叫ぶ代りに、論じる代りに、自らの行動でその第一歩に乗り出している。

さて、私たちは、いや、私はどうするか。それが「同情」のほんとうの意味だ。

緊急アピール

小西君の問題について、新しい運動を起したいと思います。運動は三つの部分をもちます。一つは、小西君の裁判についてのたたかい。二番目には、第二、第三、第二千、第三千の小西君を自衛隊のなかにつくり出して行く運動です。三番目には、市民のあいだに、この運動をひろげて行くこと——三つはバラバラに存在するものではありません。三つがつながり、大きく全国にひろがることで、はじめて、一つ一つが大きな力をもつ。裁判そのものについても同じです。裁判所で、自衛隊違憲の判決を勝ちとることはきわめて重大です。私たちは今すぐには、そのために全力をつくさなければならぬ。しかし、それだけでは十分ではないのです。同時に、第二、第三の小西君の出現によって自衛隊の中身を空っぽにして行くことはもっと必要でしょう。それには、市民の支援が必要だ——いや、それはあまりにも他人事めいた言い方です。市民が小西君の問題を自分の問題としてとらえ、自分たちで運動をつくりだして行くことが、もっとも重要なことではないでしょうか。

その一つの手だてとして、私たち小西君の行動主義を支持する人間たちの手で、今、「みんな「民衆の弁護人」になろう」という運動を起しつつあります。

これは「特別弁護人」の制度を民衆ひとりひとりのものとし、同時に、その人たちを中心として運動をおこしていこうとするものです。書式は左の通りです。今すぐにも書いて百円をそえて出してください。「第二・第三の小西を、行動委員会」(新潟市西郵便局内私書箱145号)あてに送って下さい。第二・第三の小西を新潟行動委員会、「第二・第三の小西を東京行動委員会」、「べ平連」がきも入りとなって、各地で、この「民衆の弁護人」を中心とした集会を開き、運動をおこし、五月から開かれる裁判にそなえます。

特別弁護人選任届

被告入
右の者に係る自衛隊法違反被告事件について
氏を特別弁護人に選任
いたしましたので連署で届出いたします
昭和四十五年 月 日

被告人
住 所
新潟地方裁判所御中

キトリ線

【弁護理由】

註(1)記入は弁護人の氏名・住所・年月日・弁護理由のみ。氏名の下に印鑑を。

註(2)弁護理由は、「二行で、自分が小西君を弁護する理由を書いてください。もちろんあなた個人の考えた理由を、たとえば自衛隊は違憲だから、あるいは小西君の考え(人民武装論)を支持するから、あるいは小西君の行動は人間として当然のことだから……」さまざまな原理によって、小西君のたたかいを強く支持して行くこと——それが今もっとも必要なことです。

市民運動

自省と噴出のはざままで

アンポのンの字はおしまい
のン、アンポのポの字はポ
シやるのポ。つつけてみり
やあ、運動はみんなポシヤ
っておしまい。これで世の
中、安泰だあ。浮かれて、
センじゃ、万博へ！

特集

安保ということばが、一九
七〇年のはじめから電波や
紙上から消え去っている。
消え去った安保を、いま、
市民運動は確実に掘りおこ
しつつある。

アンポのアの字は安泰のア、
ですか？ 佐藤さん。

変革を求める

市民運動の方向

古山洋三

特集1

1

ベ平連全国懇談会には北海道から鹿児島まで、二百五十名の人々が一年間のさまざまな運動と経験をもちよって語りあった。そこにはベ平連運動のもつ不思議な活力がみなぎっていた。

十・十一月の「佐藤訪米阻止」のたたかいを経て、ベ平連運動はどこへ向おうとしているのだろうか。一月三十一日・二月一日の両日東京で行なわれた全国懇談会は、北海道から九州鹿児島まで、二十七都道府県の一・九グループから約二百五十名の参加者を集め―これは過去のどの全国懇談会より多い数であった―熱気のこもった討議を通じてベ平連運動のもつ「不思議な」活力をハッキリと示した。もちろん万事がうまくいっているというのではない。「人数が減った」「なか

なか市民の間にひろがらない」「ベ平連運動が何を求めているのかわからない」(大田ベ平連)といった問題は数多く出されたし、「女子高校生がベ平連運動はふつうの政治運動ではないのだから参加させて欲しい」と投書をしたところ、学校が筆跡鑑定までして探し出し、始末書をとった(鹿児島ベ平連)というムチャな弾圧を加えられているところもある。しかし、参加者の気分は一樣に明るかったし、今後の方向をそれぞれにつかみ出して発言していたといえる。ここでは、まずベ平連運動全般にわたる方向についていくつかの問題を考え、ついで、今後の課題として提案された問題をまとめていきたいと思う。

私自身、昨年九月の「ベ平連ニュース」に運動を多元化する必要を強調し、この会議にむけても「一人一人が追究す

る個別課題をもつこと。各ベ平連グループは一つの中心課題をにぎって離さないこと」を提案したので、まず、この問題から入っていききたい。

この点については実に多くの発言があったが、関西ベ平連の報告をやや詳細にとりあげてみよう。問題の出発点は「われわれはあまりにも事実について知らないすぎる」ということと、秋の行動には常に五〇〇人を超える参加者がありながら事務所にあらわれるのは一〇〇人くらいで「あとの人はどこで何をしているのだろう」ということであった。そこから生まれたのが「研究・行動提起集団」という考え方で、五〇〇人の参加者一人一人にアンケートし、問題関心別にグループを作るよう働きかけていくというのである。「ソニミ虐殺」「フォーク」「沖繩」といったグループ、そして、すでにはじまっ

ている「安保ゼミナール」では今度、信太山の自衛隊の問題をとりあげ、その研究、暴露から行動へとすすんでいこうとしている。「安保」「社会変革」といった大状況については福岡ベ平連の報告にあるように、私たちはいわば手さぐりといった状態でさしあたり進んでいくほかはない面がある。しかし問題を個別化していく場合に私たちは限られた力でも十分にその問題を知りつくし、こういうことをすれば勝てる、少なくとも勝ちに近づくという一つ一つの行動を提起していくことができるだろう。「まず行動をそして行動を通して問題が見えてくる」ということは過去五年間の運動をつうじてベ平連運動が作り出した最大の財産だ。しかし、それがいちずに「佐藤訪米阻止」「安保粉砕」の街頭行動へと向けられたとき、厚い国家権力の壁にぶつかり、どこから

突き破ってよいかわからないというトマ
ドイと、無力感・むなしさが小さな自分を
圧倒するということになりかねない。更
なる実力」を結集して体当たりすることの
必要性を否定するわけではないが同時に
情況の網の目を一つでも二つでも喰ひ破
っていくこと、そこで小さな「人間の渦
巻」を無数につくりだしていくことが私
たち一人一人にもとめられていると思
う。人間の「渦巻」は大きな一つの台風
の眼のまわりに作られるのではなく、無
数の「渦巻」の集まりとしてはじめてで
きるだろう。といって、いうまでもな
いことだが、六・一五や十・十のような
全国的な統一行動の必要性がないとい
うことにはならない。こうした行動は、そ
れ自体大きな政治的意味をもつものだ
し、そこで新しくエネルギーが引き出さ
れることもたしかなことである。要は、

このエネルギーが一日だけのものに終わ
らないことであり、そのためには、一人
一人が日常的に「渦巻」を作り出す中心
となっていくかなければならない。いいか
えれば「一人でも何かをはじめた自立し
た運動者」となることが必要なのだ。ベ
平連とは何かと問われたなら、私はため
らうことなく「一人でも何かをはじめた
自立した運動の連合」とこたえるだろ
う。一人一人がこのような運動者にな
ることは決してたやすいことではない。
しかし一日のデモをいわば免罪符とする
という運動ではベ平連は一日もつづかな
いということはもはやたしかなことだろ
う。それではこうした自立した運動者に
なるということは、どのようにして可能
となるのだろうか。ベ平連運動の最大の
長所が一つのイデオロギーにもとづく運
動でないということは自明だから、とい

うよりは、多種多様なイデオロギーを含
む集団であることにベ平連の活力の秘密
の一つはあるのだから、自立した運動者
としての支えをイデオロギーに求めるこ
とは賢明ではない。となると自分がにぎ
ってはなさない個別的な課題を持つとい
うことがさしあたり可能な唯一の方法だ
ろう。と同時に、その課題の意義づけは
いっかりしなければならぬ。各地で学
習会や合宿が行なわれている報告があっ
たが「運動」に追われてその行動の意義
をたしかめていく努力が今までのベ平連
運動にやや不足していたことはたしかな
ことだ。この点はおきなっていくかなけ
ればならない。ただ関西ベ平連のいうよ
うにそれが「研究Ⅱ行動提起」というかた
ちのもので常にありたいと思う。

多元化・個別化ということを考える
とき、必ず出てくるのは地域での運動の
問題である。たとえば東葛ベ平連は次の
ようにいっている。「人数が少ないから
地区においてあまり運動をやらせず、い
つも東京、あるいは三里塚に出かけてい
く。そうすると柏市民に対するアピール
がおろそかになる。すると東葛ベ平連の
存在にも気づかず、東ベともに行動し
ようという人はでてこない……全くの悪
循環である……以上のことを踏まえた上
で、一つの大きな柱が出てくる。すなわ
ち地区における運動の展開である。その
具体的な計画としてのフォーク集会を通
じて市民の反戦感情を高めること、柏に

おける集会・デモ、ステッカーはり、カ
ンパ活動等があげられる」

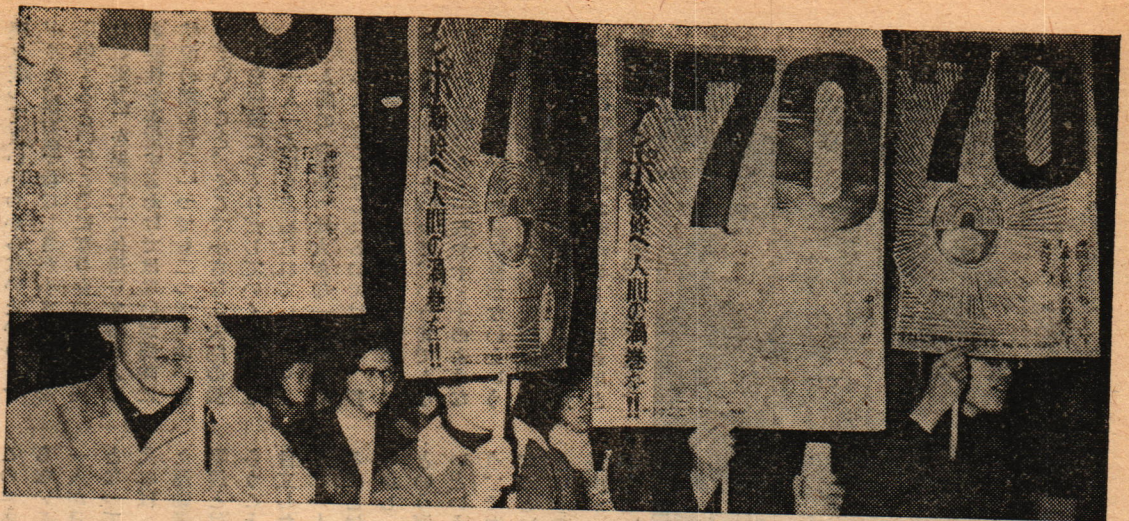
京都北地区反戦市民の会の活動はもう
一つ先をいっている。「ピラ撒きはしな
い。一軒一軒に必ず入れていく。それも
誰にでもわかる言葉で。たとえば、佐藤
をアメリカにやらしまへんで、というよ
うに」

福岡ベ平連の報告では、昨年八月以降
十一月までの特徴を「この時期の重要な
点に、地域ベ平連の結成がある。各大学
をはじめ自衛隊のホークミサイルの設置
が予定されている飯塚に、またCO患者
問題をかかえた三池に、そして久留米に
と新しいベ平連ができる。これは求心的
（急進的ではない!!）ないし閉鎖的に陥
りがちであったこれまでの運動に、遠心
的な作用を与えるとともに行動と実際の
な問題意識の多様化を与えるという意味
で必要なことである」とまとめている。

（ベ平連ニュース五三号）

「地域」での活動の重要性はいまさら
いうまでもない。ベ平連運動はいまみて来
たようにこの方面でも着実な歩みをすす
めている。しかし杉並革新連盟の人が懇
談会の席で再三のべた「日常闘争」「地
域闘争」という考え方には無条件で賛成
はできない。運動が日常的に追究されな
ければならないということには異論はな
いが、日常的につづけるということは必
らずしも「地域」の問題とむすびつくと
いうことにはならないからである。私と





しては「地域化」の必要性を強調した上で、それをさしあたり、多元化・個別化の方向としてとらえたいと考えている。

「地域」とならんで「職場」の問題があるのだが、この点では残念ながら私たちの経験とはばしい。都職労ベ平連から「組合にはあきたらないが反戦には加われない」という人たちが「組合の中にベ平連を作ってもおかしくない」とベ平連を結成した報告があり、佐藤訪米数日前に羽田空港の従業員の手で「ベ平連」がつくられてもいる。自立した運動者がグループを作るとき、その単位は実生活上の便宜によって主として集まるのだし、たとえば「大泉市民の会」と名のついてもそれが大泉の住民だけで作られねばならないという理由はなく、現に他の地域の人も加わっている。市民集会池袋西口などという集団は、駅を通過するすべての人にひらかれているわけだ。私たちは、こうした考え方の上に立って、とくに「職場ベ平連」の問題について経験を重ねていく必要があると思う。それは単に集る便宜という以上に職場での課題を持つことになると思う。

ここでは十分にとりあげることができないが、同時にみだりに「反戦には加われない」という問題はきわめて重要であると思う。それは大学ベ平連にも共通していることであり、セクト、あるいはセクト化した全共闘に反撥を感じ、あるいはついていけないと考えている学生のなかでベ平連運動に加わっている学生の数は非常に多いと思われる。(たとえば宇大ベ平連)「大学ベ平連とは何か」という点について、懇談会でも十分な議論はなされなかったが、問題だけはハッキリと出されていた。全共闘のかくれみのではないか(神奈川大)「セクトからはみ出た学生のかくれみではないか」(声なき声の会)「セクトの引きぬききはげしい」(神戸行動委員会)などなど。反対に「ノンセクト」というセクトといった表現もきかれるのだが、私たちがセクトを責めてもはじまらないし、私自身、セクトに對し不愉快な思いをすることもないわけではないが、「やることをキチンとやっていけばいい」(荏原ベ平連)ということできしあたりは進んでいく以外にないだろう。ベ平連運動も含め、全世界的にみて「変革」を求める運動と理論は現在「過渡的」なものであり、そう簡単には解決しないと、私は考えている。不幸といえばこれほど不幸なことはないが、これが現在私たちのおかれている状況、大げさにいえば「世界的不幸」なので、短期(短気?)に解決を目指せば、それだけ「労

多くして功少ない」こととなる以外にない。ただ東京でも福岡でもそうだったが、超党派行動の「呼びかけ人」として「新左翼集団」のまとめ役をすることに今後はあまりエネルギーを使いたくないと思う。六月行動の原則「目的の一致と手段についての相互確認、相互の誹謗はしない」ということで、今後ともすすんでいきたいものだ。

しかし、「大学ベ平連」の場合は学園闘争との関連もあるし、「各大学ベ平連の大勢が一人や二人の個性ある活動家のみによって持ちこたえていたり、何度も消滅したりまたできたりしている状態にある」(中大ベ平連)という指摘もあるのだから、今までの学生運動になかった、かわった新しい運動を作り出すとともに、このへんでしっかりとした運動論をもつことが必要だと思うので、この点の努力を学生諸君に期待したいと思う。

最後に「運動」ということについて前田俊彦さんの発言を紹介して、ベ平連運動全体にわたる問題点については不十分ながら終りとしたい。

「闘争というのは勝つのが目的だが、人々の共鳴をもとめ、連帯の行動をもとめるのが運動だ。闘争は原理・イデオロギーが中心になるが、イデオロギーなしに運動はありうる。闘争は運動なしにはほろびる」前田さん自身、時間の制約もあって、「誤解をまねくかもしれない」という発言であったので、いざこれの点を

詳しく「週刊アンボ」誌上で展開してほしいと願っている。

さて具体的な行動の提案に入るのだが、もちろん単に項目を並べるといいうわけにはいかない。それぞれについて可能な範囲で意義づけをしていきたいと思う。

■非暴力直接行動について

「週刊アンボ」六号に、一・二非暴力直接行動の報告を寄せている吉崎秀一さん、ハノイ爆撃に抗議する米大使館前坐りこみ（六六年六月）以来非暴力反戦行動をつづけている金井佳子さんから、それぞれ一〇人委員会を作ろうというよびかけがあった。一〇人単位の小グループを無数に作り、このグループの連合によって四月～五月には千人規模、六月には数万の規模での「反安保」の坐り込みを行なおうというのである。ベ平連運動が国家権力が恣意的に定めた「合法性」の枠のなかにとどまることのできないことは明らかだが、同時に「合法性」の枠を最大限に押しひろげる努力を怠り、権力の違法な行使を徹底的に追及することなしに「実力闘争」にとびこむこともまちがいだろう。非暴力直接行動は原理的には「合法」対「非合法」、「非暴力」対「暴力」というむずかしい問題を含んでいるが、十一月闘争が全体としてたしかに「ゲバ棒」「火炎ビン」による実力闘争では打ち破れない壁に突きあたったということ

を考えると、ベ平連運動の方向の一つとして今後重要な意味をもつであろう。

■自衛隊闘争について

米軍兵士の反戦行動を支持する運動とともにこの会議で多くの人によってとりあげられた。「日米帝国主義軍隊を解体に導き、安保条約の根元を掘りくずす」（イントレピッド四人の会）という点の強調もあったが、この運動をすすめていくには「自衛隊員も人間であるという視点をもち」どこにでも居り、事務所はどこにでもある（少なくとも各県には連絡事務所がある）したがって「どこでもできる、誰でもできる運動だ（小田実）」ということが大切だ。小西三曹の問題を契機として「第一・第三の小西を行動委員会」が各地に生まれ、新潟ではとくに自衛隊員に対するピラ入りが活発におこなわれ、六人が道交法違反で逮捕されという弾圧も起っており、（その夜釈放された）「自衛隊員に対する働きかけは米軍兵士とはちがって、自衛隊法」にヒックかけられる危険もあるが、ある場合には逮捕をおそれず裁判で争うことも必要だろう（吉川勇）「二月中には自衛隊員の手によって作られる『新聞』が出る予定」そのためにも自衛隊員と仲良くなって隊内の不満や不正腐敗などについてできるだけ詳しく知りたい「小西問題を中心にして映画を作る計画がすすんでいる」「小西氏の裁判闘争を支援する活動をすすめて欲しい」

い」「二月十一日に自衛隊基地に対する一斉行動を起そう」等数多くの具体的提案がなされた。七〇年代におけるベ平連運動の大きな柱としてこの運動にとりくみたい。

■米軍反戦兵士支援運動

脱走兵通信に毎号報道されているように、脱走してJATECとともにたたかう米兵、JATECと連絡を保ちつつ反戦活動をつづける米軍兵士の数は増大する一方である。場所・資金あらゆる面でJATEC活動に援助してほしい。JATECの活動は、脱走兵の援助を含めて、反戦米兵支援の方向に大きく活動目標をかえている「WE・GO T・THE BRASS, KILL FOR・PEACE」をどんどん米兵にもちこんで欲しい「大泉・岸根で行なわれている反戦放送を全国の米軍基地にひろげてほしい」大泉市民の会（東京都練馬区大泉学園町二八三）に連絡し「とくに関西以西の米軍基地に対して行動をひろげてほしい」「三月二十一・二十二の両日、横須賀で米軍基地関係の全国連絡会議を開く」「四月に、米軍解体」といった題で三一新書から闘争を報告する本が出る予定」など報告も提案も具体的にだされている。ベ平連が創立以来つづけて来た日米連帯の行動として、この運動は確実に米軍に打撃を与えつつあるといえる。

■ベトナム留學生の問題

四月には「強制退去」をせまられる三人の留學生を守る運動を全国におこそう。すでに北海道では留學生をまねいて運動をひろげているが、あらゆる機会、あらゆるつながり（とくに三君はそれぞれ工学関係の専攻である）を考えて話し合う会を開こう。つきにのべる入管闘争との関連で、政治亡命権を確立する運動をおこそう。この点で「破鎖を求める人々」（一〇〇円）を利用しよう。

■沖縄問題

この点では、全軍労支援の運動を進めることが強調された。

■入管闘争

昨年、廃案になった出入国管理法がふたたび国会に上程される見込みが大きい。入管体制打破のたたかいとあわせて法案の成立を阻止する運動をすすめるなければならない。この点では「外国人の救援」について考える必要があることが華僑青年闘争委員会からも強調された。

■三里塚空港建設反対闘争

「週刊アンボ」六号にも詳しくとりあげられているが、強制測量をひかえて、支援カンパ・救援物資とあわせて、もう一度、なぜ空港に反対するのかという点で真相をひろめてほしい。土地収容委員に対する抗議をしてほしい。（千葉・ベ平連）

虫、虫、虫われら虫は語る

1月31日、2月1日新宿区体育館で行なわれたベ平連全国懇談会には、一年間の運動の経験と今後の展望について無数の声がきかれた。二日間の討議を三行でまとめると：

☆北見ベ平連

人数が少ないにもかかわらず分裂の可能性がある。

☆旭川ベ平連

高校生が秋期決戦より増え、自称アナキストという人も、増えている。ベトナム人留学生との懇談会を持つ予定。

☆札幌ベ平連

北海道は自衛隊が多いので、それに対する闘争を多くしたい。中学生、高校生、予備校生など学生が多くなっている。

☆十和田、青森ベ平連

10・26に三沢基地闘争があっ

たが、無関心な市民が多くて思うままにゆかない。

☆盛岡ベ平連

どうやって市民の中から参加者を得てゆくかが、最大の課題である。

☆八戸ベ平連

70年1月結成。

☆いわきベ平連

最近発足したばかりだが、二名のデモを毎回続けている。

☆群馬ベ平連

「橋の下大学」にならって「駅前大学」を組織中。半分ぐらいが会社員なのでなかなかデモができない。新聞にピラを入れようとしている。

☆千葉ベ平連

三里塚闘争の中で、意識の低い成田市民に対する訴えを強くしてゆきたい。全国ではじめて官庁に自警団が出来た。これを告発してゆきたい。

☆宇都宮大学ベ平連

栃木は反動的な地域である。

船田中の選挙地盤なので、あい

つは悪いヤツだということをは訴えてゆきたい。卒業してもやるんだという人を組織化してゆきたい。

☆東葛ベ平連

行動の主體的な位置づけをしたい。「東京から地方へ」ではなく地方から東京へ攻めのぼろう。人数が少ないからといって、ためらわず、市民へ積極的のアピールしてゆきたい。

☆神奈川大学ベ平連

岸根米軍基地へ定例デモをかけた。裁判所ベ平連を三人で結成した。裁判官と話をして、人民裁判所を夢んでいる。

☆横須賀、逗子ベ平連

ヤンキー・ゴー・ホームと叫んでいるような闘争は古いだろう。ネービー・ゴー・ホームと叫んでゆきたい。基地からの利益すら感じるような土地柄なのだから、横須賀基地の公開日を利用してゆきたい。自衛隊にも働きかけたい。

☆横浜商大ベ平連

九百人在学中にたった4人の仲間で、かつ学内に反戦平和運動の雰囲気がない。

☆川崎ベ平連

米軍基地へ反戦放送を。高校内に部落問題を組織。多元的方向性の中で行動の連帯を。

☆茅ヶ崎ベ平連

市民との断層がある。学生、教師が多い。公共施設を使わせてもらえない。

☆高崎経大ベ平連

ベ平連の名前をもう一度甦らせる。

☆埼玉ベ平連

参加者圧倒的に多い。中学生も多い。九月にはブラックパンサーを招いて集会をした。若い人が多い。デモ中心。

☆全国闘う中学生連帯

東京と埼玉の定例デモに参加、ピラまき活動、全国の中学生との交流活動。「全中共闘」全国中学生共闘会議」と共闘しようとしている。

☆新潟ベ平連、新大ベ平連

大体は「第二・第三の小西を」新新潟行動委と共に活動している。

☆「第二、第三の小西を」新潟行動委員会

機動隊に慣れ切ってはならない。基本的権利が抑圧されている時には、ひとつひとつ抗議してゆかねばならない。われわれ

の闘争は、自衛隊を解体させることが目的であり、裁判闘争で違憲判決をかちとることだけが目的ではない。全国どこでもが現地だ。だれでもがオルグになれる。直接行動とともに、間接行動も必要である。

☆金沢ベ平連

10月には高校生だけのデモが行なわれた。沖縄全軍労ストの支援活動をする。学生よりも市民の方が多い。11月決戦には、ベ平連が最前線に出ざるをえなくなった。

☆中野ベ平連

平均年齢が若い。もっといろいろな活動の型で枠を破りたい。「中野反戦行動」と改名するかもしれない。

☆新宿ベ平連

フォーク集会、出入国管理令反対ハンスト闘争、佐藤訪米についてのアピールに重点。沖縄全軍労スト支援活動。毎週土曜に学習会。デモ前日徹底的なピラまき、アピール。

☆フォーク・ゲリラ

フォークを歌って捕まった人、広場で捕まった人の裁判をどう闘ってゆくか。広場の人々の声が聞こえなくなったいま日本には新しいファシズムが成り立っている。オレが生きている以上ああいう形で声をあげざるを得ないという確信が裁判闘争

我ら虫は語る

の基底に流れている。

☆声なき声

駅頭、各戸にビラまき。徹夜討論会。全体的な盛り込みの運動を組織したい。「千人集会」の提案。

☆非暴力反戦行動

日常の生活の中で、体制・権力に迎合しない生活のクセを作ってゆきたい。

☆大田ベ平連

「自分たちは当面何を求めているのか」が十分にとらえられていない。荏原地区ベ平連、蒲田ベ平連との共同行動。地域の問題については混迷の中。

☆市民集会「池袋西口」

68年1月エンブラ入港の時、市民討論集会。

☆大泉市民の会

朝霞基地撤去闘争。はじめは中年の人が多かったが、最近では若い人が多い。朝霞反戦放送局は最近反応が強い。アメリカ帝国家主義軍隊は解体しつつある。

「小西三曹につづけ」「自衛隊

員はアメリカの反戦兵士に協力せよ」。ベトナム人留学生問題をとりあげている。

☆三鷹ちようちんデモの会

デモ。そしてベトナム人留学生問題をとりあげている。

☆荏原地区ベ平連

7月結成。思想的なものより地域的なのが特色、町内会について徹底的に調べる。

☆「第二、第三の小西を」東京行動委

「自衛隊通信号外」を作り、全国に配布したい。アンチ安保が載っている。

☆清水ベ平連

外部に向かって呼びかけるとき、自分自身に強烈なものがないといけない。

☆静岡ベ平連

デモは唯一の示威方法であろうか。デモはかえって歩行者との断絶が確立されてしまう。高校生生覆面デモで「灰スクール」の象徴をしたい。

☆静岡岡県の高校生問題

大部分の学校は政治行動に参加した学生の別件処分をする。

☆沼津ベ平連

三島の日大生・高校生・教師などが中心。国労の処分反対運動。人数は固定化。

☆名古屋ベ平連

妊娠2か月の女性が機動隊の暴行により流産。泣き寝入りせず、持続して闘ってゆく。反弾圧市民の意識を絶対に持ち続けたい。

☆岐阜ベ平連（再建）

各務ヶ原ナイキ基地闘争。川崎重工で奇怪な事件、従業員へ正体不明の予防注射の内実をバクロしてゆく。

☆京都ベ平連

今月で39回目の定例デモを迎える。ベトナム通信をずっと発行している。4日に「反戦・反安保市民の会」を結成。これが69年中の活動の母体となる。任錫金を支持する会が発展して、朝鮮人問題行動委員会に。「橋の下大学」。「ベトナムについて

知る会」「おなら」の発行。

その他京都には多くのベ平連がある。

☆吹田ベ平連

69年11月結成。

☆関西ベ平連

梅田地下街闘争。機動隊が来ても(1)決して逃げない。(2)商店に入らない。(3)坐り込む、徹底する。梅田大学(千人規模)そしてアンボセミナー(50人規模)のものを計画。「参加者から組織者へ」をモットー。

☆北摂ベ平連

新明和工業への抗議デモ。平均130名。豊中市のうち三千軒くらいの家に個別に日刊のビラを配る。

☆北大阪ベ平連

関西ベ平連の活動とかなりダブる。

☆エスペラント平和連合

3月か4月にエスペラントアソボの発刊を準備。

☆広島ベ平連

6日に「反核」がスローガンとなった。広島におけるマンネリ化した広島平和運動のパターンの打破するのは困難。

☆神戸行動委員会

ベ平連と権力からも呼ばれている。「週刊アンボ神戸」の発行現在14号。反戦初詣をした。自虐的との内部批判もある。

☆山口ベ平連

去年6月結成。市民は無関心

であり、商店街は自衛隊に好意的。市民の中に、マスコミによって作られたベ平連アレルギ症状がある。岩国ベ平連とも共闘。海兵隊へ呼びかけている。

☆北九州ベ平連

米軍弾薬輸送反対闘争。自衛隊も参加した夜間デモ。

☆福岡ベ平連

12月に沈滞。1月に合宿「手さぐりの論理」を。働く人ベ平連、納税者ベ平連結成。公安調査庁スパイ事件アリ。

☆鹿児島ベ平連

中央闘争へ走る人が多かった。毎月7日の定例デモは毎月一ケタ。高校生への筆跡鑑定まで行なう弾圧をする。

☆長崎ベ平連

運動は活発だが、財政的には困難。タイミング良く問題点を指摘して訴えてゆけばカンパも集まると思う。

訂正とおわり

週刊アンボ第四号のグラフィック、左の上下写真の方は、私服刑事ではありません。この訂正を訂正するとともに、御迷惑をおかけしたお二人に、深くおわびいたします。なお、「一眼には眼を」「のペー」は、今後、いっそうの慎重さのもとに続けていきたいと思ひます。日時、場所などの資料とともに、たくさん投稿してください。

△編集部▽

自立した市民の運動はつづく

特集1

3

ヘインタビュー

1 金^{こん}べが種^{くさ}まきや私^い服^{ふく}が

金沢■新村育夫（21）学生

——ベ平連運動を始めた動機は？

N 戦争に反対だから。今でもそれに徹しています。

——ソニミ村の写真見た？

N ええ。ボール爆弾やジェノサイドの写真見てたから、とくにショックは受けなかったけど。

——私にはやっぱりショックだったな。

N ぼくは虐殺をやったG Iがすぐく後悔しているのを見ると、同情しちゃう。むしろ、知ったかぶりをして、戦争だから、これくらい当り前だという奴に腹が立ちます。

——お父さんは戦争に行ったの？

N 親父は、戦争の話をガキの頃ケン玉して遊んだなんていうのと同じ。昔話。

としてよく聞かせてくれました。塀をの

ぼって逃げていく中国兵を後から射つとまるで射的を射っているみたいにバラバラ落ちてきたなんて、タタミの上でマネしてくれたり。

——何年生まれ？

N 昭和二十三年。

——戦争を知らない世代の反戦意識はあてにならない、という人もいるけど。

N じゃ、ぼくに戦争に行つて、人殺しをしてこいというんですか？

——万一、あなたが徴兵されたら、どうする？

N 徹底的に拒否します。脱走してでも亡命してでも。

ただいま総勢30名前後、平均年令20歳

前後、大学生と同じ年代の人が多いにもかかわらず（？）学生は5、6人しかいない。ベ平連運動の中では学生も勤め人も関係なくやっている。学生が少ないという事の弊害もないではない。内部批判をもっとやろうということではウチワの問題をのりこえて行きたい。また、ベ平連内の人間の流動化という現象も少ない。要するに人間が定着して、ジワジワと増しつつあるということだが、ベ平連だけで常に三桁の人間をあつめてデモをしたいなあという欲望もしきり。東京で一人の人間が集まるのなら金沢では三百人のデモができれば同じ率、それが第一段階の目標でもある。

ベ平連全国懇談会では沈着しかつ噴出する市民運動の全国の鼓動があった。報告者六名のインタビューで経験交流の場を設定する。

事務所は昨年12月にできたが、アジト的ムードで一般に公表していない。外からの連絡はもっぱら私書箱を使っている。パス・トイレ付2DK。常時誰かが住みついていて24時間営業もたまにはしている。毎週グループの会議などが行われ、週に一回は総勢で非常に生産的（？）なディスカッションを行ない運動方針を決めている。

金^{こん}べにあるグループでなんといっても興味深いと思われるのは、グループ・ジャンヌ。闘うジャンヌダルクなのだ。金べは男女の数が半分ぐらいずつで、G・ジャンヌはまさしく女の子（彼女らは女性だ！）と言う……ばかりのグループ。ベ平連のキレイドコロがズラッというという



旅がラス型(会場スナツポ)

噂は全くないが、女性解放と人間解放のため闘っている。毎週読書会などをやっているが、最近はその非暴力直接介入をうけている。フリーセックスや性教育のことをまじめに討論することもある。また、反戦マッチキャンペーンを主体的に担い手製のマッチで市民にアピールしている。(このマッチ売りの少女(？)作戦は今後も期待できる。箱の中にピラでも入れよう) このグループの旗はカッポイイやつで、紫と黄色の布を二枚重ねて、白ユリのアップリケなんかしてあって、おまけに三角旗なのだ。しかもピラピラなんかがついている。

グループB・Pというものもある。これはBlack Pantherの略ではなくて、By Photographyの略。要するに写真屋、私服の写真も撮るが、やたら芸術家ぶっているという噂もチラホラ。先日ゴダールの「中国女」を自主上映してガッポリかせいだ。

フォークもある。フォーク・モグラは雪の降らない間中央公園（金沢のまん中）にあってデモはここから出発する）でや

っていたが、冬場はもっぱら事務所であ
っているの、いつも事務所はギターの
音でいっぱいである。街頭カンパの時
はカンパしている横で鳴らしている。昨
年歌集を作ったが、その名前が「フォーク
・モグラ大全」40ページで60曲以上の
っている。ファンレターも来るし、テー
プの注文もある。彼らの印刷工としての技
術は金べ内でも高く評価されている。

平平連ではないが、金沢には反戦キリスト者会議があり、その中のバプ闕委の教会での造反を行っている。偽善的な礼拝を数度粉碎し、討論集会を行い、真のキリスト者とは何かを問いかけている。それに付属幼稚園の先生達の労働問題も加わり、教会の権力者たる牧師の仮面を徐々にはがしつつある。2月1日には礼拝堂を逆封鎖し、またもや礼拝をブッコワしたそう。昨年のクリスマス・イブには、これらのキリスト者と共に反戦クリスマス・キャンドルデモを行った。

金沢のノンセクトの高校生組織に反戦高校生同盟がある。12・20には高校生だけのデモを金沢で初めてやった。これは高校当局にもかなりのショックだったよ
うで、弾圧もやっぱりきびしい。

2月1日、石川救援会が金沢に結成されたが、その日のデモで早くも5名パクリれた。逮捕する学生を初めから決めてあったらしく、その時私服いわく、「ああ

ホッとした。これでいい。」しかし、これでいいのか諸君！　と言いたくなる。

金沢へ平連もこれからやらなくちゃならないことが山ほどある。家族や職場での弾圧(?)もひとりひとりの問題として、無視できない事となっているし……しかし、我々の若いエネルギーは北陸のじめじめした気候に反して、増々燃え上がらざるを得ない。(カゲの声「まあな

2
ひとりでやろうべ平連！
関（岐阜県）■高倉健二（21）自由労働者

関(岐阜県) ■高倉健二(21) 自由労働者

——関ヶ平連ができたのは、いつ？

T 去年の九月一三日。関の駅でピラ配ったのが始まりですけん。

——何人で始めたの？

T ばく一人ですけん。一人でもべ平連でけるいうこと、聞いたもんで、ほんでまあ、一〇・二一に、初めて関で単独デモやったんで。友だちがひとり、市民の人が六人と、それからほかのと、八人で歩きました。私服が仰山来て、四人もついて来りました。

—それで、いま何人いるの？

T 一人ですけん。小さい頃の友だち誘ったら、軽い気持ちでデモに来てくれたのに、次の日もう、私服がその人の職場場の上役にいつけに行つたもんで、びっくりこけてしもうて、来んようになって

んとかなるやろ、」

70年1月から定例デモをやっている。
毎月第2日曜。北陸の反戦市民よ結集せ
よ／（午後3時中央公園）第3日曜は週
刊アンボ学習会。すべての連絡先は金沢
南局私書箱25号。反戦自衛隊員連絡せよ

北陸の地に一点の火が燃えあがりつつあり。
(学生)

しもうた。

——どんな仕事しているの？

T 高校でてから五つめの仕事や。自由労働者いけど、日雇いやで。市役所のゴミ寄せ人夫やったこともありますけん。親戚のものがあんまり恥かしがりやるんでやめました。

— お家は？

T 農家ですけん。ほくが本ばかり読んどって、ちょっとおかしいことばかりいうとるんもんで、親父といいあいになつて、出てしもうたんやけど。

——ひとりで、どんな活動やつてるの？
T 星の出とらん夜に、三百枚ピラ貼つて歩いたりしとるけん。

—ひとりで、どんな活動やってるの？—

T 星の出とらん夜に、三百枚ピラ貼つて歩いたりしとるけん。

週刊アンポのすべての読者の皆さまに
関べ平連より堅い連帯の挨拶をしたいと



思います。岐阜県関市Ⅱ人口四万八千産業Ⅱ刃物、洋食器産業を中心とした小都市

▼関ベ平連発足以来今日までの行動
69・9・13 発足 一人でピラまき

10・21 反戦デー 単独デモ七人参加

12・25 映画「三里塚の夏」と反戦フォークの夕べ 70人参加

1・18 週刊アンポ読書会 五人参加

1・25 各務原自衛隊基地撤去、ナイキ基地建設粉砕デモ 4人参加

その他(週刊アンポが出るとそれを駅前ですべて売る。)

▼なぜベ平連をつくったか。七月の新宿西口のフォーク集会、討論集会へ参加して素晴らしいと思った。高校時代から新左翼的な考えをもっていたが、どうしていいかわからなかったが、西口広場を契機に何か始めなければならぬと思った。7月18日岐阜県の山中にミサイルが落ちた。隣の町的美濃加茂市ではK君を中心

に米軍に対してなにもしない社共をのりこえて単独5人の抗議デモが行なわれた。このことは僕に非常に勇気をあたえてくれた。K君も始めは一人でやっていたと聞いてそれなら僕もということになり始めた。友人をオルグしても積極的に行うというのがいなかったから。

▼10・21デモ 去年は地区労が主催してデモをやったそうだし今年もやりそうというのでその後にでもくっついてと思ってステッカーを三百枚程はったが、今年には集会だけでデモはないとの決定であった。しかし一応市民に呼びかけた以上やらなければベ平連の名がすたると思い一人でもやることにした。参加者七名・私服四名。小さな町なので当然参加者全員の顔はすぐわかる。全員に対する弾圧があった。僕の古くからの友人であるY君は、私服が(拓植というヤツ)が勤務先までやって来て、上司に彼がベ平連だとなげ、彼を直接呼びだして色々きいたそうである。彼はもともと軽い気持で参加したので、以後こなくなつた。しかし、デモを通じて色々な人々と知りあえた。宣伝「朝日新聞」の第一面の一歩スミにのった)ができた。そして関町の人々にも関にベ平連があるということを確認してもらえた。一応成功だった。

▼生活はどうしているか。現在は土方をやっている。一日二千元位、カンパがほとんどないので、自分でお金を出してやっている。活動すると仕事ができないので財政上苦しい。

で財政上苦しい。

▼家族との問題。去年の四月ごろから、左翼的な事を毎日で聞いていた。そして七月ごろから家に二ヶ月ゴロゴロしていたので、家族中にイヤガラレていた。そしてその上、市役所のゴミ寄せをやったので父から出て行けといわれ、家を出た。やつのことでは警官が住んでいたのとなりの室には警官が住んでいたの、現在のところへかわった。三畳と五畳で月三千元。やすいだけあって寒い。家は農家なので米をもらって自炊している。

「ベ平連ならともかく、ほかに仕事があるのにゴミ寄せまでやることはない。近所や地区の人には合わせる顔がないからやめろ」と、弟をのぞいて家中の者がそういていた。ゴミ寄せは一日千二百円ばかりで非常に不衛生な仕事である。僕自身仕事に貴賤がないといっているが、どこまでやれるかと、自己自身への挑戦でもあった。清掃人夫の差別の問題など学ぶところが多かった。高校時代の友人など、僕の顔を見てあまりいい顔をしなかったのも事実である。しかし全国には、数万人の清掃人夫がいる。この人々が堅く団結すれば大きな力になると思う。(12月まで四ヶ月やった。)

▼今年の計画 10・21の時知りあった友人が何かやろうとのことで、五、六人で相談して12月25日映画会「三里塚の夏」と反戦フォーク集会を開いた。今年にはいつてからは隣の美濃加茂ベ平連と「週刊アンポ」の読書会等をいっしょにやっている。今年は具体的には次のようなことを計画している。

一、「週刊アンポ」を多くの人に読んでもらうよう積極的に売り、同時に読書会に参加する人員をふやす。

二、関市にはまこと刃物をはじめとして銃剣等生産している会社があるので、社共をのり越えて告発していく。

三、各務原基地撤去、ナイキJ基地建設粉砕へ向けて関の地において運動をつくる。

四、3月から友人と二人で月例デモを計画している。3月か4月の始め、映画か、反戦フォーク集会を開きたい。なにしろ活動家が多いので、じっくり腰をおろしてやれることからやっていきたい。

最後に提案したいのだが、僕らの町のようなところは全国いたる所にあると思う。だから一人始めれば、皆が集まってくる。このような小さなベ平連を、全国六百近くある市と名がつくところ全部につくっていったらどうであろうか。小さな町でも大学へ行って活動している人がかなりいるし、関心を持っている人が大ぜいいる。だから始めれば皆が集まってくるのだ。僕はこのことは去年からの行動を通じて学びとった。私たちはこうしている間にも、ベトナム人民に対して加害者となっているのであり、現在よりより大きな人間の渦巻を起こさなければ

また再び、朝鮮、東南アジア人民への加害者とならなければならぬからである。

3 歩道でもいいから歩いて

岐阜■鈴木 弘(23) 会社員

小さな渦巻を日本中に、
ベ平連のない町にベ平連をつくらう。

— 学生運動はやったの？

S いいえ。ほくはワンダーフォーゲルをやっていた方。

— じゃ、ベ平連はいつから？

S ほくは山が好きで、就職してとじ込められた生活に耐えられなくなったんです。これでもいいんやらか、思ってた一昨年の一〇・二に初めて、デモってものに参加しました。

— デモに行くようになって、何か変わった？

S いろんなことがやれるっていう気になって、音楽とか、茶道まで始めちゃいました。運動をしている自分と、ふだんの自分なるべく一緒にしたいと思いついて。

— 職場にも、仲間ができた？

S いや、ひとりです。働いている人だっ、めけめけとケロッとした顔で、上役にあなたもどうですかと勧めるくらい。生きていて、生活していて、稼いで、そういう人がやってる運動なんやから。

— 今年やりたいことは？

S デモで車道を歩くのが嫌な人は、歩道でもいいから、ほくたちと一緒に一歩でも歩きだしてください。ほくはデモのなかから、マイクで呼びかけます。何でもいから、できることを確実にやっていきたいと思っています。案な気持ちで運動を続けていきたいな。

8月の一周年を迎え、私たち岐阜ベ平連とその運動は壊滅状態に近かった。なにしろ、その時の講演者「小中陽太郎氏」は、足代も出るだろうかと心配されていたらしいのだから。ともかくやり直そうと、私と学生のN君とオバチャンの三人を中心に、もう一度動き始めた。6月に行動を共にしたクリスチャンの人たち

(今は教会ベ平連をつくっている)と、反博などで知り合った人々(関ベ平連など)、一人一人に呼びかけ、10・11月行動を組むこととなった。しかし、私たちだけで自立した行動を起すことはできず、常に学生・労働者部隊の、オチボひろいをしていた。この間、私とY君(労働者)とが隊列の最後尾で呼び込みをした、「……あなたの足であなたの意志表示を、歩道でもかまいません。選挙だけが民主主義ではありません。……」おかげで歩道を共に歩く、声なき野次馬、諸氏ができ、中には隊列に入ってくれる人もチラホラ、まずまずといったところだった。岐阜の叫びも空しく、佐藤首相はアメリカへ。(この頃、岐大ベ平連誕生、)

11月の行動の疲れも回復しないうちに12月7日には、小川プロの弾丸映画の上映会とその準備、そのあと、関、大垣のベ平連の行動に参加して行く。その過程で、教会ベ平連、ヤングベ平連なども自立してきた。ヒューヒューハーハー、さていよいよ、70年に突入したとたん、ナイキJ問題が起ってきた。ナイキJが配置される各務原基地(岐阜基地)は、かつて、私たちが定例デモをかけていたところである。複雑な気持であった。私たちの力が及ばなかったことも事実であるが、権力者諸氏の岐阜での反戦運動も含め、体制に批判的な部分すべてへの挑戦だった。折しも折り、総選挙のあとである。早い話、岐阜県民はなめられたので

ある。これで腹を立てない人は、よほどのオヒトヨシか、頭の中が幸福な人か、戦争の黒幕的な人間と自身が錯覚している人(かなりいるらしいが)だろう。

1月25日、私たちは3ヵ月ぶりに各務原でデモをした。今までの定例デモのたびに、市民の無関心な、ある意味では冷たい視線を浴びてきたので、やはり気が重かった。デモの前に、公民館を借りて、「各務原市民と語る会」を催した。市民らしき人はごく少数だが、参加していた。岐大の水崎助教の講演を軸として、討論を行なった。ナイキJに関する平野岐阜県知事の「問題が起きてから考えればよい云々」のこの上ないハレンチな言葉に対する抗議をしようという発言などや、ナイキJをどのようにとらえるかの問題で、多少の討論があったが、それほど盛り上がりなかった。司会をした私たちの未熟さはどうすることもできなかったから。

そのあとのデモ、これは意外にたのしいデモとなった。市民の中に、かなりの反応らしきものがあつたのだ。ピラがすくなくなってしまうほどだし、通行中の制服の高校生が隊列に加わりかけ、少しばかりあわてたこともあった。細い道では、近所のガキ共といっしょに「安保粉砕」「ナイキJ設置反対」など叫び、手をつないで歩いた。とにかく今までと違い、市民は私たちのデモに注目しているらしいことは確かである。しかし、岐阜



一見も二見もカワイコちゃん型
(今更なスナツア)

tar



県という地域性から、私たちが運動を作る以上に、自警団が容易に生まれるかもしれない。少なくとも私たちの、一年半ほどの運動の中でそれを強く感じることはできたし、これからも忘れてはならないことだろう。

クライマックスは、自衛隊のゲート前でのことだろう。前の学生部隊は独自の集会を始めたが、私たちは基地内で警備に立っている自衛隊員に呼びかけた。マイクを順々に回し、各自思ったことを中に向かって語りかけた。私は柵のそばまで行って、若い自衛官にユーモアをまじえて話しかけた。最初むづかしい顔をしていた彼は、突然木のかげに顔をかくしてしまった。横へ回って見たら、彼は笑っていた。これえきれなくなったのか、恥しいのかわからない。しかし、彼の人間らしさの中に私は希望をみつけることができた。これからもやれるのだと、

これからの私たちの活動で注意しなければならぬことがある。先の地域性と、ミサイルの公害と安保の関係である。公害の真の意味をどれだけ追求できるのか

が、私たちにとって地域の活動の成否を握っているとおもう。

× × × × ×

ナイキJの陰にかくれて、あまり目立ってはいないが、岐阜基地に隣接して、川崎重工がある。ここは、従来からベトナム戦争で破壊されたヘリコプターの修理を行なっている。

しかし今度、新たに、対戦車ミサイルの生産を行なうと発表し、同時に、発射テスト用の土地の買上げもあるということである。

市民が直接的にこうむる公害というところから考えると、発射音、墜落の危機など、ナイキJとは異なった重要な問題を含んでいる。

ナイキJは、広い地域、中京阪神地区だけでなく、極東(朝鮮、沖縄など)における核抑止力として働き、また対戦車ミサイルは、身近かに戦争の存在を持ち込むこととなるばかりか、川崎重工の労働者の抑圧を、よりきびしいものにするだろう。

(会社員)

4 ひとつの柔らかな生命が

名古屋■前川美智代(24)

いつからやってるの?

M 四年前から。中学出て、美容師をしていた頃、新聞でベ平連の記事を見て、小田実さんに手紙書いたのが始まりかな

— 今も美容師をしてるの? —

M 去年の秋までしてました。今は「反彈圧市民」の運動にかかりっきりです。八年間、美容師しかしたことないから、できたら今度は生産現場で働いてみたいと思っています。

— 結婚なさるそうね。 —

M ええ。ベ平連の人が結婚式してくれてるっていうから、三月中にはたぶん。

— 家庭に入ろうと思ったことは、一度

もないの?

M ないです。前にベ平連を日とってたとき、家で家事やったけど、あんなにむなしなものはないと思ったな。女の人って結婚すると、人が変わるのかな。結婚前もっていた自立性は、たちまち消えちゃって、ずぶずぶに生活に追われていったな。私のまわりでも皆そう。私は嫌だ。

— あなたはどうやっていくの? —

M 彼が沖縄の人なんで、来年中には一緒に沖縄へ行って、働きながら運動をやっていくつもり。

— 子供を生みたいと思う? —

M 生めないなあ、って思う。彼はほしがっているけど、私は運動のことで頭がいっぱいだし。

大阪 十月十三日

扇町プールを出発したデモ隊の一員、糟谷君は二十数回に及ぶ機動隊の強打を全身に受け逮捕されていった。苦痛を訴える糟谷君をムシロに放置して、更に権力と結託した行岡病院では、必要な処置を施せば命をとりとめたといわれるその処理を故意に怠り、彼を死にいたらしめた。

名古屋 十月二十一日

名もない、ひとつの柔らかな生命が虐殺されていった。状況はこうである。

佐藤訪米阻止を満場に刻み込んで久屋広場から出発したベ平連部隊は、松阪屋ウラ附近から数千人のフランスデモと果敢なシュプレヒコールで道路を埋め尽くしていた。部隊が角丸証券久屋駐車場にさしかかった時、突然後方から襲撃してきたドス黒い機動隊は、フランスデモの横っ腹になぐり込みをかけてきた。逃げまどう参加者に、数十名の機動隊が、なぐる、けるの暴行をくり返し、楯と肉体のぶつかりあう鈍い音が、そここで聞かれた。ある反動的職場に働らく婦人もまた、数名の機動隊員につかまり、弾圧を加えられた。彼女は証言する。フランスデモに対して機動隊は小隊を組み、背後からデモ隊を襲って来た。その時、ワァーという声があり、デモ隊が前の方へ



toi

逃げ出した。私も前方に逃げたが、機動隊のジュラルミンの楯で強く押され、ころびそうになったが、どうにか右側の歩道に逃げ込んだ。その後、「隊列を組みなおせ」の声が出たので隊列に入った。しばらくして「逃げる」の声がして、デモ隊が再び逃げ出した。

しかし、歩道に逃げ込む前に、機動隊が背後から襲いかかり、楯で押し倒された。起きあがろうとしたところを前から機動隊員に下腹部を蹴られ、尻もちをついて倒れた。そして前後から蹴られた。その後夢中で右側のバス・ターミナルの中へ逃げ込んだ。激痛にしばらくうずくまっていたが、その後、痛みが柔らいだので隊列に戻り、最後まで、デモを貫徹した。しかし、一週間後彼女は身体に異常を感じ、医者に行ったところ、妊娠二ヶ月であることが告げられた。しかしその後も出血がとまらないので再び医師の診断を受けた結果流産しかかっていた。翌日になっても出血は続き、手術しなければ母体が危険であると診断され、十一月四日、彼女は手術室にのせられてい

た。

こうして一つの柔らかな生命が葬り去られた。またもや権力によって……。

事実は一つしかない。大阪と名古屋において、国家権力は二つの殺人をやったのけたということである。

このことを知った平連は、深い衝激と、権力への憎悪を交差させながら、いかなる弾圧にも抗し抜く決意をかためた。彼ら夫妻と共に、権力への不断の告発を提起し、えぐり出してゆく長い闘いを開始した。「反弾圧市民」として発足したこの組織的運動体は訴訟をも含む、あらゆる抵抗と反弾圧の論理をふくらませながら、権力は常に私たちの虐殺を仕組んでいることをパクロしてゆくだろう。(当日、名古屋へ平連の隊列に参加していたか、或いは横を歩いていた、「週刊アンボ」の読者は、至急、私たちと連絡をとって下さるようにな)。

昨年二月四日、あの圧殺のゼネストから、不死鳥のように飛翔した沖縄基地労働者の手によって、疑いもなく、七〇年が始まった。

一年後の二月四日、名古屋に、自衛隊の解体と人民の武装を熟く語る小西誠さんと、八〇〇人の人々がいた。

事態は大きくひろがっている。

三菱の労働者にピラを撒いた。すると職制の側に用意されてあるカゴの中に、ピラは次々と捨てられてゆくのだ。その間数秒……。その無残さ、資本への憎し

みは、全てどこかでつながっているにちがいない。

こうなったら、勝たなきゃ損だ、いつだってみづびしへピラを撒きに行くサとフテブテしいなおう。

あっけらかんとして自衛隊を解体しよう。ニッティの粉砕を企だてているあらゆるグループが混乱をまきおこし、国家権力を虐殺しよう。

5 農村を忘れてはいないか

鹿兒島■片平 章(21) 学生

——学生？

K うん。経済をやってるんです。

——家の人は、何かいますか？

K 前はね、いろいろいってたけど、最近は、もうそろそろやめろっていうくらいだな。

——授業は、あまり……

K つまらないしね。そんなときは、大江健三郎さんの小説なんか読んでるんです。

——いつから運動を始めたんですか。

K 大学で飯執行委員をやってたころから、だんだんドロ沼でね。ちょうど大学立法のときだったですね。でも、性格として、一匹オオカミ的なところがありまして、なかなかとけこめなかったんですよ。

——仲間は？

K 定例デモをやってるんですけど、たいてい一ケタですよ。でも、ひとりになってもつつけるつもりですけどね。

——日常の活動のなかで、どこに重点をおいているんですか？

K 鹿兒島っていうのは、ほんとに田舎なんです。だから、そうしたところにある青年団のようなもののなかに入っている、じっくり話しあっていきたいという気持ちはあるんです。農村の問題っていうのは、とても地味なんだけど、大切でしょう。たいしてできないかもしれないけど……

——将来は？

K とっても不安です。ええ、とても。

「金こそが命」という資本主義社会において、ほとんど自費で全国各地から参加した仲間の生々とした顔を見、活動報告を聞き、沈滞した鹿兒島でもがんばりやにやーという新なるファイトがわいた。政治的不毛地、鹿兒島(ほんとに平和な所)での活動は情けない。毎月七日の月例デモへの参加は一ケタここに大きな悪循環がある——人数が少ないからデ



モに加わらない。そんな人がデモに加わらないから人間の渦巻ができない。中央の何万何千というデモを聞く時、アセリと消耗感（ピラまきをしてても反応がない）が先立ち、ややもすればもうやめたいという空気が流れる。高校生も卒業し中央へ出て、残る大学生は益々孤立感を増す。一人になってもやるぞ。中央では人が集まり地方では沈滞する。これでは人間の渦はできない。各市町村にベ平連を、農村地帯という地域性を生かし、戸村一作氏の「三里塚にベトナムを」というように全農村へ浸透させよう。三里塚闘争の本質を理解させよう。破滅寸前にある農村、零細農民切りすでの農業政策が何を指し、何によって引き起されたのかという問題を農民と話し合おう。自衛隊、米軍へ対する反戦活動も大切だ。しかし身近にそういう目標がない地域の諸君、自衛隊より人数の多い農村へ「全農村にベトナムを」。

全国懇談会に一言文句（提言）。会場時間制限の関係で時間が短かすぎた。話し足りなかった。各地の報告に時間が

かりすぎて、実質的な話し合いの時間がなくなってしまった。

皆は討論を望んで、はるばる一日も汽車にゆられて集まってくるというのに。ただ何日のデモに何人集まったということとより、今こんな問題をかかえているとか、そんな問題をこういう風に解決したという実際の話がしたい。たとえば、学生主体のベ平連はどんなにして労働者、市民を連帯していくのか。ピラまき、事務所、資金の問題など基本的なことが地方では問題である。それを担う人は少なく、活動も限られてしまうというこの現実をわかってほしい。

全国懇談会の運営について提案をした。まず各地のベ平連活動報告はまとめてレジュメにして一括して会の前に提出しておく。それを議長団がまとめればよいだろう。僕は一日目の会の後、地方のベ平連で行きづまっている所へ呼びかけて喫茶店でオールナイトで話し合う機会をもった。これが鹿児島ベ平連に、そしてぼくにあって一番有意義だったと思っている。山谷ベ平連のオッサン（失礼）の体験談を通してのアドバイスは実に参考になった。来年は一日目の夜は課題別に分会を開きオールナイトで話し合おう。僕らの唯一の武器は「若さ」なのだ。そうすれば二日目の会はもっと深く具体的になるのでは。もう一つ提案、ベ平連に対する弾圧がひどくなる現状（基本的権利行使も弾圧される）を見ると我

々の法的態度も大切になる。すなわち救済である。各ベ平連が各々作ればいいが、地方ではなかなかそうはいかない。それで九州なら九州とブロックごとにも救済を作り、法的知識も勉強していかなければならないだろう。思いつくままに、

景気のいいことばかり書いて来たが、鹿児島ベ平連の現状は救済が必要になるほどの現状ではない。これが喜ばしいことなのか、なげかわしいことなのか？複雑な気持ちをもつ小さな鹿児島ベ平連である。

6 梅田の行動はいけ図々し

大阪 植野芳雄（22）会社員

——どんな動機でベ平連を作ったの？

U 北爆が始まったころ、新聞記事を見てたら、素朴にベトナムのひとびとがかわいそうだなあ、何か自分たちにてできることはないだろうか、思って、友だちと

ッとして悩まないから、大阪の運動はねちっこく続くんじゃないかな。

——これからはどういうふうによつてく

の？

U ベ平連の人が、自立性、自発性を大事にするのはいけけど、自分がなんにもしないことまで、自立性だなんて正當化していくのは、やっぱりおかしい。今年

は関西ベ平連ではひとつの行動への集中性と、それをやるための共同作業みたいなことを、実験的にでもいいからやっていきたいと思っています。

大阪生まれの大阪育ち？

U ええ。

——大阪と東京と、ベ平連気質はどう違う？

U 大阪の方が楽観的なんと違うかな。

梅田の地下街で、通行人と対話して、どうもこうもあかんようなとき、「限界を感じた」なんていうけど、ぼくらは、翌日になるとケロッとしてしまう。ケロ

関西ベ平連の運動を報告する時は、いつも以上のような、不遜、な言葉で始めるのがシキタリで、その通り、ほぼ連日私たちは、梅田地下街を中心にギョウザで培われたバイタリティーと、高麗酒を

疎外の構造

◆討論

羽仁五郎

70年安保を前にして鋭く自らを問う前衛たちの告発!!

登場人物

小田 実／吉川勇一／小長井良浩
山根二郎／松本健男／瀬戸内晴美
竹中 芳／正木ひろし／和田英夫



【録音内容】

LPソノシート両面盤8枚

- 新しい市民運動像
- 戦後民主主義の亀裂
- 日本の裁判
- 状況からの脱皮

【本文記事】本文24ページ

- 激動の中の知性-羽仁五郎
- 針生一郎著
- 用語解説

好評発売中! 価850円

株式会社朝日ソノタマ

〒104 東京都中央区銀座4-2-6
☎(563)6021~9 振替東京40311

グイッと飲みほし、「意味を問え」とア
ジってニヒルに空を仰ぐ輩を笑いとばす
「大阪のいけ図々しさ」を武器に、対話
集会、街頭芝居、フォーク、宴会流れ型
ゼッケンブラブラデモ、座わりこみ、
「関西ベ平連夕刊」発行、そして行動と
しての集会「梅田大学」等々を、11月以
降も「消耗しないのは人間的に欠陥があ
るのでは……」と首かしげつつも、とに
かく続けています。

68年3月のジョンソン声明発表の頃、
私たちの「地下街対話集会」は軌道に乗
り、「もうベトナム戦争は終わるやない
か」という町の声を相手にそれこそ必死
になって「そうじゃない」ということを
言い続けてきました。ゼッケンをつけた
私たちのまわりには黒山の人だかりがで
き、その中で孤軍奮闘し、時には仲間を
見つけ、時にはコテンパンに私たちの
「反戦論理」を粉碎され、それでも、やっ
と梅田地下街の行動が定着した頃からそ

これは一種の「委任するのではなく、政治
に直接参加する場」として、また、行動を
確認し合う場」としての機能を持ち始め
ました。あちこちに、思い思いの趣向を
凝らした壁新聞や、「これがソソミの実
態だ」と銘打った写真パネルなどが所狭
しと設置され、あそこは「梅田大学ベト
ナム学部」などと勝手に決めこんだり、
栄ちゃんの「ベ平連は交通戦争の方に力
を入れる」という言葉を忠実に守って、
地下街の人の流れを、いわば交通整理す
ることまで引き受けています。ちなみに
今だかつて地下街の交通事故死はゼロで
あることを報告。……

また、最近では、私たちの梅田大学キ
ャンパスに機動隊が土足で侵入してくる
のも度々のことで、座わりこんでいる私
たちをこぼろ抜きし、蹴っ飛ばし、意地
悪くもゼッケンを破り棄て、メガネを略
奪し、といったハレンチぶりを発揮して
います。「ハエのような私たち」は、追

われれば、一糸乱れぬ、ではなくて、て
んでんバラバラにブラブラ歩き出し、ス
キあらば、また坐り、追われれば、また
歩き、全員検挙も承知の上で決して逃げ
ない、商店の中に逃げこまない、とにかく
一発のハプニングによって地下街の行
動を敗北に導かぬように、「禁欲」して、
執ように非暴力抵抗をくり返し、敵の弱
い点を見つけたら、そこに敏しょうなノ
ミの如くとびつく、そういったものを、
別段、鉄の規律があるわけじゃない、時
には千人を越す人が集まるのに、みんな
が「身につけてしまっている」のです。
「ハエとノミ」に倣うことができるの
は、常に「何を獲得するのか」という明
確な戦闘課題を全員で共有することによ
って、行動への共同作業による参加と集
中性を、日常的、地道に行動する中で追
求してきたからだと考えています。

しかし、いずれにせよ、この地下街の
対話を中心とする行動は、私たち、「反
戦・反安保」のムードの中に安住しがち
で、「ありのままの現実」から一步離れ
た所で、一種のエリート意識と共に「現
実を語りたがる」私たちに、それこそ新
鮮なショックを与え続けます。ただ単に
「反戦・反安保」を声高に論じるのでは
なく、その具体的事実としての中味を提
示しないかぎり、「通りがかりの人」は
耳を傾けてもくれないのです。「敵につ
いての事実の検証も不十分であり、己に
ついての客観的把握もぼかし」ていたの
では、それこそ「百戦」どころか「二戦」
たりとも「危うくて」と思うのです。こ
のような私たちの弱さを克服するために
今、具体的なかたちで、アンボ大学、反
戦ゼミ、等が行なわれています。

70年

停滞の季節 をぬけ出る ために

特集

社会党内部の混乱と労働組合の右傾化など、70年安保自動延長をまえにして戦線は大きく揺れ、ひとり沖縄全軍労のみ孤立した闘いを進めているいま、われわれは何をなすべきか

特集2

1

訊く

―最初に、沖縄の現状について。

仲吉■それはつまり、佐藤・ニクソン会談以後の沖縄ということですね。われわれは、ずっと沖縄返還を要求して闘ってきたわけだが、佐藤・ニクソンによってまったくわれわれが要求していなかった方向の返還が実現されようとしている。それが核安保であり、アジア安保であるということ指摘して、われわれは十一月十三日に、ストライキを打ったわけですね。佐藤・ニクソン会談で、われわれの指摘した通りの日米共同声明が出され、それが、具体的には全軍労の首切りになって現われてきた。全軍労の首切りは決して全軍労だけの問題ではなく、沖縄の個々の問題が全軍労の首切りと同じよう

な形で処理されていくだろう。ですから全軍労の闘いは、確かに経済的な要素をたくさん持った、そこに根っ子をおろした闘いなんです。普通の賃上げ闘争と違って非常に政治的な、反安保の側面を持った闘いだと考えているわけです。

それから、基地撤去あるいは基地反対を叫びながら首切りに反対するのはおかしいではないか、とよく言われますが、われわれは、そうは思っていない。労働力はもちろんのこと、土地、水、電気、燃料、金融という、いわゆる産業に関係するすべてのものが、米軍に握られている。たとえば、自分たちの島の水を、軍から買って飲んでいくわけです。それをわれわれの手に返せという要求、つまり

われわれの生活と、反戦平和の闘いが結びついて基地撤去の闘いが発展した。ところが、今、労働力だけを首切りという形で放り出してきた。基地機能は前のままで、つまり土地、電気、水その他は軍が握ったままで放り出されたら、われわれは、いったいどうやって生きていけばいいのか、という一つの問題がある。

もう一つの問題は、今、米軍のやろうとしていることが、基地機能を低下させずに合理化、つまり安上がりの基地にすることであること。これを、われわれが認めることは、基地の存在を許すことになる。この点からも、全軍労の闘いが生活を守る闘いであると同時に、反安保の闘いである、と言えるわけです。

全軍労闘争をつつんで 全県規模のゼネストへ

インタビュー●沖縄県労協議長仲吉良新氏に

——実際には全軍労のストの効果は、どの程度なのか。

仲吉■第一波では準備不足もあって百パーセントとは言えなかったが、第二波ではほとんどの基地がマヒした。特に第二兵站部隊はもの一つ動かせなかった。それから、コンピュータが全部マヒした。そこまで追い込まれたために、四百人の首切り撤回が出てきたものと思う。

第一波、第二波では全軍労中心だったが、第三波では県労協全体がストでも打てるような体制を作りたい。同時に、労働者がストさえ打てばいい、というのではなく、県民がストを支持しそれを行動にかえていく闘いとして、考えていきたい。これが成功すれば、第三波はかつてない基地に対する直接行動ができるだろう。それを打ち抜けば、県民全体と米軍との絶対決にまで高めることができる。

——二・四ゼネストが挫折してから、一年後の今、そのような闘いが組めるのかという懸念がありますが。

仲吉■まず、今度の十一月闘争を闘う中で、ほとんどの部分が挫折から立ち直ったと思う。そして残された部分も、全軍労と共に闘っていく中で、やはり闘えるあるいは闘わなければいけない、という気持が新しくよみがえってきた。それから、全軍労の闘いは二・四、十一月闘争と違って団体交渉という具体的な目標がある。もちろん、本質的には同じ闘争だが、それを基礎にして、さらに鋭い政治

的な闘いがある。

——戦後史で言えば昭和二十二年の二・一ゼネスト失敗以後、労働運動は後退したが、二・四がそのミニチュアとなるようなことはないか。

仲吉■それはありません。たとえば、第二波の四日目に、全軍労の上原委員長は中央闘争委員会に問題提起をした。それは、後の米軍との交渉をやりやすくするためには、四日で打ち切った方が良くかもしれない、ということだった。このように組合の幹部に、心配なことがあるにしても中央闘争委員会なりで議論をした末に方針を決める、という姿勢がある。さらに下に降ろして、大衆討議をやって方針を確認するなり、変更するなりする。この姿勢が維持されている限り、沖縄の労働運動は腐敗しない。第一、よんでいる暇がないでしょう、次から次に——

B52、原潜、毒ガスなど——敵からの攻勢があって、それを一つ一つはね返しなから、闘いを続けているわけですから。五日間、雨や風の中でピケをやり続けた組合の力を信じます。むしろ、われわれが幹部の地位に安住しようと思っても、沖縄の労働者は絶対にそれを許しません。

——今度、上原委員長と共に東京へ来られたわけだが、労働組合との連帯にしても、具体的にどう考えていられるか、また、7日には総評幹部やいわゆる文化人と数寄屋橋でカンパに立たれたわけだが実際に闘っている労働者との交流はどう

なのか。

仲吉■四・二八の海上集会にしてもはたして有効な闘いかどうか、去年あたりからずいぶん論議をしています。しかし、われわれの立場としては、まず労働組合に強くなって欲しい。もちろん組合を強くするのは、個々の闘っている労働者です。その闘っている部分が組合のワクを乗り越えて結集することも、非常に結構だと思う。だが、まず属している組合をせめてストライキの打てる組合にして欲しい。それが沖縄との連帯だと思う。

全駐労が全軍労とともにストライキを打たなかった、私はそれをけしからんとは思いません。全駐労は少なくとも全軍労以前に、解雇問題その他に関してずい分ストライキを打っている。つまり、単に全軍労といっしょにストライキを打つよりも、労働条件を高めるためのストライキを打ってほしい。たとえば解雇に三カ月間の予告期間を設けることは、全駐労がすでにかちとっている。それが全軍労の力となっている。逆に沖縄の方が進んでいる部分もある。その部分は本土の労働者がそれをテコにして高めていく、それぞれの立場で闘いを強化する以外に前進はないと思います。

——第一波、第二波を通じて総評は力にならなかったのではないか。

仲吉■それはそうだが、県労協だって第一波では力を出せなかった。第二波でもストライキを打てたのはマスコミだけだ



った。事態に対応しきれなかった。別に総評を擁護するわけではないが、ましてや本土で全軍労の闘いを自分たちと結びつけて、大衆的に取り組むだけの余裕はなかったと思う。だからと言って、総評がいらないというわけではない。総評だけではない、第二波のビケ支援では同盟の下部組織の労働者も、いっしょになって闘ってくれた。非常にうれしかったの

です。労働組合の下部ではんとにすべてをかけて闘っている青年労働者の力を、労働組合の中に、どう結集させていくのか、そのためには労働組合とは、どうあるべきか、といったことを追究していくべきではないかと思う。

——コザなどで、Aサイン業者をはじめとする人たちとの衝突が伝えられたが、実際はどうなのか。

仲吉 ■第二波のときは事実上、対立してしまっただけ。そうならないといけないと思うが、われわれ自身が全軍労の問題などについて、その人たちと話し合う機会がなかった。また、誤解もあったし、われわれの努力も足らなかった。だけど、今、全軍労が闘っているのは、米軍に依存して生活している業者のみさんの、将来の生活をかけて闘っているのだ。たとえば、ドル防衛だといってさかんに基地の中にバーやキャバレーをつくっている。それを見通して、全軍労とともに闘う以外、基地業者の人たちの将来も考えられないのではないかと、と思う。だから、十分に話し合えば、暴力でビケを破るということとはなくなるでしょう。

——もう一つ、石油のコンビナートのことで問題が起こっています。

仲吉 ■まだ県労協の結論は出していないけれども、まず、石油に限らずあらゆる企業誘致に反対するということは、あり得ない。労働者には働く場が必要であるし、そこで収奪されるのならば労働組合をつくり、徹底的に対決して労使の妥協を許さない闘いを築きあげるしかない。だから、単に独占企業だから反対する、というわけにはいかない。しかし、公害問題については徹底的に追及しなければいけない。東洋石油の問題を考えてみると、一つは公害、一つは石油独占ということが問題になっている。石油独占に関しては、さらに石油だからダメなのか、

独占だからダメなのか、という問題がある。私は、今のところ、直接東洋石油の問題を知らないのですが、実際に闘っている人たちと、そのような問題点を話し合ってみなければいけないと考えている。

——最後に、学生や反戦派労働者についてお聞きしたい。

仲吉 ■十一月闘争のときは、学生の行動がきっかけで機動隊が組合員にもおそいばかり、相当のケガ人を出したこともあり問題が残ったが——編集部注「週刊アソビ」第三号参照——全軍労のビケ支援では、いっしょによく闘ったと思う。もちろん、学生や青年労働者は、先頭に立って闘ってほしい。しかし、いっしょに闘っている労働者が躊躇する、あるいはもう命がけだ、もうやめとこう、という人がたくさんでてくるようでは困ると思う。

時期はまだ言えないが、全軍労第三次ストライキには、沖縄全県規模のゼネストを組んでゆくつもりです。本土からの支援態勢をより強くより広くしてほしいのです。

■全軍労の闘争にカンパを、沖縄は依然としてドル経済なので、個人でカンパを送るのに戸惑っている方は左記にお送りください。一括して全軍労と、沖縄県労協に送ります。すでに二月初旬三万四九八四円を送りました。

連絡先 東京都新宿区西大久保二一

社会党再生の道への前提

三田 岳

特集2

2

総選挙の敗北を契機にして崩壊の危機に直面している社会党。政界再編成が叫ばれ、右傾化がさやかれているとき、真に闘いの中心となるためには、いまなにをなすべきか。

■「不思議」な「戦闘性」

中国の毛沢東主席が、日本社会党は不思議な党だと言ったというのが、党内の活動家たちの誇りとされてきた。毛沢東主席が「不思議な社会党」と云った意味は、恐らく六〇年安保闘争のころの社会党の働きを高く評価してのことだろうと思われる。たしかに、六〇年安保闘争では、社会党は、総評の下部の労働者大衆と全学連の「戦闘性」のなかで、そのもてる力をふりしぼって闘っているのである。この党の議会の主義的体質を最も強く保持していた最右翼の部分は、安保闘争での大衆の直接的行動を否定し、大衆行動優先の主流派と対決することになった

が、多数の主流派に叩き出されてしまひ、今日の民主社会党を結成した。

六〇年六月一日、樺美智子さんが虐殺されたとき、狂犬のように襲いかかる機動隊に直接抗議し、放水車の水にびしょぬれになって国会南通用門近くの構内に倒れた学生の救出に当たったのは、江田三郎現書記長をはじめとする約百名の社会党国会議員団であった。この行為は日本共産党と全く対照的であった。

社会党の「不思議な党」たらしめた「戦闘性」は、六〇年の安保闘争をピークに、五〇年代はその上昇過程としてあり、六〇年代はその下降過程ということができる。五一年、日米安全保障条約が朝鮮戦争を背景に結ばれたが、社会党は講和、安保条約をめぐる左右に分裂した。五五年の左右統一を経過しつつも、社会党は総評に支えられた左派の主導性によって、五一年の第七回党大会で決定された平和四原則（再軍備反対、全面講和、軍事基地反対、中立堅持）のスロー

ガンを掲げ、鈴木茂三郎委員長の「青年よふたたび銃をとるな、婦人よ夫を戦場に送るな」というアピールを押し出して、総評とともに大衆闘争をひた押しに押しすすめた。五一年の講和、安保条約反対闘争をはじめ、妙義、内灘、砂川などの軍事基地反対闘争、警職法改悪反対闘争、教職員の勤務評定に反対する闘争など、日米支配者の労働者人民に対する攻撃に対して、平和と民主主義を守るたたかいのなかで、社会党は、その「戦闘性」の骨組みをつくっていった。

■六〇年代の後退

しかし、六〇年安保闘争後の一〇年間の過程は、社会党にとっては、大衆闘争と議会闘争との肉離れが強まる過程である。六〇年安保闘争までは国会論議と大衆行動は、打てば響くような密接な関係にあった。ところが、六〇年代の炭鉱労働者に対する「政策転換闘争」、政暴法

反対闘争、原子力潜水艦寄港反対闘争…

は、国会へデモをかけても、国会内の論争に影響を与えることが少なくなっていた。特徴的なのは、六五年秋の日韓条約批准阻止闘争である。この闘争では六〇年安保と同じく全国から労組活動家、学生が国会へ押しかけたが、自民党の一方的な採決に影響を与えることができない。社会党の国会議員は日韓条約の内容を暴露する時間を与えられず、物理的抵抗でせいっぱいの抗議の意志を表明するにとどまるのである。そして国会における政府与党の多数をたのみの一方的採決は日常化する。三矢作戦、松前バーンズ協定の暴露も、かつてのような大衆闘争の高揚をもたらさなかった。

六九年の「沖繩返還、安保自動延長」をとりきめ、日本の七〇年代帝国主義路線の基盤を固めた、佐藤・ニクソン会談に対しては、国会における暴露の闘争はほとんど放棄されてしまい、佐藤自民党政府がつくりあげた総選挙の網にからめ

日本社会党 定期全国大会



とられて大敗北を喫してしまった。

十一月十七日朝の佐藤訪米阻止闘争は、前々日の社会黨員を中心とした九段会館での集会で、現地闘争をやりぬくと確認しておきながら、総評指導部の現地闘争中止の申し入れに膝を屈して、わずか二四時間足らずのあいだに、社会党指導部は、その行動の取り止めを決定したのである。

十一月十七日は、社会党指導部と総評指導部の反対にもかかわらず、冷雨が下

着まで滲み透る早朝、社会党の下部活動家、社青同、自治労をはじめとする青年労働者、ベ平連、婦人活動家など約二五〇〇名が無届け集会とデモを敢行した。

社会党国民運動局長、伊藤茂の名で集会デモが認められていたのを、前夜、伊藤茂局長が取り下げたので、この行動は非合法となった。その結果、一七〇名を超える人々が機動隊に逮捕され、また多くは冷雨のそばふる中を押し倒され、足蹴にされ、追い散らされたのであった。

このような社会党に対して、労働者大衆は、前回よりも五〇議席減、得票率で六四％減の二一・五％、票数で二七五万票減の一〇〇七万票という、敗北と後退の結果を与えたのである。

もし社会党が、労働者大衆の与えた強烈な批判の意味を、その根源にふれてとらえることに怠情であったならば、新たな七〇年代の階級戦のなかで敗北の過程を、その死まで歩みつつけることになるだろう。

しかし、このことは非常に困難なことだが、敗北の根源について、社会党の成立の根拠そのものの否定を恐れることなくえぐり出し得れば、その大胆な勇気をもって当れば、五〇年代の「戦闘性」を継承し、保存し、新たな七〇年代闘争

に対応して発展させることは、あながち不可能なことではないと思う。

■再建案に怒り

さる二月五日、六日、社会党の拡大中央委員会がひらかれた。大会準備委員長の江田書記長が執行部を代表して提案した中間報告は、上京してきた中央委員の集中的な批判によって採択されることとはならず、討論を集約して第二次案をつくることになった。この討論によって、執行部と地方県本部を指導する中央委員は、党再建の討論は行なったが、その展望をつかむことには失敗しているというのが、いつわらざる評価であろう。

中間報告のなかの「長期低落傾向の歴史的総括」というテーマで「……社会党はどういう党であるか、どういう党であったか、その科学的歴史的総括を行い、実りある党再生論議の基礎資料としてみたい」としてつぎのように、「科学的な歴史的総括」を行うのである。「では社会党はどんな党なのか。日本社会党の基本的な性格、構造が形成されたのは一九五〇年代初期だという点では今日ほとんど異論がないと思う。この党の性格、構造を規定したのは戦後前期の日本社会の特殊な状況であり、敗戦で経済が崩壊し、国民生活は窮乏化し、しかも国民の希望を裏切って、日本の再軍備と基地化が強制され、戦後始めて味わった人権や民主

主義も支配層の手でふみにじられようとしていた。そうした状況から広汎な国民大衆の間に平和、人権と民主主義、あるいは労働者の生活や労働条件の擁護に対するし烈な要求が生まれ、この自然発生的な要求を実現するためのたたかいが実は客観的にはきわめて反体制的な意義をもち得た。つまり、本来からいえば民主主義的な当然の要求が国民をふるいたたせる新鮮な意味をもち、反体制的な抵抗の闘争になり得た。言いかえるならば、戦後の日本社会では社会主義と護憲（平和、民主主義、労働者の権利と生活擁護）とがきわめて自然に結合し、そこでは護憲―革新―社会主義が事実上、同義語であり、同じイメージをもち得た。だから当時では社会主義理論も具体的なプロセスや政策の媒介を今日ほど必要としなくても済んだ。そういう時期に社会党の原型が作られた」とし、戦後後期の今日では、このような状況が消滅し、「それは根本的には戦後前期を特徴づけた国民大衆の自然発生的な要求や運動に受動的に依拠し組織的には総評に依存した段階から、逆に意識的な反体制―真の意味の社会主義の党としての指導性を発揮し自前の組織と運動をつくりだすべき段階につき進むことが必要になったということである」と指摘している。

私は、この一連の文字を読み進むうち異常なまで不愉快になり、憤懣やるかたない思いにかりたてられた。「よくも、

このような評論家的な文書を執行部の責任で出せたものだ」という思いである。

この憤懣は、地方から上京して二日間の討論に参加した中央委員と同じであった。しかし、私は、この中間報告書に貫かれていた根本的欠陥が、二点あることに気づいた。

■没主体、非科学性

その二点とは、第一に闕った主体としての総括も、闕う主体としての方向もない、いわば労働者大衆の痛みを自己の苦痛として感ずることのできない者の文書であるということである。このような人々には三井三池の労働者、沖繩全軍労働者、二重処分を受けた東交労働者など、そしてベトナム人民の抑圧された人々の血の出るような叫びが、他人事としてしか聞こえないであろう。

第二点は、科学的な歴史的総括を行なうとあるが、断じて、科学的でも歴史的でもない、ということである。

第一の点からふれよう。

五〇年代の一〇年間の連続的な労働者大衆のたたかいのなかで、不断に噴出し高揚しつつ、指導部を吹きあげていったエネルギーは、まぎれもなく労働者階級の普遍的質をもった戦闘性であった。あの連続的なたたかいの過程で流された血と涙、そして喜びと悲しみは、まぎれもなく労働者階級のそれであり、この人間

解放への巨大な推力であり、今日社会党が失った宝を見ることができない者は、ブルジョア思想のひからびた感性の持主だといわねばならない。

労働者大衆は、この大工業資本主義に突入していい、最も鋭い矛盾を、その巨人の体軀のうちに持っている社会的、歴史的存在である。その矛盾を単純化して言えば、一方では日々生きるためには自己の労働力商品売るということで、

ブルジョア制秩序の中で私的商品の所有者として現われ、その限りで労働組合をつくって自己の商品を高く売りつけるのである。他方では、商品所有者である限りは、ますます機械と金にしばられた奴隷としてか生きられないから、それからの解放をめざし団結してたたかう。つまり、労働者大衆は人間を一面的に切りちぢめられ疎外された生活者としての自己の側面と、その自己を否定する人間解放の主体としての普遍性、全体性を押し出さざるをえない自己との絶え間ない相克によって、人間的苦悩を強いられいているのである。五〇年代の労働大衆と、その大衆とともに歩んだ社会党の活動家たちの苦悩も喜びも、このような自己矛盾に根ざしており、平和と民主主義という歴史的限界（これはあとでふれる）をも突破するエネルギーをしばしば見せたのも、労働者階級の自己の一面性を否定する普遍性としての質の噴出であったのである。

佐藤訪米阻止闘争で、現地羽田闘争を敢行せんとしたのも、評論家がいうようなマンネリな情性でそうしたのではなく、労働者階級の政治意志を表わしたのであり、その人間解放への本能にふかく突き動かされて結果をとげたのであったのだ。この闘争を直前になって裏切った社会党指導部の本質は、総評現指導部が陥りつつある、ブルジョア秩序の官僚的補完者としての階級的犯罪性と同質であると言わなければならない。このような労働者大衆の苦悩の泥土からの突出を、何ら総括することのできない指導者は、もはや労働者階級の指導者でも、同志でもない。このような作文は、五〇年代闘争のなかでたたかってきた全国の党の活動家の共感をうるはずはない。

第二の点は余白が少いのでつぎのことだけ言っておきたい。科学的、歴史的総括であろうとするならば、国際的な情勢の流れを総括しなければならぬということである。中間報告の視点は、社会党の結党いらいの欠陥である、一国主義の見解でしか状況を見ていないということだ。まるで資本主義は一国で成り立ち、したがって階級闘争も一国でとげられるものであるかのように。

社会党は、平和と民主主義の旗手として登場した。平和と民主主義とは何か。それはプロレタリア大衆の当時の自然発生的な要求の集中的表現であったばかりでなく、組合主義的、議会政治的

な理念的表現なのである。それはブルジョア秩序の枠組の中で、経済の安定成長を背景にして、労働者大衆の生活者としての共同利害を社会党が議会で代行し、ブルジョアジーは議会を通じて国民諸階層の利害を操作したあり方であったのである。組合は、合理化過程で職場の資本支配の強化と引きかえに、生産性のおこばれをもち取り引きの道具であった。このような議会政治、組合主義を可能にした背景には、戦時革命の嵐が世界的にアメリカ帝国主義の強大な力によって押し止められ、かつ二〇年にわたって世界的な経済の安定成長があったことである。

しかし、ベトナム革命はアメリカ帝国主義の内部矛盾を激化させ、国際通貨の基軸として戦後君臨してきたドルは、六八年三月のロンドンの自由金市場の取引停止いらい、他のポンドをはじめとする通貨の動揺をもたらし、総じて世界資本主義の危機への突入を告げ知らせた。このような七〇年代世界資本主義の危機の入口に立った日本帝国主義は、高成長の行手に黒い影を落しており、その内部に公害、交通災害、物価高など社会的矛盾を蓄積している。そして、政治的には、議会制民主主義の危機から、ブルジョア反革命か、プロレタリア革命かという熾烈な階級闘争の時代へ突入しはじめている。このような時代に対応できる党をつくりあげることが、労働者大衆に応え、社会党を再生させる大道であろう。

■どの旗を掲げるべきか

いま、社会党の行くべき道について明確なモデルがあれこれ言われている。それもせい急に求める傾向がつよい。今度の選挙で表現された労働者大衆の社会党支持傾向の急速な分解で、議員の足もとが音をたてて崩れはじめたからである。

とくに、今日の労働運動の動きは、せきを切ったように左右に分解しはじめている。その流れの一つの、IMF・JIC（国際金属労連日本協議会）へは鉄鋼をはじめ自動車、電機、造船など日本の基幹民間産業部門が結集している。これに中立労連傘下の労組、民社を支持する同盟系の労組が結合して総評に対抗する大ナシ・ナル・センターの動きが強まってきた。この動きに結合しようとしているのが、全通の宝樹委員長、全鉱の原口委員長などである。この大ナシ・ナル・センターを目ざす運動の眼目は、総評の中途半端な政治闘争、経済闘争に対して、明確に資本の生産性向上に協力し、その利潤の分け前を多く獲得する方向である。この巨大な流れに対して、総評の民間左派主流は反撥しているものの、これに決定的に対決する方向を見出しえないでいる。地域的にも大阪をはじめ主要な工業都市において、民労懇など生産性向上運動に協力する民間労組は急速に組織化され、新しいナシ・ナル・センターのロ

ーカル・センターとしての動きが強まっている。総評と社会党の指導部は中央、地方でこの流れに乗って圧倒されつつある。

この流れに乗って政治的立場を守り強めようとする傾向は、日本労働党（宝樹全通委員長提起）結成への動きとなって現われてきつつある。この党の方向は、イギリス労働党、西ドイツ社会民主党など、徹底した議会主義党である。

右の流れが第一の潮流とすれば、第二の流れは、伝統的民同左派の潮流である。この潮流は総評の主流太田、岩井氏に人格的に表現され、主要な労働組合は官公労を中心とする。しかし、この民同左派の流れは自己の基盤が崩れつつあるため、その流れを食い止める方向として、政治的には日共との統一戦線へ引き寄せられざるをえないであろう。この流れは社会党の中に、党の基本路線の保守と堅持を主張しつつ、結局は社共統一戦線へと進む傾向をもつであろう。

社会党の議員を中心とする指導部の傾向は大きくはこの二つの傾向を表面化させてつつある。しかし、決定的に表面化するのには、労働戦線の結果を待ってのことであろう。または、社会党内に限って言えば、四月末の党全国大会で、あるいは来年の参議院選挙後に一挙に噴き出る可能性を孕んでいる。このような大きな方向の流れは、党内外での常識とさえない。ただ時期は微妙に諸要素がからみあって明確には予想がつかかねるが。

しかし、この二つの潮流は、さきに述べた労働者大衆の普遍性を担った道ではありえないのである。この二つの潮流に入ることは、日本帝国主義者によって許容されたブルジョア秩序の擁護者となることであり、帝国主義的労働運動、帝国主義的社会主义者（？）の道に立つことになるということ（？）を隠すことはできない。そして、この道に入るのには、ベルンシュタインが先道し、それに原則的に反対していたかにみえたカウツキーが、ついにドイツ帝国主義者の擁護者に転落していったように、先に進むか、後からハムレットのような悩みをぐちりながら入るかの違いでしかなく、帝国主義社民であることに変わるところがないのだ。

このような状況はさきにのべたようにベトナム革命によって切り開かれた世界資本主義の危機、戦後革命の新たな時代への突入を背景としているのである。

すでに、一昨年五月のフランス一〇〇〇万労働者の職場占拠と反乱の開始、西ドイツ、イギリス労働者の山猫ストの日常化、イタリアの三労組統一の動きとゼネストの連続、さらに学園における反乱はわが国も含めて、世界的激動の始まりを告げているのである。わが国における資本主義体制のなかで蓄積された矛盾は労働者大衆の物質的というより精神的苦痛をもって我慢ならない水準へ近づいてくる。まずその矛盾を学生大衆が先取りし、さらに反戦青年委員会に結集する

青年労働者へ波及し、今や中堅の労働者大衆、古い労働運動の闘士の革命性を引き出そうとしている。まだ、これらの流れは小ブル的急進性をともなっているが、新しい七〇年代階級闘争の担い手として登場しはじめており、その突きつける旧秩序への根底的な告発から、何人も逃れることはできない。この流れは、労働者大衆への奥深い波及力をもって進みつつあり、三里塚をはじめ、ブルジョアジーの権力によって解体を迫られている農民、市民、婦人、インテリゲンチヤとの戦闘的連帯をつくりあげつつある。

私は、この潮流がまだ流動的であり、階級的に未成熟であるとしても、この流れに現実的に依拠せずして、七〇年代階級闘争としてのブルジョア反革命とプロレタリア革命の激闘に勝ち抜き、進撃することはできないと信じている。この道は苦難の七〇年代を通して、その基盤をつくりあげることができるとであろうけれども、この道のほかに展望はない。

この道は、JICと民同の労働運動に対して、明確に日本帝国主義に対決する反帝労働運動であり、右翼社民の国民戦線に対して、中間主義としての社共統一戦線を左から解体しつくすところの反帝プロレタリア統一戦線の旗を押し立てて進まなければならない。われわれは、この道に立って、社会党内外の同志、労働者大衆との団結をつくりあげつつ前進する。

（二月七日）

ニコニコが語る70年



ビラは紙の弾丸なのだ

特集2

3

み
に
こ
み
さ
ん
か
味煮込讃歌

我憂不可判真偽
大鱈込増増横暴
推進文化大革命
画入鱈平小新聞
制作頒布全日本

ここにたくさんのビラやパンフレットやミニ新聞がある。全国各地で運動をしているグループから、「週刊アンボ」の編集部へ送られてきたものだ。とてもおもしろい。商業誌にない新鮮な驚きと感動を受けるのである。まったく新しい発見が、いくつも掲載されている。それは、けっしてマスコミではとりあげられないが、だからこそかえって重要なことがらが、もれなくすくいあげられて、ガリ版やタイプ印刷の紙面に書きこまれていくからである。手づくりの運動である。そこで、これらのミニコミを誌面の許すかぎり紹介することにした。じっくりと読んでみると、また違った角度から、一九七〇年代に向かって、日本の各地でいま、何が問題となり、何が起こりつつあるかを、知ることができるだろう。

(編集部 A)

雨か血潮かバンガサ・ゲリラ

▽「月刊浪人」2号傘はり中

去年新宿西口のフォーク集会で、番傘をさして歩きまわり一躍名をあげたバンガサ・ゲリラたちは、機関誌「月刊浪人」1号を夏に出したきり、姿をかくしたかと思われていたが、ここにふたたび登場。まず、彼らの健在をしめすビラ(カルメン・マキの姿絵入り)を紹介する。

「かったるいのか つらいのか
それともやっぱり 馬鹿なのか
泣かぬ 笑わぬ カルメンマキ」
とひとに呼ばれて はや六月
そんなわたしも 惚れました
斬った賭ったの 男の世界
雨か血潮か バンガサ・ゲリラノ

みんな読んでる 月刊・浪人、みんな買ってる 月刊・浪人、僕らのメディア、月刊・浪人、

連絡先 東京都代々木郵便局私書箱42号。「月刊浪人」2号を準備中だ。定価1冊100円。送料25円。

▽弾圧を見たら受けたら救済へ!

暴力を見たら受けたら警察へ、というその筋のキャッチ・フレーズを逆手に

取って地道な救援活動が続けているのが福岡ベ平連救対。彼らの機関紙「警察を我々の手に」(ガリ版4頁)は、今年の1月30日に創刊された。そのなかから、コラム「救対辞典」を紹介してみよう。

通信 警察を我々の手に!

「救対辞典」

・警察は法を守って(?)人を守らないもの。

・逮捕するは異常なふるまいありという理由で、罪に問われたものを正式に留置する。

・公務執行妨害デモに出ている市民、労働者、学生を弾圧するとき、機動隊や私服の士気が低下しないよう、彼らが自信をもって暴力をふるえるよう制定された罪名。

連絡先 福岡市箱崎帝大前町4組2326の1 石崎昭哲気付。1部カンパ15円以上。送料15円。月刊。

▽「朝日真聞」現わる

新潟自主上映の会では、会のメンバー

に1枚ずつガリ版の原紙を配り、それに勝手に自分の目頭考えていることや訴えを書いてもらい、集めて1冊の小冊子をつくりあげた。原紙を配ったところが新しいアイディアだ。その小冊子から1頁を紹介しよう。

朝日新聞

高校生の政治活動を奨励文部省

校外デモ参加を推進

文部省は高校生の政治活動と政治教育のあり方について基準をまとめた。政治目的を持つ学校外のデモ、集会への参加を奨励するというのがその大筋だ。また政治問題を教育の中で扱う場合は、多くの側面を教え(特に体制が何を望んでいるかをはっきり示し)教師の個人的意見の「おしつけ」については干渉しないとしている。文部省はこの基準を十月中に都道府県教育委員会に通達する方針で「初め教育現場に即した基準」だと、各界の賞賛をあびている。

▽あなたはどこらの側を選ぶか?
連絡先 新潟市南浜通り1の362高橋方

福岡ベ平連は、いつもていねいな美しいビラを作っている。「一九七〇年は何の年?」というビラの文章は、わかりやすく読むひとを考えさせる。(活版)

一九七〇年は何の年?

EXPO '70?

ベートーヴェン生誕二〇〇年?
イヌの年?

一九七〇年は、ソソミの村人、ピアフラの赤ン坊、そして沖縄の人々の問いかけに対し、私たち一人一人がハッキリと答えなければならぬ年です。

「去るも地獄、残るも地獄」と言いながら、銃剣の下でのストライキを続ける沖縄全軍労——沖縄復帰の内祝いとして、カラーテレビ用のマイクロ回線を敷設することを発表した佐藤首相。あなたはどちらの側をえらびますか?

▽このビラはなんだ?

なんだ……?

広場とはなんだ
フォークソングとはなんだ
自由とはなんだ

ベ平連とはなんだ

機動隊とはなんだ

アンボとはなんだ
なんだとはなんだ

このビラはいったいなんだ

ひろば!

それは集まり、歌い、交歓し
あう、ばくらみんなのものだ

あなたの参加で動く盛岡ベ平連

▽喫茶店に「連絡ノート」

あなたの参加で動く盛岡ベ平連、という呼びこみ文句で運動を続けている盛岡では、市内の喫茶店「コロンビア」(このコーヒーは美味だそうです)に、連絡ノートが置いてあり、さまざまなひとが、さまざまなことを書きこむ。このノートをもとにして作ったのが「ベ平連通報(盛岡)」。その中からひとこと。

KMORIO 通報

市民運動を担うあなたに一言
闘いはシンドイ、長い、いつまでもフェスティバルではない。そのため決意は、どっかに(さめた所)したためておいて下さい。

(連絡ノートより)

このビラは去年の8月23日、東京は、日比谷野外音楽堂で開かれたベ平連集会へ広場・フォーク・権利Vを呼びかけたもの。まず、初号の大きな活字が「なんだ」と飛びこんできて、つい読んでしまふ。読んだあとで「なんだ」と集会に出かけるか、ゴミ箱に捨てるか、それが問題なのだ。

さて、高校生も運動が活発になるにしたがって、ミニコミが量質ともに高度成長。1つの高校に定期的な紙誌の4つや5つは必ずある。まずはハレンチ・デモの、ハレンチビラから御紹介。

▽ハレンチ・ヤングのビラ

11・15 佐藤訪米阻止
ハレンチ・デモをノ

佐藤訪米阻止へ高校生の渦巻を横ダンマク・プラカード・ワッペン・ゼッケン・ワンショウ・ハタ・ビラ・ビラバクダン・ポスター・ハチマキ・肉弾・美声・ドラ声・肉体美・ステッカー・パッチ・スード・ギター・歌・花・無etcそして君の意志すべての手段をもって阻止しよう!
ベ平連は花で武装する!!

一九六九年十一月



▽学校に自由はない

生徒会をわれわれの手に！
学校に自由はない。何を出版・掲

示するにも、常に検閲がつきまわっている。われわれ生徒の集合体である生徒会は、学校当局の都合が悪いと、生徒会役員が呼び出され弾圧されている。これは楳林祭が一方的に延期されたことで明らかだと思う。生徒会が話し合いを要求すると、学

校当局の答えは「生徒会は組合ではない。話し合う必要はない」その上「校則その他に不満があるならば、学校をやめろ」と、つけ加える。

これが教師といえるでしょうか。これが真理追求の場であると誰がいうのでしょうか。（後略）

もちろん、このビラは「検閲」なし。弾圧のスキをぬってまかれたもの。連絡先は東京ヤングベ平連気付。

▽アレグロ・マントロップ

学校に自由はない、それでは学校に自らの空間を創り出したとき、高校生は何を考えるか。バリケードの中で拾ったラクガキを一つ（去年9月30日、青山高校の封鎖中の教室の黒板から）。

バリケードという純粋なあまりにも純粋な、設定された場、においてはじめて疎外されたところの自己を客観視することが可能となる。疎外——はく奪された意識——今まさに自己は創られつつある。

第一章（落ち着いて——モデラー）疎外の認識Ⅱマルクスの四つの労働疎外ⅡH・ルフェーブルの現代的展開。

第二章（冷徹に——アレグロ・マントロップ）自己否定の具体化Ⅱ物象化（情況の設定）日常生活批判。

第三章（戦闘的・意識化——アパシヨナート）行為と認識の一体化。

第四章（歓喜としての苦難——ア

各地で「週刊アンポ」ローカル版

東京の週刊アンポ社が発行している「週刊アンポ」は、週刊と名乗っているが、実は隔週刊。そこで、日本各地で、ホントに毎週発行している、ほんものの「週刊アンポ」が現われた（福岡ベ平連、その他）。全国的に見ると、一体何冊の「週刊アンポ」が発行されているのだろうか。

▽「反戦市民」 松山ベ平連

伊予は道後の湯の町にも、機関誌「反戦市民」が誕生。松山ベ平連法律教室シリーズ「道交法って何だ？」は、大変実用的な記事である。創刊の知らせを次のように送ってきた。

反戦市民

松山ベ平連

松山ベ平連では機関誌「反戦市民」を作りました。いわゆる反戦運動について、素人ばかりの者が苦心して原稿を書いて約四百部作製。「週刊アンポ」のローカル版といったところです。毎週木曜、定期ティーチ

ンダンテ）解放を意識化せよ！
弁証法としての第一章への必然的移行。

イン（午後5時、一万公民館）と、土曜日、駅の地下街でフォーク集会をやっています。

連絡先は愛媛県松山中央郵便局私書箱132号 松山ベ平連気付

▽「明日ドーナル」いよいよ発刊

「朝日ジャーナル」など、もうおかしくて読めない。これからは「明日ドーナル」の時代だ。久しく発刊を待たれていた南大阪ベ平連（なんだいべ）の報道・解説・評論誌「明日ドーナル」が、いよいよ近日発刊までこぎつけた。現在創刊号を目ざして準備に大奮。定価未定。連絡先は大阪市アベノ区松崎町2の5の31、近海荘67号、南大阪ベ平連。

▽元祖「週刊アンポ」（神戸）

「週刊アンポ」（こうべ）は、去年の10月4日が創刊だから、一番歴史が古い。タブロイド版・4頁・ガリ版刷りの週刊誌は、印刷美麗、中味濃厚。新譜紹介のページまであり、じっくりと読ませる。

週刊アンボ こうべ

楽器の持込み禁止ノ

御影高校反文化祭

10月5日御影高校で、学校側の文化祭に対して、主体的な文化祭を追求する反文化祭が企画された。

当日、ベ平連のフォーク・モグラが参加すると、「凶器と楽器の持込み不可」といった掲示が出されており、機動隊の車一台と制服警官が学校の前に配置され、20数人の教師が門をかためている。

ベ平連の仲間の一人が中庭で歌おうとすると、教師数人が実力で彼を追いだした。しかし、フォーク集会は、百名の抗議集会で続けられたのであった。

連絡先〇神戸市灘区六甲台神戸大学学生会館204気付 神戸アンボ社。バックナンバー有り、1部35円（送料含む）。

▽たえ五人のデモでも

静岡地区・ベ平
連絡セタンノ 通信

五人のデモ——12月定例デモ

12月7日の日曜日、ベ平連の定例デモの日であった。デモった人数はわずか5人だった。4人が旗と横断幕を持ち、残った1人がハンドマイクで話す。

旗だけが歩いている感じで、きつと奇妙な感じがしただろう。私服も何かニコニコしているような感じでむしろに腹が立った。しかし、5人のデモに参加して一番感じたことは「デモしてる実感」が感じられた。何か言葉で言い表わせない「少人数でもやるんだぞ」そんな気持ちが強かった。70年安保が怪物のように存在する限り、黙っていることは許されないとと思う。たとえ一人のデモであっても。

激動の70年代 断固闘うぞノ

連絡先〇静岡市池田756の5葵荘Bの1岡村周善気付。

▽アンボ大学開校

関西ベ平連 通信

安保をつぶすための

「アンボ大学」入学のしおり

安保は広範な反戦・反安保の闘いを展開する私たちの前にドッカリ腰をすえている。安保をつぶすためにさまざまな行動をしたい。そのためには、より地域に根ざした行動が必要だろう。1月からアンボ大学を設

ミニコミこそ力をもつのだ

ここに浜松ベ平連が作った、掛川市民へのアピールがある。ガリ版刷りの一枚のビラだ。じつと、この手作りのビラを

立する。

〈カリキュラム〉

2月11日 豊中市民会館

「産業軍事化」「日本の軍事力」「基地撤去闘争」について。

●求人広告

▽ガリキラー（ガリをきるひと）

▽スリラー（印刷技師）

▽ポスター（ポスターをはる人）

▼特技のない人（手に職がつけられず）。

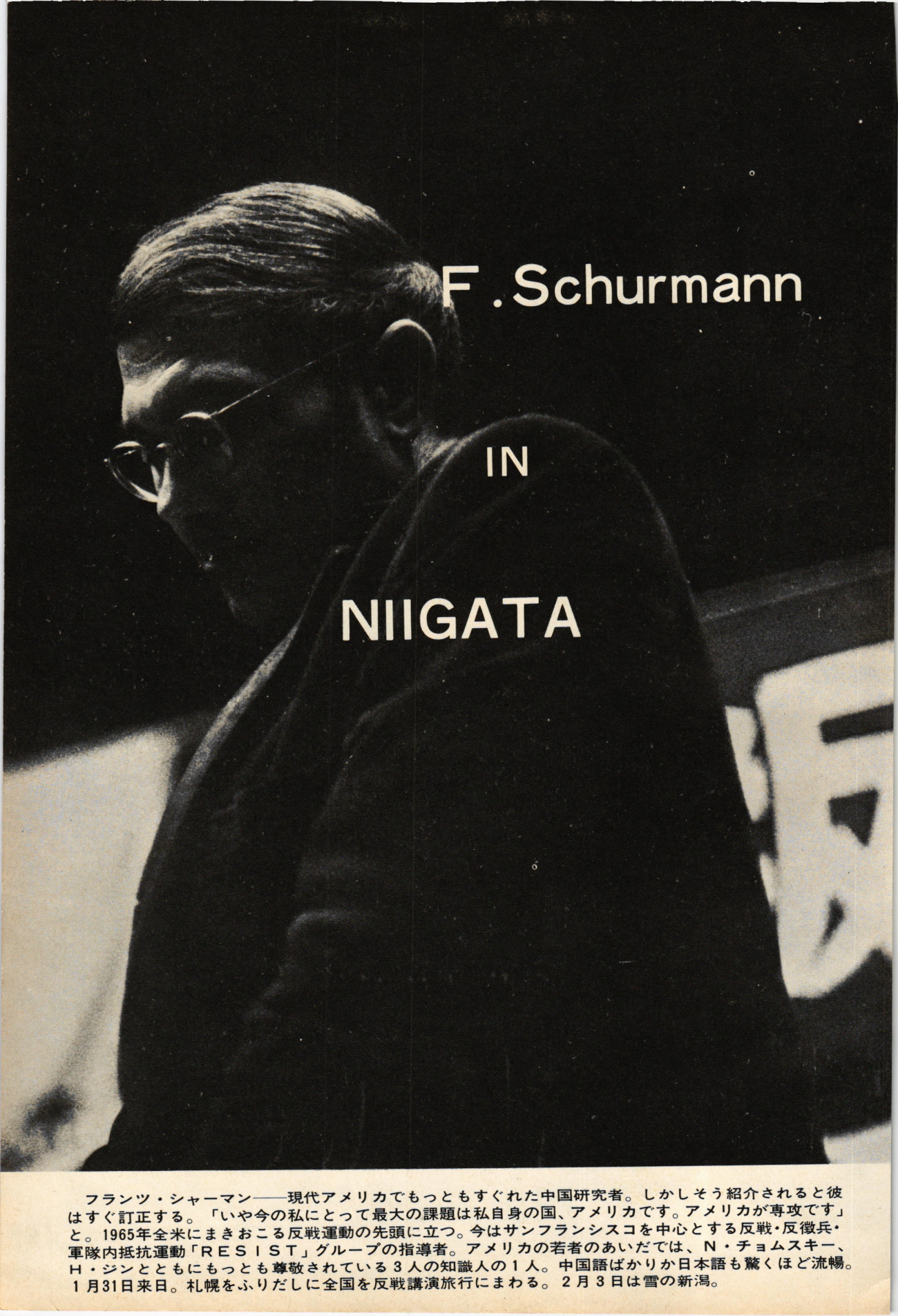
面談即決・乞来事務所

連絡先〇大阪市北区葉村町1芝山ビル2F 関西ベ平連気付。

ガリ版刷りのビラには、活版にはない味わいがあるものだ。作るひとの汗や呼吸が読者にじかに伝わってくる。この広い空の下、どこかの片隅で起こった、小さいが、しかし決して見のがすことのできないニュースを伝えてくれる。

▽未熟って何だろうか？

掛川市民のみなさんノ（43頁へ）



F. Schurmann

IN

NIIGATA

フランツ・シャーマン——現代アメリカでもっともすぐれた中国研究者。しかしそう紹介されると彼はすぐ訂正する。「いや今の私にとって最大の課題は私自身の国、アメリカです。アメリカが専攻です」と。1965年全米にまきおこる反戦運動の先頭に立つ。今はサンフランシスコを中心とする反戦・反徴兵・軍隊内抵抗運動「RESIST」グループの指導者。アメリカの若者のあいだでは、N・チョムスキー、H・ジンとともにもっとも尊敬されている3人の知識人の1人。中国語ばかりか日本語も驚くほど流暢。1月31日来日。札幌をふりだしに全国を反戦講演旅行にまわる。2月3日は雪の新潟。



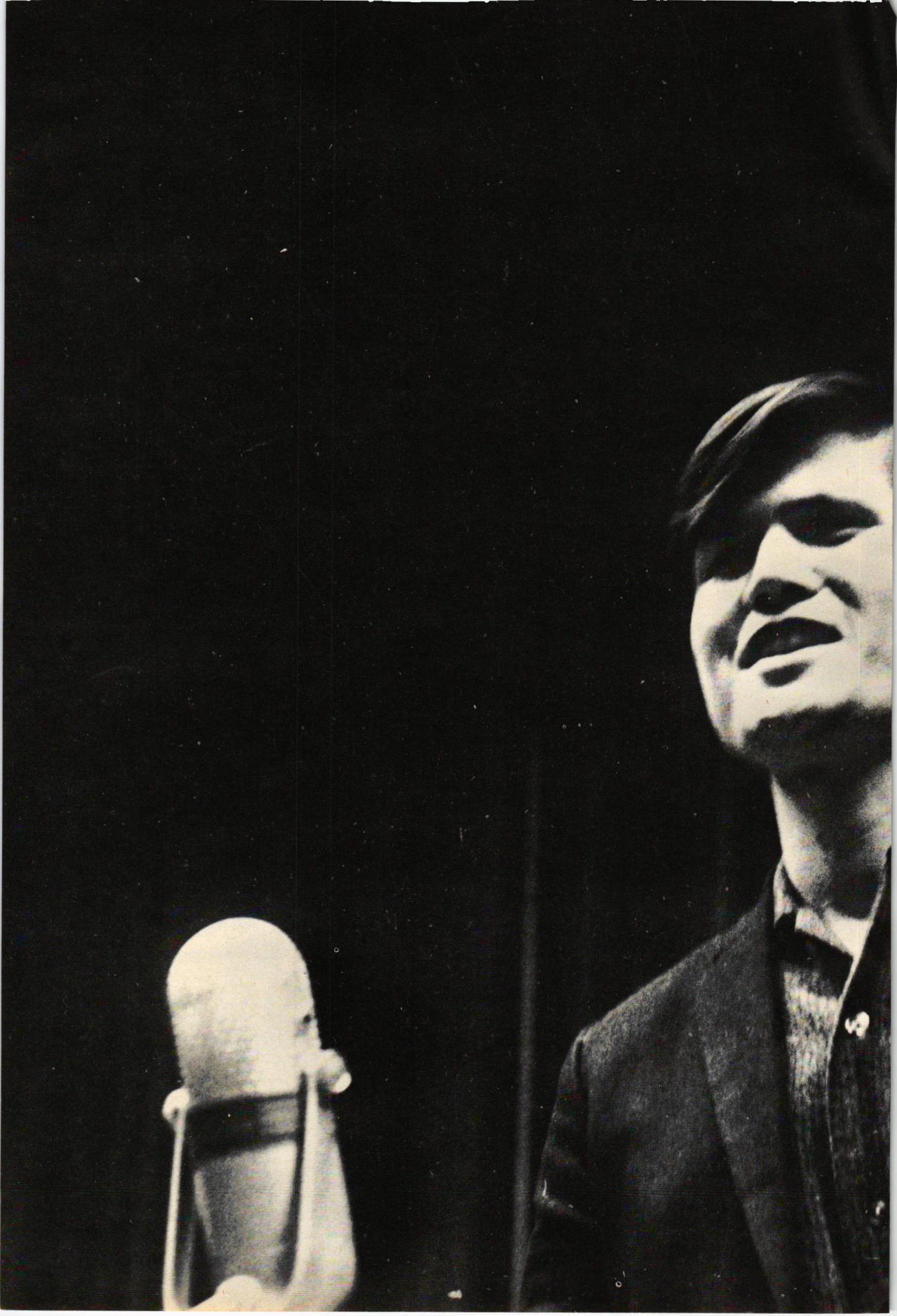
新潟市公会堂は1500人の参加者で満員。配られたべ平連や反戦青年委のビラにもいちいち眼を通す(右左とも新潟集会の会場で)。



この集会では、元航空自衛隊三曹小西誠氏も出席、反人民的自衛隊の解体を訴える。小西氏の行動と訴えは今、全国に大きな反響をまきおこし、「第2・第3の小西をノ行動委員会」は、地元新潟をはじめ、仙台、東京、浜松、大阪、徳島……など各地に生まれている。集会では、小西氏の行動を支持し、そのよびかけに答えようとする人びとが、すべて「特別弁護人——民衆弁護人」となることが提案された。チャーマン氏、小西氏につづいて立ったもののべ・ながおき氏や小田実氏のその訴えに、チャーマン氏は通訳もまじえず聞き入り、深くうなづいていた。

なお、この集会では、福岡の前田俊彦氏も講演するという多彩な顔ぶれ。







「第2・第3の小西を／新潟行動委員会」は、全国の反自衛隊闘争の先頭を切る。昨年12月27日、新発田市の自衛隊基地前へ進む小西氏支援の行動委主催デモ。



集会の翌朝早くシャーマン氏は雪の新潟市内を散歩する。今日はこれから東京を経て名古屋の集会に向かう。小西氏が福岡までの集会すべてに同行することになって、シャーマン氏は「ウレシイデスネ」と日本語でいう。



(34頁から)

考え、叫び声を上げよう

(掛川西高では、ほんとうはどんなことが起こっているのでしょうか)

(ことのおこり)

この六月伊東市で行なわれたアスパック会議。この会議に反対するため全国から多くの労働者、市民、学生が伊東市に集ったが、西高の生徒たちも反対行動に参加した。これからの日本や世界の暗い未来と、不安を敏感にかきつけて(な)にしろ、はっきり言えば、佐藤の榮作どんの考えていることは、戦前の大東亜共栄圏と同じなんですからね。ついでに言えば、伊東には、小・中・高の先生たちもたくさん反対集会に出かけた。しかるに、しかるに「アスパック反対行動に参加した」という理由で、高校生に処分が下された。

退学処分七名、無期謹慎三名、

(会社で言えば、クビ、無期停職)

(校長や教育委員会の言いわけ)

——高校生は未熟でアール。政治的教養をつむのはおおいにけっこう。しかし、行動はいけないのでアル。

おえらい衆のいうことのもっともらしい、しかし、ねじれているわけ

1 人間は果物とちがって未熟なんかない。自分たちが人間であるとおもったとき、人間は人間である

2 中卒で就職した、高校生と同年

代の少年たちはどうなんだ? 「未熟」だといって社会的に保護され、優遇されているのか? 一人前以上にあつかわれているではないか、(金の卵とまではやされて)ピストルをぶっ放したくなるような安月給でこきつかわれ、一人ぼっちにされているではないか?

▽オレはハッキリと確信したんだ

最後に「しみず・ベ平連ニュース」

(第2号)を紹介しよう。ガリ版刷りで、ワラ半紙一枚の新聞だ。去年の8月31日掛西不当処分撤回の集会とデモに参加した一市民が、その感想を記録している。ミニコミの大切さを充分考えさせる文章である。

しみず・ベ平連ニュース

オレは見たんだ!

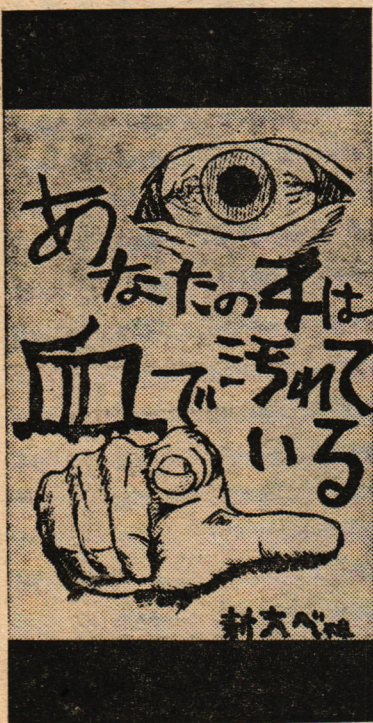
8月31日掛西不当処分撤回集会とデモが行なわれた。翌日の新聞は、彼らを暴力集団として報じた。

「掛川市民の心配現実、大あれの学生デモ、ゲバ棒手に突進」(毎日)

「またもゲバ学生」(静岡) これだけを見れば、その場にはいないものなら誰もが彼らを単なる暴力集団だと思ってしまう。そのために機動隊が出動したのだと思ってしまう。

かつてのオレでは、そう思ってしまうだろう。だが今は違う。オレは見たんだ!

女性の上半身を裸にしてジュラルミンのタテの下に引きずりこんだの



を、一人のデモ参加者に対して数人の機動隊員が何も抵抗してない者をいや抵抗できなかった者をなぐる、ケルの暴行を加えたのを、隊列の中にいるデモ参加者を無理矢理引き抜いて暴行を加えたのを、機動隊により分断されたデモ隊20数名が掛西高校門前でフォークを歌っていた時、それを見ていた市民約50名を機動隊が強制排除したのを、オレは見たんだ。

新聞記事やテレビのニュースとは全々違うものをオレは見た。そして聞いた。そしてオレははっきりと確信した。警察・機動隊つまり国家権力は、当然の権利を要求している者を不当に弾圧する以外の何ものでもない。新聞は事実なんか伝えやしない。テレビもそうだ。支配者どもの機関紙にすぎないんだ。(Y・I)

ここに紹介したのは、編集部に送ってきたミニコミの、ホンの一部だ。紙面の都合で抜き書きしかなかったけど、これからも機会あるごとに紹介したい。お互いに交換してみるのもいい、長野の資料交換センターを使うのは一つの手だ(「週刊アンボ」第三号、市民運動入門、参照)。それから、ビラや新聞を出すときは、連絡先や発行日付を入れた方がいいだろう。作ったらぜひ送ってほしい。

■闘う労働者の座談会

■労働運動はこれでいいの

力

社会党の敗北、そして労働運動の経済主義化、官僚主義化。

動脈硬化をきたしたその原因は労働組合自身にある。

——労働運動内部からの赤裸々な告白。

編集部 ■今日、ここにお集まりいただいたみなさんは、それぞれの産別労組において、戦後ずっと運動を続けてこられたわけですが、その体験を通して、これからの七〇年代闘争をいかに闘うかといったことを中心にお話し下さい。

高物価・高賃金・生産性の向上・投資力の上昇といった動向のなかで、企業の体質は漸次的変化をしている。その一方において、労働運動は、経済主義的・官僚主義的動脈硬化をきたしている。脱却のための方法があるのかどうか。そして七〇年代安部闘争をどのように闘っていくのか。そのなかで、反戦青年委員会とかかわりあいをするのか、といった点について、みなさんの体験からの御意見をどうぞ。

A ■おもなテーマである七〇年代闘争というところでいえば、総評全体のなかで、七〇年代闘争」とはということについて、完全に意志統一されているとはいえない。意志統一どころか、七〇年代闘争とは、ということ自体が、解明されていないというのが実情です。

B ■一月二十九日～三十日に、総評の拡大評議委員会という、大会につぐ会がひ

らかれたわけだが、そこで六月二十三日をめざして、安保反対のゼネストをうつということができそうになくなってしまった。そして、そのかわりに統一行動にしようか、集会にしようか、あるいはストライキをふくめた統一行動にしようか、というような、言葉はよいが、その

「ザマーみろ」の原因

C ■総評というのは、発足以来、そういう体質をかかえてきたのだが、いまや、いろいろな欠陥をもちすぎて、いままでは隠しておおてきたものが、職場の労働者にばれてしまった。それが、いまの運動の停滞につながっているように思えますね。

E ■七〇年にたいして、なにをやるかというところで、うちの単産は秋の段階で、総評の考え方は間違っており、七〇年の闘いとは、去年の秋の闘いであり、七〇年に入ってからではどうしようもないといってきた。ところがこれは、ある発言力のつよい幹部の意見であり、全体の意見であるということになってきているが、実際に幹部ひとりひとりにあたってみると、かならずしもそうではないんで

じつなにもしないような議論がなされている。ところがそのなかで、六月にストライキをやるのは、いったいなんのためだという議論が、さっぱりでてこない。これは、七〇年代闘争とはどういう闘いなのかということが、はっきりしていないせいだと思う。

すね。

B ■労働組合が一種の権力機構になってしまっている。とくにうちの場合、労使の二重属意識がつよい。そういう状態のなかで、むしろ側は労働組合を、自分の対置物としてしかうけとらないんですよ。そうしてみると、「組合の役員というやつは、うまいことしてるじゃないか」とか、「おれたちをおだててなにかさせて、自分たちだけいいことしてる」というようなムードが、かなりある。そこでそういう気持ちだが、社会党の敗北にたいする「ザマーみろ」という言葉になってはね返ってくると思うのですが。

E ■社会党一本やりを、押しつけてきたことにたいする反撥ということもあったと思いますね。



F ■それからもうひとつ。社会党に期待を裏切られたという、社会党支持層からの批判もあるし、社会党を悪くしているのは、組合幹部じゃないか、ということもあるんじゃないですか。

A ■公明党、民社党から共産党まであって、それが期せずして社会党一本化で、「ザマーみろ」という点では統一戦線を書く。(笑)

E ■「反戦」の労働者は、社会党の敗北ではなにもいってこないですね。

F ■去年の夏、反博の会場にある労組の幹部があらわれて、十一月闘争についてかたったのだが、その時、「否定すべきものは、いまの労働組合そのものだ」といって、ハッパをかけた。そこまではよかったが、問題はそういう幹部が、本来それにささえられているべき層からすら、じつはみはなされていたのではないかと思う。その辺が、いま説明されているような、さまざまな「ザマーみろ」という声になってはねかえてきたのだと解釈していますね。

B ■組合幹部のことですが、彼らは、左とか、右を問わずには、信頼感をもちえない状況がありますよ。それが逆に、労働者の分断をまねいているし、不信任の原因にもなっている気がする。

「かれ」の役割り

A ■総評の去年の方針のなかで「人間性回復」ということがうたわれていたわけですが、それに対して、雑誌「エコノミスト」が「総評は、まるで被害者づらをして、労働者一般を代表する形で、「人間性回復」などといっているが、総評自身、じつはその加害者のひとりなのではないか。」と批判したわけです。大変、痛烈な批判だと思って読んだんですが、確かにその通りなんです。組合自身、労働者に対する加害者として存在している側面がありますよ。その辺の自己批判に裏打ちされていないかぎり、幹部がいくら信頼してくれといっても、労働者は信頼のしようがない。いってること

はもとにもみえても、もとにもみえることがなぜ労働者のなかに入っていないのかということの原因をつかまないとダメですね。

E ■さっきの反博にきた幹部ですが、全電通においては、彼の役割りがまだ終わっていないと思う。というのは、彼は地方にいて、反戦の気持ちのよりどころとして存在していると思うんですよ。「彼がいるので、われわれはほかの単産にくらべ、しめだしをくわされることが少なくてすむ。勇気をもってやろう。」というのが、いざやろうというときになると、目の前にいる中堅幹部が押えつけてくる。そこで職場での活動ができずに、街頭に出てゆくことになってしまいう、関係がある。何年もつかかわらないが、そういう意味で、「彼」の役割りは終わっていない感じがします。

A ■ぼくの場合は、彼が、労働組合中央幹部のなかのただひとりの造反派じゃないかな。さきほどの総評の拡大評議委員会で、太田元議長が「今年の総評の春闘方針は、社会党ショックでじめじめしすぎている。運動方針はアジェンダだ。もっとアジレ、アジレば大衆はたちあがる。」といったのにたいし、「かれ」が「いま古い古い人が、なにかいわれたようだが……。」と、かみついていた。「運動方針はアジレだ」というものの考え方をしてきたから、いま労働者は労働組合を信用しなくなってきた。運動

方針はあくまでも組合の本音でなければならぬ。」といったわけです。そうしたことをいう幹部は、中央の段階では、ぼくの知るかぎり、彼ひとりですね。これは、「彼」が偉いということだけではなくて、労働運動のなかに原点復帰運動というようなものが、少しずつ入りこんできている、ひとつの証拠ではないでしょうか。

E ■そうですね、「彼」はまた二会社側につく労働者も二割か三割はいるだろう」という太田氏の発言にたいして「もともと、そんな人はいるし、労働者というのは皆悩んでいる。それらを全部つみこんでいくものが、本当の労働運動ではないか。」と切り返したわけです。その辺は重要な問題だと思わんですがね。しかし、そんな人でも、職場の労働者からみれば、雲の上の人でしかないという関係しか、いまはないのではないんじゃないですか。「彼」がこのことを、いくら考えてもそういうふうにしかならないことに問題があるみたいですがね。

F ■それはやはり、労働組合の機構がそういう形になってしまったことの結果だと思わんだ。われわれがそこを埋めなければならぬんだが、それほどの力量をもっていない。ぼくはある意味で、かれに批判的なんだが、いまは彼を利用して、そのなかでやっていくという気持ちになわけです。地方の「反戦」の組合員もおそらくそうじゃないかな。うちの場



合、むこう側に先行して、企業から独立した組合をつくるということで、役員の企業離籍をやっているんですがね。ところがそれをしてみると、企業離籍をした連中の相互扶助のような労働運動になっってしまった。そうした労働運動のひとつのよりどころとして、本当は敵対すべき相手について、なにかを獲得する——。それが組合員の支持を得ることだと思っ

会社好みの労働運動

D ■労働運動とはなにか。それから、そのなかにいる幹部というものは、いったいなんのために、運動に参加しているのか。商売でやっているのか。それとも、まさしく運動でやっているのかということに

B ■この間、「週刊朝日」でみたのですが、「社長このみの全国民労懇」という見出しで、全国の主要大企業の労働組合の委員長、一種の戦線統一というおまけまでついた懇談会を、皮肉にとらえてい

た。それに「ジョニクロ組合」などというくさばも出ていたが、右傾化したり、反動化したりしている組合の状況をみると、ほんとに「商売でやっているのか」とでもいいたくなる面があるんですよ。執行委員を二年もやれば、外国ゆきがでるし、組合三役などになれば、年に二、三回官費で国際交流にでかける。職場の労働者の不信感あたりまえですよ。

A ■生産性労組懇談会という、戦線統一の動きで、最近新聞がにぎわっているようですが、あれは、いわば企業のパートナーとしての組合というものが、いまひとつの流れになってきていることを意味しているわけです。そういう点で、いまの幹部の思想・モラルなり日常生活なりが二重人格的になっているのではないでしょうかね。これが、効果ある組合づくりというような、企業と組合に二重忠誠をもたせる労使関係をつくっている。

F ■企業のワク内で、会社このみの組合運動をするという考え方ですね。だがあんまり露骨にそれに専念していると、組合の体面というか、組合から選出された幹部自身の体面がたもてない場合がある。したがって体質的には、社長このみの企業パートナーとしての組合になりつつあるにもかかわらず、やはり組合の体面を維持しなければならぬから、そのための政策として、運動、たとえば春闘があるわけです。この二面性は最近の職場では徹底していて、合理化

も徹底しており、専制支配下に労働者はおかれているわけだ。

B ■職場の労働者は、若い者も年寄りもいまの組合幹部の体質をみとおしているわけですよ。だからこそ、彼らについて不信が生まれるし、「ザマーみる」ということにもなってくるわけです。

C ■今の犬勢をしめている組合路線は、経済主義とか組合主義とかいう、耳ざわりのよい路線が求められており、総評もそれにだいいぶきぶられてい

インチキな労働運動と反青委

F ■ぼくのところの分会は、東京のすぐ近くで、反戦が指導権を握っていた。ところがこのため、企業側からジャンジャン攻撃がかかる。それで組合員も考えた。「反戦に分会をまかせていてはどうなるかわからない。たまたま役員選挙があって、企業側公認の候補が、対立候補としてどんどん出てきたあげく、選挙でも勝ってしまった。ところで、またそこ

で、出した以上に取つかえすという形だ。経済的な面でも、量的な面でも、組合は経済主義だとか、組合主義だとかで、闘っているんだといっているが、ぼくらのみるところでは、闘って取るというより、与えられた範囲内で、恰好だけつけて取るという限界がでている。

B ■そういう状況の中で、指導部の体面を保つというか、地位を保持していくというか、恰好をつけるための春闘、ごまかしの春闘というのか、いまの労働運動をみると、非常にはっきりと、インチキな状況になってきているのを痛感するわけです。ただ、同じ指導部層にも、雲の上において、資本とゆ着している層と、つねに下部の大衆と接触している層とに違いはある。同じ右傾化した幹部の流れのなかでも、大衆と接触する職場の幹部は、大衆の不満を直接聞いて、それに応えていかなければならない。

で組合員は考えた。「おれたちは御用組合になったのじゃないか。それでよくよく投票を調べてみると、一票あまったのがある。で、選挙をやり直したら、こんどは、反戦が勝ってしまった。(笑い。異議ナシの声)

A ■これまでの話は、意識的に資本とゆ着した運動を心がけている幹部についてだったが、そうではなく労働運動は資

本とゆ着したりするものであってはならないという考え方をし、そう指導してきた幹部自身のものの考え方のなかにあるずれを問題にしたい。さきほどいったように、今年は五ヶタ春闘だ。「五ヶタ獲得すれば、労働組合も信頼を回復するだろう。」という考え方があがるが、たとえ五ヶタがまるまる取れたにせよ、それは組合が戦い取ったものではなく、資本の側に出す余力があったからにすぎない。そんな状況で獲得したところで、資本主義体制をゆすぶるものにはならない。むしろ体制の安全弁としての機能しか果たしえない。そういう意味で、いまの労働運動はインチキなわけです。

右よりの労働運動がインチキなだけでなく、左といわれている幹部の進めていく労働運動でさえインチキだということが、労働者にそれこそ見通されている。だから、大部分の労働者に「組合なんて……。」という不信感がでてくるわけですから。

そのなかで、「こういう形の労働運動は間違っている。労働運動はかくあるべきだ。」といった始めているのが、反戦青年委員会なわけです。ところが、左といわれ

る労組の幹部ですら、自分たちのしていることは正しいと思いついていっているものだから、反戦からつきあげられても、反戦がなぜ自分たちの方針に反対するのか、のみこめない。客観的にみた、自分たちのいままでの役割りがなんであつたかという、自己検証がないものだから、また個人的には善意でやっているものだから、資本の安全弁でしかなかったという、運動についての反省……。

A ■ はやりの言葉でいえば、自己否定がないわけだ。(笑い)

いまは、模索の段階

C ■ うちでは、去年の十月に助士闘争の総括をやったわけだが、そこで執行部は反戦からものすごい突きあげをくった。それで執行部は「自己批判します。」とはっきりいって、大会はそれで集約されたわけです。それが、具体的にどうあらわれてくるかという、指導方針の誤りを認めただけで、自己否定という問題など具体的には、まったく出てこない。助士闘争が終わったいま、うちは完全に守勢に立たされている。いつ、どうやって攻

勢に転じるかということ、いまの指導者は全然考えていない。だから適当なところで、ごまかしているというわけだ。つまり、自分達のいままでの経験だけに頼って処理しようとしているから。

E ■ おたくの反戦は、青年部二万名で全体の三分の一強だが、結束は堅く、独自に東京大会をひらくような力量をもってゐる。それがいまでは、職場のなかで中堅幹部の活動家に育ってきているので組合員との結びつきも、わりあいうまく――。

C ■ ええ、だから直接本部へ押しにかけて大衆団交的に二百名が、三役とやりあえるんですが。五・三〇のときには、それほどまでやって、しかも展望まで含めてすべてを討論したにもかかわらず、再び、十・三一、十一・一では同じ轍を踏んでいる。それには、「そういうグループはあっても、組織全体としてはそういう力量がないんだ。また、「総評にせよ社会党にせよ、動力車労組を包んでたかききだけの力量がない。動労の独走になり、壊滅するんだ。」といったわけをする。そして「今闘うことは、誤りだ。」ということでごまかしてしまう。それが職場では、ものすごく不満なわけです。「自分たちは、実際にストライキをする力をもっているし、実際に、自主参加という形でストができるのに、指導部はそれをさせないではないか。」というふうに。

はじめから「労働者に、今、何ができるか。」という次元で運動を考えればいいのだが「総評がこうだから」「社会党がこうだから」「今の労働運動一般がこうだから……。」という、いいかたしかなない。自分達を本来ささえていなければならぬ職場とは、違った次元で、運動というものを考えてしまう。これはうちだけのことでなく、総体としていえることだろう――。

質的变化を迫られている状況なのに、それに気づかず、不信感をもたれていく幹部がほとんどです。今の労働運動では。

B ■ ただね、期待できるのは、幹部の新陳代謝がそろそろはじまりかけていることだね。

E ■ そう、それに今の幹部が後継者を養成しなかったことは、唯一の業績だった。(一同笑い。「ヘタに、今の幹部の体質が続いたらまんだいよ」の声)

C ■ 一般情勢というか、外部の情勢のほうで、早く進んでしまつて、主体的な幹部なり組合なりの運動がすごく遅れていて、しかも無自覚で、手練手管だけは、事欠かないほど経験をつんでやってきている。そういうわけだから、マスコミレベルで問題となっているような産業政策・労資懇談会・長期賃金政策などが、当然のこととして、あまり組合内部で問題にならない。なにもかも、状況に押し流されてしまつて、変な方向にむかつて



いる――。

B■そして、そういうことに批判的な活動家の方もどうしたらいいのか、そういった状況をつきめけていく展望と政策とそれにもとづいた行動形態を、今はおぼろげに模索している段階であって、まだ一つの力になりえていない、そういった状況なのではないでしょうか。一応、良心的な層も、原子力を利用した製鉄というようなことに資本の側が、とりくんでいる時代に、心情主義・経験主義に頼っていて、太田さんに代表されるようなアジテーションの運動に終わっている。

民間単産と官公労の亀裂

編集部■総評の民間単産会議が、総評への提言、というのを発表したなかで、いままでの労働運動は官公労中心である。これからは、民間中心の労働運動にしろといっていますか……。

A■そういう、亀裂はできてます。総評が、いままで官公労中心でやってきたというのは、たとえば、すぐなんでも国会闘争に結びつけるとか、政治的改良闘争――これは、国際労働運動という、政治的変革のための、権力をめざした政治闘争ではないんですが――政治的・経済的といわれる闘争をやってきた。ところが民間労組には、直接政治に結びつく問題は少なく、企業内の要求闘争のほうが多かった。それで、総評は、政治だの国会

だのといって、官公労中心の運動を行なってきたというわけです。ところが、その民間労組も、社会保障問題のように、政治的に解決しなければならぬ問題をかかえており、政治的あるいは経済的闘争をめざした組合運動というのは、で

幹部もいっしょに歩け！

F■いま、世をあげて情報化時代とさわがれていきますけど、その情報社会をささえる技術が、労務管理に非常に多く使われているわけです。ですから、官公労における合理化も、民間における合理化も、合理化をささえる価値としては一体

であるわけです。労働者の悩みというのは、合理化による、作業時間短縮とか、生産性の向上そして高賃金と、非常に、おおよっぱな分析ですけども、そうした合理化の恩恵と、一方における、自己の分断化、人間のライン化、合理化にともなう人員整理の恐怖といった、新しい人間疎外状況の間にあって、板ばさみになっているところにあるわけです。ところが、そうは理解されていないんです。今の運動の中では……。

E■要するに、企業側の合理化の価値とか立場というのは、人間のためにではなく、資本の論理――いかに安く作り、そしてもうけるかということであるのになんていって、労働者のほうは、そのおこぼれとして、繁栄の恩恵をこうむっているので

きるはずがないのです。だから、やはりこれは、今の民間労働運動の傾向として、企業内で労使がチンマリ話あって仲良くやっていこうという傾向を、別の言葉でおきかえたものとは思えませんね。

あって、つぎつぎに生み出されてくる欲望の洪水のなかで、アップアップしている、といったようなことだと思っていますね。

D■いま、情報化時代ということがでたわけですけれど、そのなかで、われわれが、やるべきことは、次のようなことだと思ふのです。たとえば、小田実が、社会党政北のあと、朝日ジャーナルのなかで、成田委員長をはじめ、「二月に一回でもいいから、歩きなさい。」と提案している。ところが、全軍労のストの問題にしても、わずかに第二波のストの三日目にして、ようやく、総評と中立労連が集会を持つといった、ていならくなわけです。で、そこに三千人の労働者が集まる。しかし、そこにでてるのは、堀井議長は病身であるから、やむをえないとしても、あとは、まあ、そういっちゃ悪いけど、皆二流バッテリーなわけです。そういうときには、やはり、一流バッテリーが出てきて、いっしょに歩くべきだと思ふんです。総評の幹部あるいは、単産

の委員長、書記長、三役全部がですね、会議ばかりやっていないで、たまには、運動のためにも歩くという行動のなかに与えるものがあると思うのです。まだまだ、そういうものは失われていないと思うのです。なんの行動もともなわない評議員会、単産の大会、総評の大会は、たしかに真剣な議論はしているけれど、なにか、グロテスクな感じがしますね。そういう状況では、組合に対する信頼を取り戻すことは、できないのではないのでしょうか。もの取りだけではないのですから。

新聞にたたかれては……

F■全軍労の問題について、ちょっと。内情暴露的になるんですが――。総評は、全軍労が、第一波ストに突入したあと、はじめて、幹事会を開いて、全軍労のスト支援をどうするかを話しあったのですが、その中で、去年の二・四のとき現地にいて、スト回避に動いたといわれるある幹部が、こういう発言をしたのです。

「今度また、総評がストに介入して、新聞にたたかれてはかなわないから、今度の全軍労闘争の収拾は、全部現地に一任する。」というんですね。私は、それを聞いて、ほんとになさけなくなりましたね。これは七〇年闘争へのかかわりかたにも関係があるわけですが、そのような発言をする人物は、一体全軍労の闘争をどう

見ているのか。だからあとは、総評は金を集めてやればいいんだ、みたいなことになるわけですよ。まったく無自覚と言うか……。

E ■総評の発足以来の体質じゃないですか。たとえば、あの三池闘争の時だってそうだった。あの時、労働者の戦う意志を押えたのはやっぱり幹部だった。「ホッパーで血が流れたら大変だ」という幹部の意識は変わらない。

A ■言いきりかもしないが、今の社会党にしろ、総評にしろ、民同にしろ、一つの解体状況が非常に進行していて、そのなかで右往左往しているので、ベ平連みたいに、大衆のなかに入って行動するという切実感もないですね。大変だ、大変だといってるけど、さてどうするかという段になると、たとえば、全軍労の上原委員長が、涙ながらに、ぎりぎりのところに追いつめられて、問題を処理しようとしているような、あるいは、労働者が、ピケを守るためにヘルメットをかぶって、棒をもって、体を張ってぎりぎり



のところで闘争している、そういう切実感がない。本土の運動にも、戦後二十年代まではたしかにあったけど、最近の太平ムードとか昭和元禄とやらのなかでは、幹部も組合も、四ヶ塔とか五ヶ塔とか体裁のいいことだけを論議している。資本の側も、極限に挑戦するという労務管理を徹底して進めている。そんななかで、労働者は、一人一人おいつめられて、自分なりの道を選んでいく。一番遅れているのは、幹部と組合です。繁栄にあぐらをかいて、するどい現状分析がないから「デモをやるう」といっても、だれも行こうかという気にさえならない。

中国の文化大革命でやった下放運動とかいうのをやるべきですよ。幹部が、資本と組合の双方に恰好つけるような状況を打破するには、幹部が現場に入っていて、今のきびしい労働・合理化のなかで働いて、この本質をつかんで、再出発すればもうすこしなんとかなるんじゃないが、そうでないから、全軍労の闘

争についても観念的にはわかっていないが、本質的に理解した連帯の行動はとりえない。

「人間」という視点

E ■単純ないかたをしますと、資本が繁栄しているのは事実なわけです。いまやっている経済闘争だけでは、分け前というか、繁栄をわちあっているだけです。したがって、組合全体が体制内化していくのは必然的なわけです。実際の現場では、資本の側は、意識まで丸抱えでやろうとしているわけです。そこで、それに気がついた部分が反戦の労働者になっていくんだらうと思うのです。うちの場合でも、意識ごとからめとられていくことに協力して、やはり手を汚しているわけです。

D ■去年の十一・十三闘争で、多くの組合ではこれを賃上げ闘争と考えていたみたいですが、日教組としては、沖縄奪還闘争とむすびつけて闘ったわけです。その中で、「二万円で沖縄を売り渡すな」というスローガンをかけたんです。つまり、人事院勧告実施の賃上げ闘争のなかに、沖縄の問題をとじこめるなということなんです。これは多くの共感を呼んだ。ですから、今の混沌状況の中で、運動を本来のものに戻していくものは、沖縄ではないかと思うのです。沖縄闘争を徹底的にやるのが、労組のたてなおし

のキッカケになるような気がするんですが。そして、この闘争を進めてゆくためには、「自分達は加害者ではなかったのか。」というところまでいかなければならないと確信しています。

A ■わたしも、いまの意見に賛成だ。いまの、労働運動停滞の原因のひとつとして、「人間」という視点がなかったことがあげられるのではないかと思います。戦後の飢餓賃金といって、とにかく食うんだということで、運動をやってきた。今の組合や幹部は、だから運動は、そういうものだと思いこんでいるんですね。私はもっと、人間に目をむけるというか、集団の中の個を考える必要があると思いますね。

去年あたり、総評も「人間性の回復」とか言ったんですが、これは書記がつくった言葉であって、末端で具体化されないうんですね。賃上げだけでなくして、人間疎外というようなことを、これからのテーマにする必要を感じます。

■読者懸賞応募者へのお詫び

創刊号で募集した懸賞諸作品は多数よせられていますが、編集部弱体のあまり、選考事務が停滞しています。できるだけ近い号で選考結果を発表したいと思っていますのでご諒承ください。

週刊アンボ編集部

核兵器拡散防止条約の

ねらい

No. 8

連載

外信デスクダイアリー

日本政府は二月三日から四日にかけて、ワシントン、モスクワ、ロンドンの三首都で核兵器拡散防止条約に調印した。政府は「調印と批准とは別」との態度のようだが、国会で一応の論議を経て、結局は批准されることは間違いないようである。条約は日本が批准するか否かに関係なく、三月初めごろに発効する見通しである。

条約の第九条第三項前半には、条約の批准書の寄託国と指定された国（注・米英ソ三国を指す）及びこの条約の署名国である他の四十国が批准し、かつ、その批准書を寄託した後に効力を生ずる、と定められており、三月上旬に、米英ソ三国の他に、四十数カ国が批准書の寄託を終えることは確実とみられるからである。

この条約は、核兵器の拡散が全人類に被害をもたらす核戦争の危険を著しく増大させるから、それを防ぐものだとして説明されている。核兵器国に対して、その核兵器の管理権を他のものに引渡したり、非核兵器国が核兵器を作ったり、持ったりするように援助しないことを約束させ、一方、非核兵器国が核兵器の管理権を譲受たり、核兵器を製造したり、持ったり、あるいは、そのための援助を求めたりしないよう義務づけている。そのために、非核保有国が平和利用の原子力を核兵器に転用しないように保障措置（査察）を講じることになっている。

条約の名称は「核兵器拡散防止」あるいは「核兵器不拡散」と聞こえはいい。しかし、条約から明らかなように、核兵器国が、その核兵器を世界のどこにでも配備する自由は、いささかも損われていない。核兵器の引き金を他人に触れさせなければいいだけだ。また、核兵器国が、その国の平和利用の原子力を核兵器に転用することも、全く野放しにされている。つまり、条文中で核兵器国の核軍縮努力をうたっているが、基本的には、米英ソなどの核兵器は（たとえ拡散し、拡大しても）、核戦争

の危険を増大することにはならない、という理屈なのである。

さらに、条約の第九条第一項は「この条約は、署名のためすべての国に開放される」とし、「この条約の適用上、核兵器国とは、一九六七年一月一日前に核兵器又は他の核爆発装置を製造し、かつ爆発させた国をいう」（第九条第三項後半）と定めているが、核兵器国五カ国のうち、中国とフランスは、この条約を無視しており、調印もしていないことは周知の通りである。米英ソ三国は、条約作成交渉の当初から、中国とフランス、特に中国が、この条約に加わらないことは見通していた。むしろ、中国が加わらないことに、この条約の存在価値を認めている、というべきであろう。

米英ソ三連は、中国が核大国化して両国とのギャップをせばめないうちに、他の国々に核兵器を持たせないようにし、同時に、米ソ体制下に組入れることをもねらっているわけである。

西独や日本が、この条約に調印したことに対して、米ソ両国は、早晩批准することを前提にして歓迎したのは、米ソに次ぐ大国である二国が、米ソ体制のワクからはみ出さないことを表明したからである。

核兵器国が現在以上にふえな

「新しいステッカー」発売中



1枚—10円 } 千別
15枚—100円 }
千葉県登戸町3の221
中島弘一

いことは、米ソ両国にとって好ましいことには違いない。しかし、それは軍事的理由からだけではない。核兵器拡散防止条約は、非核兵器国に平和利用の原子力に対する査察を受諾するよう義務づけることによって、米英ソ三連と、その下に組込まれた国々との結びつきを一層強固ならしめようとしているのである。まず、実際問題として、この条約に加入しない国に対して、米英ソが原子力の平和利用援助は行わないような仕組みになっており、第二に、条約加入の非核兵器国と加入しない核保有国との原子力に関する協力、あるいは条約加入の非核兵器国と加入しない非核兵器国間の協力を、困難にしているのである。

このことは、米英ソに次ぐ先進国で原子力産業が広範に実用化時代にはいるとみられている七〇年代以降にますます大きな

意味を持って来る。原子力関連産業のウェイトが大きくなるにつれて、米ソ両国のその国に対する影響力が大きくなって行くからである。

このように、核兵器拡散防止条約は、中国の核兵器開発の発展、フランスの自前の核兵器開発によって、核兵器独占という戦後世界体制維持の有力な手段を失いかけた米ソ両国が、核兵器保有国の増加防止という人々の広範な願いに応じるような形をとるにがら、からめ手から七〇年代以降の世界体制維持をはかるうというねらいを持つものだということがきよう。

世界が多極化、分極化の傾向を強めている中で、こんどの「核兵器拡散防止」と銘打った条約が、軍事、非軍事の両面でのどのような役割を演じようとしているのか、しっかりと見極める必要がある。

(K)

ぶっく れびゅう

株式会社
今週の日本 発行

『今週の日本』

政府の機関紙？

総理府広報室、という役所がある。政府の施策を、ひろく国民に周知セシメルことを目的にしている。一九六〇年七月つまり60年アンボのすぐあと、池田内閣が、内閣調査室といっしょにこしらえた。

その広報室の予算に、『今週の日本』買い上げ費というのがある。昭和43年度1億9500万円、44年度2億7500万円、45年度(予定)およそ3億円。

予算とは、税金である。直接税、間接税あわせて年間何十万円かを日本国にさしあげているあなたやわたしは、『今週の日本』なんて新聞を、一度も見たことがなくても、この新聞にいつの間にかお金を払っている。そして、『政府の施策を国民に知らせる』ことに協力していることになる。

この新聞ができたのは、六八年一〇月だ。資本金一億円の株式会社『今週の日本』社ができ、もと共同通信常務理事の新井正義氏を主筆に、週刊16ページの『高級紙』(英語でクオリティ・ペーパーというそう)を出しはじめた。

『高級』とは、むろん、政府やこの新聞の中核となっている政府の外郭団体『日本広報セン

ター』が勝手に自称しているだけだ。かれらにとつて、『高級』だと考える中身一意見をふんだんに盛りこみ、かれらが『高級』と考える人たちのためがけて、タダで送りつける。タダの分は、つまり政府お買いあげの分で、『今週の日本』社がサービスしてのではない。『高級』な人は、税金も少しは余計に払っているのかもしれないが、だから新聞をタダでもらってよいわけではない。

買いあげ以外の分も、あるにはある。「だんだん部数が多くなっています」と、責任者はいうが、具体的な数はわからない。政府買いあげの分は、先刻ごらんのとおり。

ごくたまに、駅の売店に一部くらい売れ残っているのを見かけることがある。駅一鉄道弘済会などで扱うのは、よほど売れるか、それとも引き受けねばならない特別のインネンがあるかのどちらか。『今週の日本』は、電車の中などで読まれているのを見かけないところから、どうやら後者のほうらしい。

高級紙？

この新聞の題字は横書きで、『今週の日本』とあり、その下に英語で、『Japan Chronicles』とある。そういえば、この会社

の定款にも、第一条に、会社の英文名は『The Japan Chronicle』とする」とあって、英語の名前をつけることに、初めからたいへんど執心だった。国内ではどうあろうと、国外で『これぞ日本の代表的クオリティ・ペーパー』と見てもらいたいため、英文名を最初からきめたのかもしれない。国際感覚の異常発達、といえようか。

この新聞がいかに『高級』であるかを、くわしく紹介すべきかもしれない。が、政府が『高級』とみなさないみなさんに、税金の二重払いみたいなあんばいで購読してほしいとはさらさら思わないので、簡単にする。

第一の『高級』さは、ニュースではなく解説が中心になっている、という点にある。2面『学者、役人などの座談会、3面展望、4面』立場と意見。2月1日号は『日本外交、ことしの進路——愛知外務大臣にきく』、5面『日本を考える……』と、『世代』のページとか、『世界と日本』、『文化の広場』、それに政府発表資料を満載した『資料』のページがいくつつか。15面が『読書』、最終ページの16面が『放送』。

外相の『高級』なご意見の内容は、省略する。ほかに『高級』なコラムがいくつつかあり、定連

執筆者は、荒垣秀雄・細川隆元・近藤日出造(マンガとも)・渋谷秀雄・等々の『高級』なひとたちである。書いていることの内容は似たりよったりだが、ネーム・バリニューは、ひとまず豪華、といつてよからう。

執筆者の顔ぶれに、じつはこの新聞の、特殊な役割がある。モノを書くほどの人間で、この新聞から原稿の依頼がないとすれば、その人は、たぶん政府から、アカだともなされて、おもうてよさそうだ。各分野別の文筆家リストが同社にはあり、要注意の赤線や、ボーダーラインのギザギザの線が、それらの名前の下に引かれている、という。

原稿料は破格である。名前の出ない『解説』を内職に書く新聞記者でも、四〇〇字1枚3500円。札束攻勢でモノ書きをからめとる。モトはといえば税金だが、執筆者たちは、破格な条件にカンゲキして、なるべく編集者の意にそうような、つまり政府の考えに近そうなモノを書くことで知遇にこたえようとする。

かくて政府の施策は、モノ書きたちの内部に浸透する。

これはいい、『新聞』だろう。それともなにかの『機関』だろうか？ (H)

ゴルゴダの丘

そう

純白のウェディングドレス

お前も加害者

詰襟をたてたかけを

裳裾から消すことはできない

とりかわした愛を石のようにだいて

あのゴルゴダの丘を

今はお前が行け

血をのんだ百年の近代を

炉に焚く執行者のつららの腕に

たじろぐな

忘却の抒情を共有する

白いはたを

空せまく男はたてる

鎌を切る野草のしげみにも

逃走の小径はない

しとねに残した陶酔を他人にゆすり

かがめた腰に反撃をたばね

滑車のように登るしかない

わきかえる球面に

二人は一人

擬制は

花束

今

墓にこぼれておちる

母はなく

母は男の弱点 たまらない

水爆をさしこんで涙をとめる無慈悲を

見修訓長

訴える島

語りつたえようとする努力に

背をむけて

お前は加害者

よせあった唇の美しさに

首をかけよ

風穴のあいた服に石をつめこんで

若者は

どこでも死ぬ

肩にめりこんだ国のくびき

タイムカードの保証する日常を

確保して 金ももたずに

デモはどこへ行く

情緒のろしは花火のよう

夜だけでもいい

秩序をまもるものは秩序を裁け

愛をだくものは愛を裁け

反抗するものは反抗を裁け

他人をふりむかず

コンクリートのなかの焦土をゲリラのように

大陸の

けたはずれの機能と効率がここにはない

朝でさえおすおすとやってくる

あかつきの処刑の埋れが吹きわたる風

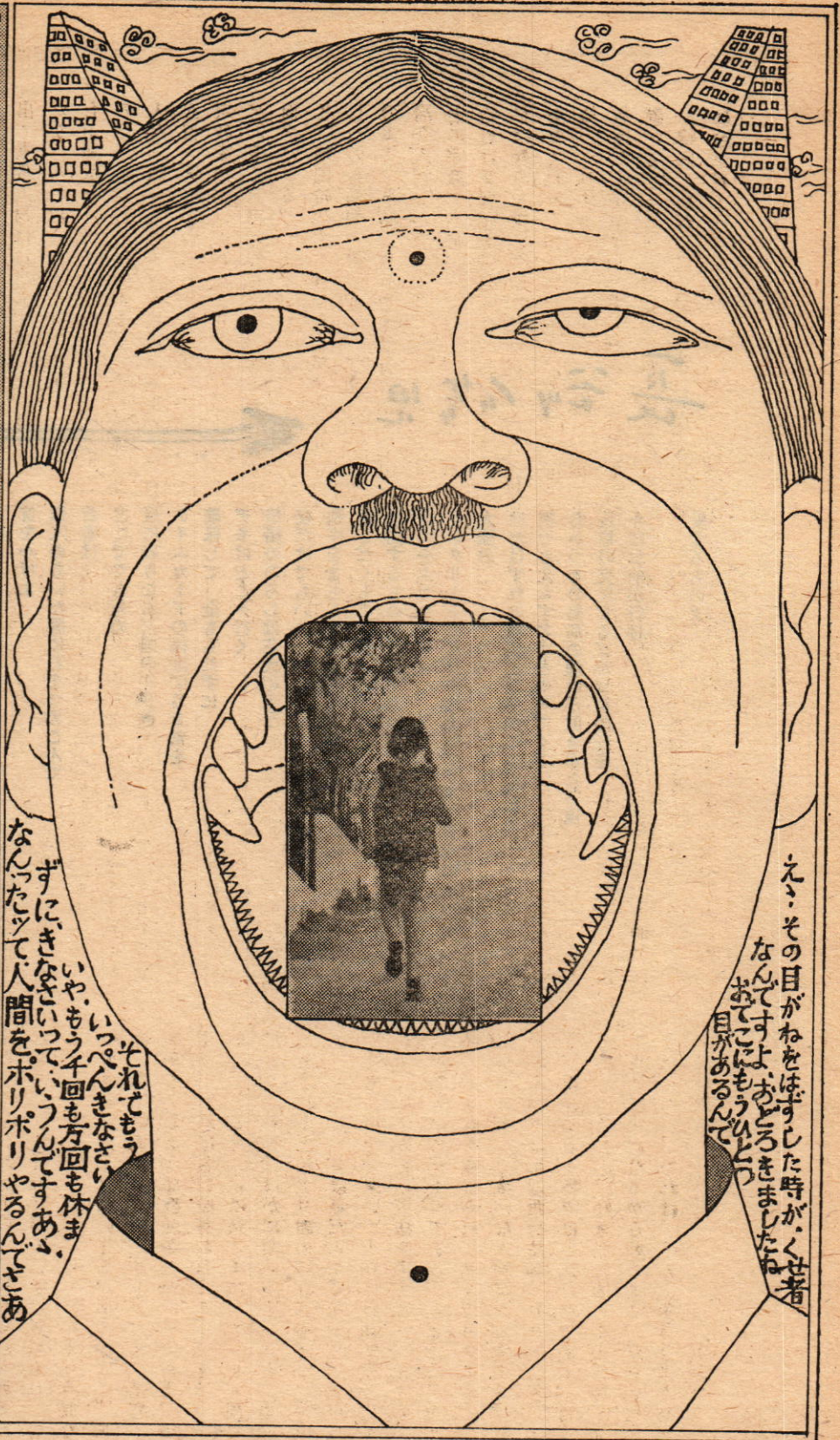
長槍の交叉するゴルゴダの丘を

今はお前が行け

愛するものよ

好きになるといふことはの日記

深沢七郎
栗津潔・画



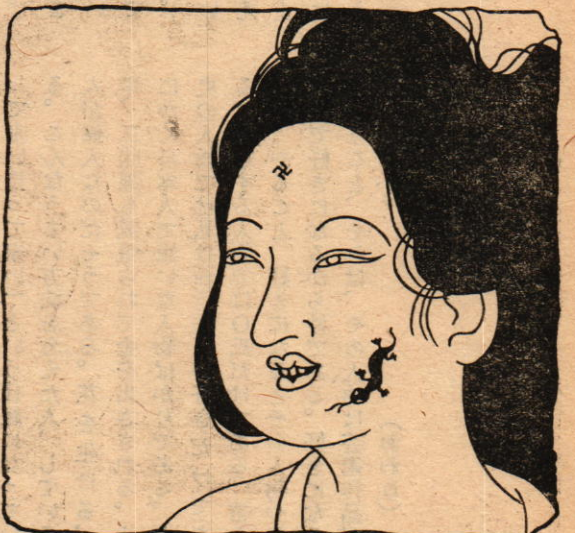
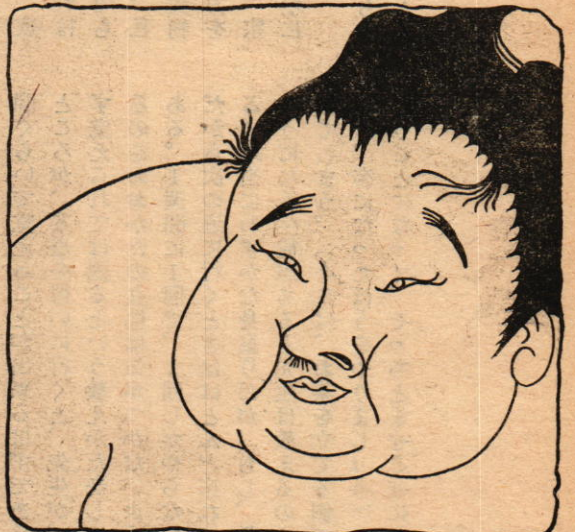
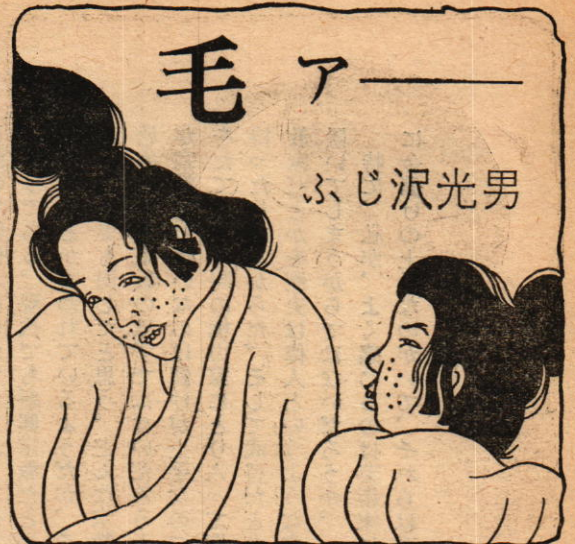
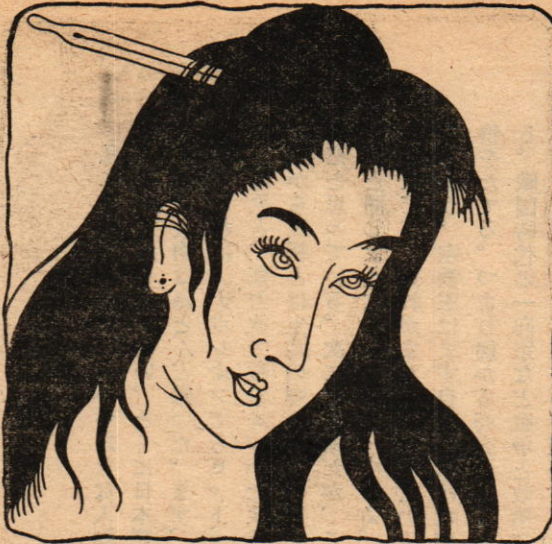
私には嫌いな人物が多いが好きな人物はほとんどわずかしかない。とくに日本歴史に出て来る人物はほとんど嫌いだ。まず、武将だが、これは、ナポレオンでもヒットラーでも土地欲と、権力欲で戦争をやったようなものだから武将とは土地の奪い合い喧嘩の商売人だと思っている。次に政治家だが、これも武将と同じようなものだと思っている。次に宗教家だが、これがまたとんでもない人たちだと思ふ。宗教家はまず自説を揚げながら建物をたてる。つまり儲かる商売のようである。戦国時代の一向宗など戦争と政治に介入したのも信仰と儲けがついて廻っていたからのもである。現代でも新興宗教とか、政治介入だとか言われているようだが、それはどの宗教でも同じだと思う。どんな宗教でも始めは新興宗教のはずではないだろうか。私が宗教家が嫌いなのは儲けが上手なので建物をたてたり、時の権力家にとり入って権力を持ったりするからだ。そして武将とか、宗教家とかを歴史は偉人というような立場に置いてしまうからではないだろうか。

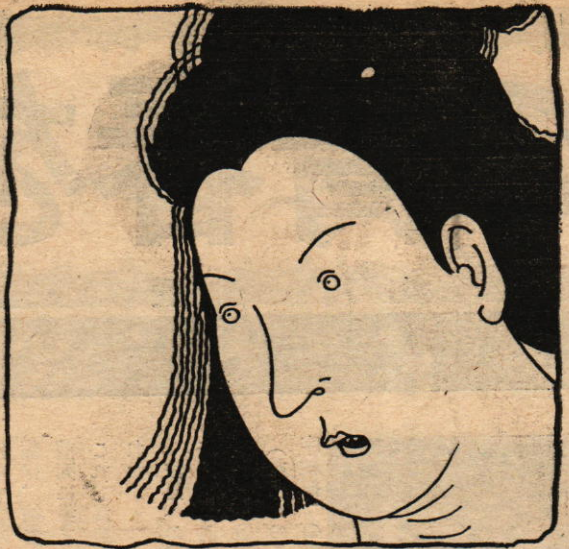
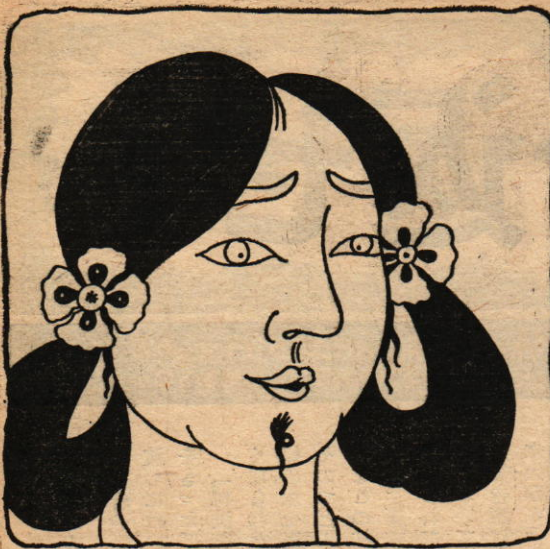
特に、私が、よく感じるのは芸術家にも妙に金儲けの上手なのがいて、それらは商人の

ような儲け方法ではなく、威張っていて金を持って来させるようなシステムで儲けるからである。これを私は「持ってこい偉人」と呼んでいる。例を茶道にとってみるとその方法が上手にできているのがわかる。おそらく、千利休が、そんなシステムに仕度をしたのだと思われるが、例えば、あなたが茶道を習うとしよう。行為をするには習わなければならぬからである。独学とか、本では習えない仕組になっている。茶道は10年習いに行っても、本当には上手にはならないそうである。何故だろう。茶道は踊りの種類だから本当のわずかな身振りで、三味線の節で言えば1週間ぐらいで覚えることが出来るはずである。ところが、茶道を習いに行くと、先生が、まず覚えられては困るという教えかたをしているのをとおかたの女性には気がつかないようである。1週間に1回で、1回しかやらない。だから次の週に行くときはほとんど忘れていゑる。本当にわずかな身振りだが、もし、覚えそうになる生徒があると先生は教えるのを止めてしまう。「今日は、お茶を立てる側ではなく、客になったほうをやりましょう」そういうことになって、そっちとまぜこぜになっ

て、無理にわからなくしてしまうのである。わずかの踊りの身振りなのだから、どうせ毎日習いに行くのだから、20回も30回も教えたらずやそんなものだがそれでは覚えられてしまふのである。3カ年ぐらいではまだ身振りの順序も覚えられない生徒があるそうである。先生は威張っていて叱りつけるような、馬鹿にするような教えかただそうである。中途で止めれば悪口を言われるそうである。1度入学するとへビに見込まれたカエルと同じだそうである。ほかに名をもらうとか、場所へ出されるとかで月謝のほかに金をださせる。中元だ、お歳暮だとか威張っていて「持て来い持て来い」という仕組になっている。こんなうまい方法を考えた人、している人が偉人なのだそうである。花を生ける、琴、三味線も威張られて金を出さされる。とにかく日本人で嫌いな人物ばかりである。歴史の人物では私は西行法師が好きだけである。現存する人物ではO氏だけである。言うこと、やること、好きになるとその人物や発声まで好きになるから妙である。好きになるということ、それは、その人物は芸術作品だと私は思う。

(おわり)





の青春を返せ!

安保条約の発効した直後、人民広場は血で塗られた。
18年つづけられたメーデー裁判は何を意味するのか

■被告席の黒枠の遺影

被告の出席確認がおわって判決の言い渡しにはいる前、浜口清六郎裁判長が口をきった。

「判決をまたずに、十六人の被告がなくなられた。裁判所は、立場上、直接哀悼の意を表することはできなかったが、そのつど人を介して弔意を伝えてきた。いまこの法廷に、遺影を持ってきておられる。諸君の気持はわかるが、法廷では認められない。一カ所にまとめて、安置しておいてもらえないだろうか。」

被告席は、傍聴席と同様、木のベンチに人がギッシリとつまり、立って歩くこともままならなかった。遺影をおさめた額は、被告たちの手から手へと渡り、最前列に集まり、白いフロシキに包まれ、これも満員の弁護団席の机の上に重ねられた。

法廷への遺影の持ちこみは、判決日の法廷の「運営」について、関係者の中で最後まで争点になっていた。裁判所は、(むろんのこと検事側も)、法廷の「秩序維持」のために、遺影の持ちこみを禁

止する、と通告してきた。被告団・弁護団は、持ちこみ禁止だけは絶対に認められない、と強く主張した。前日に折り合いがついた。持ちこみは認め、言い渡しのときは片づける。

取りきめどおり、ことは進行した。わたしは被告席で、取りきめに従って、遺影のひとつを受けとり、また前列に渡した。

その写真の主を、わたしは見覚えていた。被告の、いや、死んでしまっていたいまはもと被告のK——わたしより二歳若く、十七歳で「メーデー被告」にされ、その四年あと、自殺した。二十一歳だった。

生前のKと、わたしはことばを交わしたことはない。なにしろ二百六十人もの被告である。被告団の集まりで顔をあわせ、「初めまして」とあいさつし、おなじ境遇から友人になる。メーデー事件被告団とは、そういう「団体」であった。

Kは、朝鮮人だった。失恋し、相手の女性を刺し、出刃ぼうちうで自殺した、と、当時の新聞は伝えている。その真偽をわたしは知らない。

Kの失恋の理由が、メーデー被告であったことによるかどうか、確定はできない。が、その恋人も朝鮮人であり、Kはメーデー被告であるかぎり朝鮮に帰国することは許されないのだから、帰国問題が在日朝鮮人の死活の問題として意識されはじめた当時の状況からして、Kの恋愛の前途に暗いカゲがさしたことはありえよう。

原因はどうあれKは死に、死んでから十数年の年月がたち、そして写真のなかのKはきれいな歯なみをみせて微笑し、いつまでも若かった。生きていればきょうは三十五歳。そして、わたしをふくめ被告たちは、事件から一七年九カ月のきょう、すでに中年から老年の男女になっていた。

判決の言い渡しは、主文の朗読から始まった。

■恣意的判決への怒り

「野村正太郎、被告人は無罪」、「S——、被告人は無罪」、……浜口裁判長は、六十歳をいくつか過ぎ、裁判が始まったころより髪が薄くなり、「無罪」を「ムザイ」といくらか舌ったるく発音しながら、朗読をつづけた。被告は、立ったり坐ったりするスペースの余裕がなく、ベンチに坐ったまま判決を聞いた。

何人目かに、「懲役六月、執行猶予一年」の有罪が出、無罪と有罪の判決がまじりあって続き、四十何人目かに「罰金



失われた18年

二千五百円」と裁判長が言った。

被告席のかすかなざわめきのなかに、「あっ」と小さな叫びが聞きたれた。そのとき、この日の判決が「騒乱罪成立」を内容とすることを、わたしたち被告は知ったのだ。

刑法第一〇六条（騒じょうの罪）の三項に、「付和随行」について規定があり、罰金二千五百円を科せられる、となっている。その前に部分的に出た「有罪判決」が、別件の「公務執行妨害」や「傷害」によるものかもしれぬ、という感じをもたせたのに対して、たった二千五百円とはいえ、それはこれから読みあげられるであろう判決の性格をはっきり示すものだった。

わたしの番が来、裁判長が「ムザイ」といったが、そのときわたしのなかに、あたらしい感じはなにもうかばなかった。騒乱罪の部分的適用、それによる有罪と無罪の、ほとんど恣意的な染め分け、という判決全体の論理構造が、わたしの頭のなかに、くろぐろとした枠をつくっていた。



裁判長が、「事実の認定」から判決理由の要旨を読みすすむにつれて、法廷は騒然となった。被告団は、事前に、「どんな判決が出ようとも、判決は最後まで整然と聞く」ことを申しあわせていたのだが、わたしたちは、これまで十八年の公判のなかでも幾度とは見せなかった大声の抗議を、裁判官にむかって投げつけずにはいられなかった。

判決のなかで、裁判長はメーデー事件をふたつの段階に分け、二重橋前の警官隊とデモ隊の第一回目の衝突を警官の「違法」な実力行使が発端になったものとして「騒乱不成立」を、そのあと、人民広場のなかでの第二回の衝突を、おなじく警官隊の実力行使を発端とみとめながらも、こちらは「適法」だったとして「騒乱の発生、成立」をみとめた。

「一がなければ二がない」と、無罪判決をうけた被告の丸山昇は、二日後の「赤旗」に書いた。裁判官が、十七年九ヵ月というながいながいながい公判の結果、「違法」と言いきった（判決文の表現はあまり歯ぎのよいものではない

が）武装警官隊の実力行使がなければ、メーデー事件は存在しなかった。政府が使用を禁止した人民広場に行進したデモ隊は、広場にはいるというその日の唯一無二の目的をはたして、やがて解散しただろう。

警棒による無警告、無差別の殴打、催涙ガス、ピストルの発射という警官の挑発によってデモ隊に多数の負傷者が出、それにありあわせのブラスカードや旗竿で抵抗したのが、メーデー事件のはじまりだった。そのようにして警官隊に蹴ちらされたデモ隊と、おくれて広場にはいつてきたデモ隊とが合流したところに、ふたたび警官隊の、第一回目にもまして強力な武力行使が加えられた。「このとき騒乱が成立した」と判決はいうのだ。そのあと憤激したデモ隊によって米軍の自動車や警察の白バイが燃やされた。

■「無罪」で消し去れぬ十八年

この日の衝突のはじまりが、第一回目も第二回目も、警官隊の攻撃によったものだ、ということは、被告団と弁護団がおおせいの証人の証言と写真その他の証拠によって、ときには警官証人の証言に対する反対尋問によって、公判のなかではっきりさせてきたことだ。わたしたちはそのことに主要な努力をかたむけた。加害者はだれで、被害者はだれか、をはっきりさせることなしに、「犯罪」の究明はできない。

あわせて、デモ隊があのメーデーの日人民広場にはいることが、集会やデモ行進の自由という憲法上の基本的な人権のあらわれであることも論証した、つもりでいた。

わたしたちは、事実をくまなく明らかにしたつもりでいた。が、本来はひとつのものである事実が、事実を見る目によってほしきままに着色されうること、その底にイデオロギーというものが横たわっていることを、この判決の日にしたかと思ひ知らされたのだ。

裁判官のイデオロギーはなんだったか。それは、「人民は愚マイなものであり、大勢が集まると、群集心理というものにかられて、集団として乱暴ロウゼキを働くものだ」という人民観・大衆運動観にはかならない。だから、あれだけの「さわぎ」があった以上、「そのコトのよってきたるゆえんは別として、民衆のなかに犯罪者がいなければならぬ（違法、な実力行使による警官隊の犯罪は、ピストルの乱射による殺人をふくめて、長い裁判のあいだに、都合よく「時効」になっている）。

長い裁判のあいだ、あの事件の加害者は加害者でありつづけ、被害者は依然として被害者でありつづけた。わたしは事件当時、十九歳の学生であり、被告であることを隠しつつける以外に就職の方法はなかった。十九歳から三十七歳までの十八年間について、書くべきことをわた

しは山ほどもっている。「無罪」という事務的なひとことで消し去ることのできない重いつきについて、わたしはいつか書くだろう。

わたしひとりの年月ではない。わたしが「被告」でなくなる日をむなく待ちつづけ、数年前に死んだ父について、年老いて、十七年前わたしが獄中にいたころの心労をくり返し何度も話しやめない母について、わたしの妻とその家族たちについて、いまはわたしが被告であることをまだ知らずに成長しつつある子どもについて、かれが父親のことをはじめて知るであろう日について。

それだけではない。被告のまま死んだKについて、幾人かの死んだ被告について、有罪と無罪の被告たちについて、家族たちについて、この十七年あまり、わたしの周囲にいて、被告としてのわたしにながしかの関係をもちつづけている

数多くの人たちについて、そしておそろく、裁判官や検事たちについても、わたしは書くだろう。

が、いま、わたしにはそれを書くことができない。いまの生活を変えることなしに、書くことによる危険に身をさらすことが、わたしにはできないでいる。げんにわたしは、このメモを発表するとき、本名をしるすことをあえてしないでいる。

それに、わたしは、被害者の地位にだけ甘えて、めんめんと被害を数えたてたことを、いまはやりたくない。一九五〇年の加害者が、一九六〇年も、一九七〇年のいまも、いつまでも加害者でありつづけるような体制をこそ、告発し変革することが、まずわたしのペンの仕事でなければならぬはずだ。

■通俗判決を告発する

その立場から、わたしはまず、メーデー事件一審判決の底にある思想をとりあげておきたい。

一見、判決は、大岡裁きのようにみえる。警官の「違法」を半分だけ認め、つまり被告の半分を無罪にし、あと半分は検事の顔を立てて「騒乱成立、有罪」にし、長すぎる裁判にたいする批判への言いわけとしては、有罪論告に執行猶予をつける。ケンカ両成敗、というつもりで裁判官はいるかもしれない。

が、そういう俗物的な考えが、そもそも邪悪だといわねばならない。判決の論理、とくに「騒乱成立」の部分の論理は、「警察官が民衆になぐりかかってきても、おとなしくなぐられている。抵抗すれば犯罪になる」ということだ。悪しきものに手むかうな。右の頬をうたれたら、左の頬をも向けよ。新聞報道にもあったように、検察側や警察が判決に安んずる色をかくさなかったのも、当然のことだ。

判決は、検察官とはほとんど同じ用語と同じ論理を、ほんの少し時間をずらし、事件の後半にそっくりあてはめたにすぎないのである。

折衷主義が、被告の半分を無罪に、半分を有罪にした。当日のデモ隊の構成から、無罪の部分に学生、いまは知識人が比較的多く（大学助教授の丸山昇、パリ在住の彫刻家大谷文男、たちがそれだ）有罪の部分に自由労働者や在日朝鮮人が



多くかたよっている。裁判官のサジ加減は、ここまでくると、階級的、民族的偏見の色あいさえおびている。いまはもうけっして若くも元氣旺盛でもない被告たちが、判決の日、無罪の者も有罪の者もほとんど総立ちで、裁判官に怒声をあびせたのは、こうした偏見が判決をつらぬく思想であることを、ほとんどハダで感じとったからであった。

事実のもつ重みに対して、判決はけっしてまじめに対処していない。たとえば、メーデー事件の第一の犠牲者である近藤巨士（当時法政大の学生）については、警官になぐられて倒れている学友を助けおこそうとしている途中、警官に後頭部をなぐられて頭が骨陥没骨折の重傷をうけ、それが数日後のかれの死をもたらし「事実」を認定している。第二の犠牲者、高橋正夫（当時、東京都庁の職員）については、すでに（裁判官によれば）「騒乱」が成立したあと、警察官の発射した拳銃弾によって、背後から心臓を貫通する銃創をうけ、即死した、「事実」の経過をのべている。

殺したのはだれであって、その責任をだれが負うべきなのか。二人の生命が失



われた、という事実について、判決はけっしてそれ以上の責任追及をしようとはしない。

被告のまま死んだ十六人に対して、判決の前に、ひそかに「哀悼」の意を示しながらも、判決文のなかでは「長期の裁判によって被告の人権が侵害され、憲法第三十七条の、公開の法廷で公正かつ迅速な裁判を受ける権利」を侵害したとは考えない」と言いえる、その論理というか非論理と、同じ足場に立つ判断だ。とくに高橋正夫の死に関しては、拳銃発射を「警察職員の正当な職務執行」の範囲に含めている。（同じ一月二十八日、高橋正夫の両親が提起した賠償請求の民事訴訟が、東京地裁の民事部で、勝訴の判決をえた。こちらは、刑のほうとはちがって、警察官の職務執行の行きすぎを認め、賠償を命じている）



■被告団は決して解散しない

メーデー裁判官の主観のなかでの、大岡裁き、は、たとえば人間が死ぬ、殺される、といった事実に対して、けっして正面から立ちむかおうとはしていない。その精神はいいかげんであり、その精神は腐っている。そして、その腐臭は、じつは、日本の裁判制度が、権力機構から独立しておらず、むしろそれに従属していること、裁判官の思想が、この判決のはしはしからわたしが抽出したように、根ぶかい人間ベツ視につらぬかれた、俗物的であると同時に特権的、階級的なものであるところに、その発生の根源をもつ、とわたしは考える。言いかえれば、日本の裁判制度の腐敗を、そのまま反映したものにすぎない。

わたしたち被告は、しかし、そういう裁判制度に手足をからめられている。有罪になった被告たちは、裁判制度の論理に従って、上級審に控訴せざるをえないし、高裁の段階で、「騒乱罪」の抹殺のためにたたかうことになる。ふたたび、長く、苦しいたたかいではある。

「メーデー事件被告団」のことを、最後に記しておかねばならない。被告団は、判決の夜、総会を開いた。百四十八人の被告が集まった。そこで申しあわせた第一のことは、「有罪の者も、無罪の者も、今までとおなじように、被告団」の組織のなかにとどまり、一緒にやってゆこう」ということだった。

数万をかぞえたあの日の人民広場でのメーデー・デモ参加者のうちから、権力は恣意的に、政治的判断にもとづいて、千数百人を逮捕し、恣意的に二百六十人あまりを裁判にかけた。数万人のうち二百六十人がとり残された。十七年九カ月ののち、裁判所は、これも恣意的に、無罪と有罪を半々に分けた。事実の論理ではなく権力の恣意によって作られるふり分けを、もはやわたしたちは認めない。ケンカすぎでの棒ちぎれ、とか、トシヨリのヒヤ水（悲しいことに、わたしたちは生理的には年をとらされてしまった）、とかいう、わけ知りめいた忠告を、わたしたちは、すくなくともいまのわたしは、ありがたく受けるつもりはない。

以上が、三十七歳何カ月の人生のうちの半分近くを「メーデー被告」としてすごしたひとりの人間が、あの一審判決を迎えた、とりあえずの感想である。

マスコミの上から、もうほとんど姿を消してしまっただけに見える「金嬉老事件」は、何を意味しているのか。「金嬉老事件」は、過去の出来事ではない。くり返し現在に意味を問いかけてくる問題としてある。

金嬉老が、寸又峽にたてこもったのは、六八年の二月二〇日である。以来もう二年の月日がたつ。

山荘にきずいた彼のバリケードは、四日目に破れた。静岡市郊外の拘留所の壁のむこうに、いま彼はいる。入監禁された彼の、そしてまた入監禁されたわれわれの、日常的な時間からみれば、寸又峽の四日間、幻影のなかで一瞬なりたった祭りのごときのものである。〔佐藤勝己〕 ぼくももちろ

なにが・その後・どうなったか(6)

「金嬉老事件」その後

さとみ みのる

ん、あれで革命がやれるなどといっているのではありません。ただ、あのエネルギーというか……。

〔田村西〕 あの豊饒さです。(朝鮮研究七四号)

まつりが、不毛であったり、豊かであったりするの、日常的な時間との関係においてである。金嬉老事件は、マスコミの紙面から、消えた。寸又峽の四日間とは何であったか、という問いは、しかし私たちのまへのこざれている。その問いがでたのは、私たちの日常性のかくされたふかみであり、だから寸又峽の四日間は、私たちにとって、いまだ過去の出来事ではありえない。

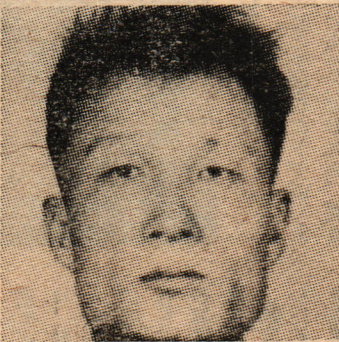
だいをさらにふかめるために、公判対策委員会が組織されている。今月の二十一日(土)には、集会入金嬉老事件から二年をひらいて、今までに浮きぼりにされた問題点と、これからの運動のすめ方を、洗いざらい討論する予定である。

公判闘争のなかですでに提起されているおびただしい問題を、この場所にかきつくすことは、いずれにしても不可能なのだから。

■出きあいの言葉

「金嬉老か。あいつは気狂いではないのかね」
ある刑事がいった。
「なにさ、殺人犯のくせに!」
バス会社につとめる女の子がいった。
事物には、いつも名まえがは

りついていて、その名まえであみあげた秩序のなかに、私たちは生きている。私たちは、金嬉老を八殺人犯とよび、寸又峽の四日間を入監禁とよぶ。その名づけることによって、私たちは、出来事から目をふさぐのだ。できあいの名まえは、事物をかくすばかりだ。寸又峽は、ダム工事に集まってくる、季節労働者の吹きだまりの村である。ある夜、そこに一人の男がやってくる。死ぬまえに俺はやつらと対決したいと、その男はいう。俺の心を、ズタズタにした、あの警察のやつらと。男は、朝鮮人である自分の身の上をかたり、それゆえに受けた屈辱をかたり、どうしても許せない一人の刑事の名を口にすると、死とひきかえに、自分の誇りをとりもどそうとする一人の男の



ぎりぎりの姿が、山荘に居あわせた人々の心を、しだいに深くとらえはじめる。不安にはりつめながら、しかし何か彼と共感するものが人々のあいだに流れて、それはある濃密な空気となって人々を結ぶのだ。マスコミは、居あわせた十三人を八人質とよんだ。山荘になりたった、このコミュニケーションまがいの空間は、法的言語によって入監禁と名づけられ、金嬉老の行為は、いま、さばきに付せられている。できあいの言葉に、事実を入監禁とよぶ、あとは相応の刑をきめるのが入裁判の定石であろう。名づけることによる事実の隠蔽は、しかし法曹に固有のことではあるまい。金嬉老公判にたいする異議申立ては、法の秩序の言葉の呪縛から、事物をときはなつための日常的なたたかひの、その一つの集約点なのだ。

■金嬉老は金嬉老か

すでにして彼、金嬉老じしんが、なんとも名づけようのない存在である。彼は七つの名をもち、だれも(彼自身も)、どれがほんとうの名であるかを、知らない。人定の段階で、まず裁判はアポリアにぶつかった。さばかれているのが、そもそも何ものであるのか、と弁護団はせ

まり、検事も、また裁判官も、

そして弁護人じしんも、その問いに十全にこたえる術を知らないのだ。そこにいる彼は、朝鮮人クオンヒローであろうか。日本人金岡安宏であろうか。それとも、起訴状にしろされた、金岡安宏こと金嬉老であろうか。

そんな名をつけたおぼえはないと、母親はいう。「金嬉老という名まで日本国家は彼を呼ぶわけだけれども、金嬉老と呼ばれた当人は、日本の法の枠内におさまりきれない存在だ。どんな名称でも彼の存在をとらえることはできない。国家がそれにピッタリした名称をつくりだせないような、一種の怪物になっちゃっている。そのことが非常に重要だ。あいつはこういう人間だ、あいつのやったことは、こういうことだ、と簡単に規定できない。この状態を徹底的に追及してみる、という意味で、

ぼくは今日の弁護団のやり方に非常に賛成だ」(六八年十月二日公判報告会での一出席者の発言)

どの名まえも、ぼくには自分の名まえとは思えない、と彼じしんもいう。朝鮮人でもなければ日本人でもない。つまりは日本人が朝鮮支配のなかでつくりだしてしまった半日本人といった意味で、私たちはあえて彼

を、金嬉老とよびたいと思う。しかし彼を「金嬉老」とよび、その「金嬉老」をさばくとき、私たちはいったい誰をさばくのか。

日本国家によって名前を奪われた一人の外国人として、彼は今、日本国家の法廷にたっている。検事は彼を金嬉老とよぶ。キンキローとは、しかし日本社会が彼に「与えた」日本名でしかない。彼にしてみれば、その名によって自分を証したてることができない、隷者の符牒なのだ。金嬉老の名において彼を「人定」するとき、その名まえのなかに、すでに人定者の加害責任が影をおとしている。

だから、彼の本籍もまた、独立国としての朝鮮ではない。起訴状に記載された

朝鮮慶尚南道釜山府水昌町八五四番地

なる場所は、げんざい存在しない。げんざい存在しないが、日本帝国治下の朝鮮において、かつて存在した。それが金嬉老の「人定」だと、起訴状はいうのである。だいたい朝鮮とは、地名であって、国名ではない。

さばかれていたのは、外国人であるが、起訴状にはその国籍さえも、しるされていない。町名も番地も、日本統治下のそれが、そのまま記載されている。

起訴状においては、金嬉老の本籍は外国ではなく、日本の一地方としての朝鮮慶尚南道釜山府水昌町なのである。そして起訴されているのは、外国人ではなく、朝鮮人「金岡安宏」と金嬉老である。

■民衆弁護人を

「いちど敵の手におちてしまった以上、その敵の手でおこなわれる人裁判で、どれだけの闘いが、できるといえるのか。法廷でたたかえなかつたかうほど、彼のたたかいたの本質は、寸又峽とは別なものに变质していくのだ」——何度か、そうした批判を、私たちは受けてきたし、それを否定しうるほどの確信は、私にはない。しかし、金嬉老との関係においては、私たちはむしろ「人定」の一人である故に、日本国家の法廷は、私たちがおかれている日々の現実にはかならない。そこを支配する論理は、私たちの「人定」に、あまりにも親しい。その「人定」が彼のさばきに適用されるとき、私たちもまた「人定裁判」の共犯者である。法廷は、権力がどこかにしつらえた別世界ではない。私たちが、そのなかで思考し、認識し、平然とさばき、あるいはたたかう、そうした日常的な世界の、一つの儀式化された姿

にはかならない。法廷は、のりこえるべき対象として、私たちを、とりかこんでいる。法廷は、それがまさに権力による欺瞞の場であるがゆえに、私たちがそこでたたかうべき状況そのものでもあるのだ。

公判は、いま二〇回をむかえた。仮に裁判が、型のとおり、惰性的にすすめられれば、事件の根源にあるものを追究するという弁護団の当初の意図は、まったくの幻想におわる。そうさせまい。そうはさせない布石として、弁護団は、まず裁判のありかたを問うた。対決点は二つあった。一つは、特別弁護人の採用であり、もう一つは、いかなる立証計画のもとで審理をすすめるか、という問題である。ただし、私たちは、特別弁護人といわずに民衆弁護人という。弁護が職業としておこなわれている現状こそが、むしろ「特別」なのだ。法曹一体といわれ、裁判官、検事、弁護士が、同じ穴のムジナとして人裁判の進行に協力しあうという図式を、この裁判ではうち破るぞという気持がそこにあった。同時に、民衆弁護人を採用する、ということは、この裁判が、法曹の「専門家」だけでは手におえぬ、ある深さとひろがりをもつ裁判であることを、裁判所

に認めさせることに等しい。つまりは裁判の性格にかかわる争いであった。単純に一刑事事件として審理をすすめるつもりであった裁判所は、頑固にこれをはねつけ、裁判は金嬉老の出廷拒否、弁護人の退席など何度も暗礁にのりあがりながら、昨年七月、約一年がかりで金達寿、岡村昭彦、佐藤勝己の三人が、ようやく民衆弁護人として認められるにいたった。法曹の枠のなかのめりこみやすい弁護活動を、たえず自己批判する思想的な契機として、このたたかいはこれからもつづいていくだろう。

第二の立証計画については、いま対決がつづいている。それについては、機会をあらためて述べよう。この難関がつきやぶれば、公判はようやく、本格的な審理の段階にはいることになる。

付記 金嬉老公判対策委員会
(東京渋谷区千駄ヶ谷五一五―九TeL三四一―四三二六)
からほぼ毎月、ニュースが発行されている。いま出ているのは第十三号。どの号も百円。その他、三一書房から「金嬉老の法廷陳述」が今、発売中。よろしく。

反権力の思想と行動

鶴見良行著

B6美装/¥680

新しいインターナショナルリズムの立場からとらえたアメリカ新左翼の動向と支配体制の分析、日本の反戦市民運動の渦中で刻々の運動の要請に応じて書かれた思想的論文と運動論、そして市民社会の日常のなかに鋭いメスをふるった時論など、運動の現場から行動を通じて形成された、著者の反権力と反戦の思想的成果のすべてが、この一巻に収められている。待望久しい最初の評論集！

この本にはさまざまな問題がみごとに書き込まれていて、そしてその書き込まれ方がじつに面白い。鶴見さんはベ平連の運動の積極的な推進者だが、この本は運動の中から生まれ来たものともすばらしい思想のいとなみの一つだ、と私は思う。

小田 実

現代革命論への模索

■新左翼革命論の構築のために

廣松 渉著

B6美装/3月下旬刊

マルクス・エンゲルスの革命理論の原像から、その後の史的展開をあとづけ、旧左翼の崩壊と新左翼登場の必然性を理論的に解明し、現代国家独占資本主義下にマルクス主義運動の第三段階を切り拓く新しい革命論を体系化した必読の書！

反戦市民運動

■ベ平連とともに

吉川勇一著

B6美装/4月下旬刊

五年間にわたるベ平連運動の歴史は、六〇年型市民運動から七〇年代の新しい反戦主体が生まれでる転換期を身をもって示した。ベ平連の事務局長としてこの歴史を運動と共に歩んだ著者の、行動者としての証言がここに凝縮されている。

歴史としての

スターリン時代

菊地昌典著

¥860

マルクス主義の

哲学と人間

竹内良知著

¥870

マルクスにおける

科学と哲学

花崎泉平著

¥980

日本

ナショナルリズム論

津田道夫著

¥950

マルクス経済学

全2冊

■資本論 帝国主義論 現代資本主義
岩田 弘著 上900/下950

国家論の復権

■政治構造としてのスターリンリズムの解明
津田道夫著 ¥880

エンゲルス論

■その思想形成過程

廣松 渉著

¥1200

表現主義論争

ルカーチ プロツホ ゼーガース

池田浩士編訳

¥1300

サルトル哲学序説

竹内芳郎著

¥980

文化と革命

竹内芳郎著

¥820

社会倫理思想史

■ホッブスからサルトルまで

山本晴義著

¥700

現代民主主義教育論

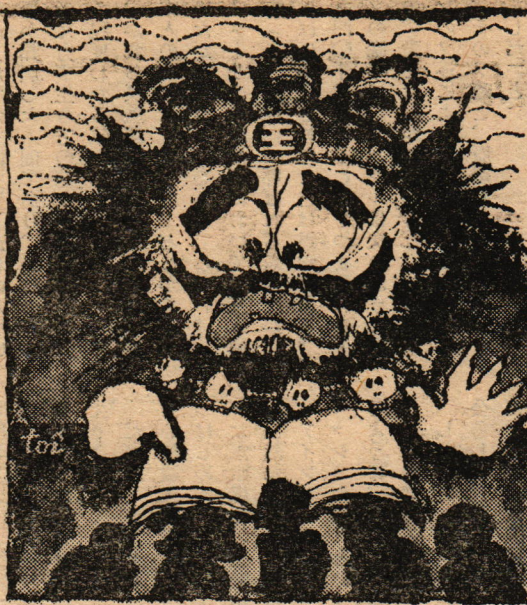
横田三郎著

¥900

御注文は最寄の書店でお願いします。

三面戯評

まことモッデくるつえる



春は名のみの風の寒さや、
谷のウグイス歌は想えど、時
にあらずと声もたてずし

※一九七〇年一月 ノ東京ハ
異常乾燥

デアッタ。人体ノ大方ハ水分
デアルタメ、乾キ切ッテ死シ
デシマウ人間モアルラシク、
東京砂漠ノ死者ハ著シ
ク多ク、焼場ハ繁昌シタ。乾

イタ人体ハ燃エルノモ早ク、火
葬ガマノ回転率ハ、運ビコマレ
ル死体数ノ割ニハ、隠ガビッ
クリスルホド早カッタ。乾燥ニ
ヨル病死、自然死ノ他ニ、異常
ナ死ガ目立ッタ月デアリ、ソノ
意味デ、T・S・エリオットサ
ンノ書ク「四月はいちばん無情
な月」ノ無情ハ、ワガ日本国ノ
一月ノ形容ニピッタリデアッタ。

※高校生ノ場合…… 都立T高校

自分ノ学校ノ新館教室ノ窓カラ
飛降りテ死シマッタ。机ノ中
ニ「七〇年代ノ生存競争ニ敗レ
タ、自殺スルケド笑ワナイデホ
シ」トイッタ内容ノ遺書ガミ
ツカッタ。M君ハ、東京大学ヲ
目指シテ受験勉強ヲ続ケテイ
タガ、最近ハのいりぜ気味ダッ
タソウダ。教室ノ窓ハ飛降りル
タメノモノデハナク、女生徒
チガしょーとばんつデ体操シテ
イルノヲ、ボウゼント眺メテイ
レバヨイデアッテ、コトモア
ロウニ、飛降りテ、ソノママ死
ンデシマウナッテ、なんせん
す、異議アリトシカイイヨウガ
ナイ。マサカ、アノクダラナイ
大学デアルトコロノ東大ヲ受験
スルコトガ、七〇年代ノ生存競
争デアリ、ソレニ敗レタト考エ
テ自殺シタナドトハ、トテモ考
エラレナイケレド、モシ、ホン
ノ少シデモソウダトシタラ、ヤ
ハリ、げばげばなんせんすこま
った人トシカイイヨウガナイ
ヨ、お兄さん。トッテモ受カリ
ソウニナイト思ッたら、らじか
るニ大学教育ヲ考エタ結果、受
験シナイコトニシタト総括シ、
ゴロゴロシテレバヨカッタノ
ダ。ええかっこシヨウトスル
カラ、トリカエシノツカスコト

ニナッテシマウダ。ベ平連ニ来
テミレバ、大学ヲ主体的ニ拒否
シタリ、ずっこけチャッター、
なんとなく受験シナカッタリ、
セツカク優秀ナ成績デ入り、出
世コースに乗ッテイタイニ、何
ヲ好キコシンデカ、中途退学シ
タッテナおじさまモイッパイイ
ル。M君ハスゴクありすとダ
ッタノカモシレナイ。一九七〇
年代ノ生存競争ヲ、東大入試ニ
カケタノダカラ、変革ノ可能性
ナンテクソクラエダッタノダ。
チイトバカリ東大生ガ騒イダッ
テ、何モ変リハシナイと思イコ
ンデシマッタノダ。思考ガ飛躍
セズ、窓カラだいびんぐシチャ
ッタノハ、まことにモッテ、く
るうえる。

※主婦の場合…… 会社員Tサン

ハ、台所デ上半身黒コゲニナッ
テ死ンデイルノヲ実ノオッ母サ
ンニ発見サレタ。コレモのいり
ぜギミダッタソウデアルガ、
居間カラ「別レルカ死ヌカトイ
ワレテ死ヲ選ブ」トイウ内容ノ
遺書ガミツカッタ。合所カラガ
ス管ヲ引き出シ、ガスノ炎デ衣
服ニ火ヲツケ自殺ヲハカッタモ
ノ。E子サンハ、マダ三十七歳、
寿命ハグランドノビティルカラ、
マダマダ人生ノ半バダ。女性上
位時代ト人々ハサワギオダテル

ガ、つまらぬ夫一匹ニ命ヲアズ
ケテ生キティル人妻(夫ノ場合
は人夫といわないのも不公平だ
けど)ガゴマン Toilルノダ。ま
ことにモッテ、くるうえる。

※老人ノ場合…… 寒イ冷タイク

ボート場カラフロシキ包ミヲ背
負ッタ老人ガ飛込シタ。背ノフ
ロシキハ、真新シイサラシヲ縫
イ合ワセタモノデ、約二十キロ
ノ墓石ノヨウナこんぐりーとヲ
包ンデアッタ。七十歳クライ。
ヒゲヲキレイニソリ、ラクダノ
下着上下モ新シカッタ。老人ノ
自殺ハ年々多クナル。シカモ老
人ハマスマス増エルノデアル。
高度成長ノ日本ノ老人問題ハナ
ドヒラキナオラナイマデモ、現
代檣山ハコンナ形デ進ンデイル
ノカモシレヌ。「おじいちゃん
よ、そろそろ墓石おんぶし
て、東京湾に飛び込んだらどう
だい！」まことにモッテ、くる
うえる。
カクテ睦月ハくるうえるデ過
ギユキ、ヤレ二月トナッたら、
コレマタ残忍ナ月。一族六人殺
シ、三人毒殺事件、生首事件ト
相次ギ、アメリカ型犯罪ガ増加
シソウダトイウ。ソシナニあめ
りカノマネバカリスルコトナイ
ジャナイカ。

(塵)

ラッセルと日本

市井三郎

1

パートランド・ラッセルがこのほど逝去した。たまたまぼくは、かれの本をいく冊か邦訳した人間であり、かれのものの考え方や生き方の基本姿勢について、ある程度わかる気がしている。ここでは、かれの反戦運動の態度が、われわれ日本人のそれとくらべて、どこがちがっていたかということを考えてみたい。

スターリンの統治下において、基本的人権（と、西欧側で呼ばれるもの）が、大はばに抑圧されたことは周知である。一九四〇年代の終りころ、つまりスターリンの晩年に、ラッセルは次のような意味の言葉をたしかに公表した。「スターリンのソ連によって征服されるくらいなら、そのソ連と、原爆戦争をやる方がまだましだ」と。

この言葉は、いわゆるスターリニズムへの嫌悪をレトリカル（修辭的）に表明した言葉だったのだが、ジャーナリズムの上では、「ラッセル予防戦争を主張す」などと、さわぎ立てられたものだ。そのようにとられても仕方がない言葉を公表した以上、その種の曲解にかれはムキに

なつて弁明しようとはしなかった。当時の冷戦の雰囲気のおかげで、一九五〇年にラッセルにノーベル文学賞などが授与された事実は、ノーベル賞にも「政治的配慮」が入ることを皮肉にも証拠だてた出来事だった、と今では明瞭にいうことができる。

だがB・ラッセルは、あくまで背骨の強い経験主義者であった。一九五〇年代のはじめに、太平洋上でアメリカが行なった水素爆弾の実験結果を知ると、かれは決然たる行動を開始した。「ラッセル・アインシュタイン声明」とか「パグウォッシュ会議」といった名で知られているように、核兵器廃棄運動を国際的にはじめたのである。

しかもB・ラッセルがこの時期以降に公言した言葉を、ぼくは重視したいのだ。イギリス国民に対して、かれは次のような意味の説得を、くりかえし行なったのである。

「イギリスが核兵器を廃棄することによって、たとえソ連に征服されるようなことが起こったとしても、イギリス国民がすべて核戦争によって抹殺されるよりはましである。人民はたとえ他民族に征服

2

服されるとしても、いつかはその征服をねのけることができるのだから」と。

イギリスの若い世代は、ラッセルのこの知的誠実性に感応した。ひるがえって日本は、どういふ事態なのであろうか。日本では、非武装中立の声はラッセルより早く起こっている。核兵器廃棄運動も、ヒロシマ・ナガサキの体験にもとづいて、ラッセルより早く起こったのは確認しておいていい。

だが、日本のいわゆる革新系知識人は、パートランド・ラッセルほどの知的徹底性を示したであらうか。本質洞察とによって、「社会主義諸国は平和勢力である」と規定し、当の社会主義諸国のあいだに、武力が行使される現実（ハンガリー事件）にろうばいしたのではなかったか。そのとき、なお何らかのリクツによって「社会主義国」相互の武力行使を正当化した人々も、十数年後のチェッコ事件にさいしては、多く態度を改めざるをえなかったのではないのか。

人間は神ではない。だから誤まりは、もちろん避けることはできないのだ。しかし人間が、自己の誤まりに気づいたときにとる態度によって、その人間の真骨頂が明らかになるのではなからうか。アフリカでビアフラが陥落し、何百万の黒人が餓死に迫られていることをわれわれも知っているはずだ。ベトナムの死闘の

3

ことはいわずもがな。そのように生死をかけて闘っている人間が、この地上にまだいく千万もいることを知っていないがら、何であれ戦争なんかはゴメンだ、というに近い論理（と心情）だけで、事に処しうるのであろうか。

厭戦心情をもすくい上げて反戦運動へ集結する、といわれるような主張に反対しているのではない。本気で普遍的な反戦をとなえるのであれば、自国が軍事的征服にさらされたときにも、戦争よりは征服されることをえらぶ、という徹底した論理的帰結を公言する用意があるのか、という基本姿勢を問うのである。

ラッセルの死にさいして、ラッセルに美言を呈することはやさしい。だがラッセルの生きかた——百歳近い老年にいたるまで、かれが貫徹した生きかた——がわれわれに深いところで問いかけてくるものを、各自の内奥でかみしめることこそが、かれの死に対するもっとも人間的な弔らひであらう。

ぼくはラッセルのあらゆる意見に、ただ追従しようとするような心境からは遠い人間である。だが、かれの知的誠実性には、文句なく脱帽する。アルジェリア解放の闘士であった黒人F・ファノンも、いま生きておれば、同様のことはでラッセルに哀悼をささげるだろうと思う。



高校生のひろば

〆一月十九日の処分粉砕デモ。右側、スカートを着
 けているのは生徒の母親。手前、後ろ向きが教師。
 左端が立川署の私服刑事。三者そろっての弾圧。

あなたがたが処分闘争を貫徹されることを
 を希みます。自分はなにもしないくせに
 と思うでしょう？ 私もそう思います。
 理解してくれとはいいません、ただ許し
 てほしい（往復書簡より）

都立立川高校の生徒たちにと
 って一九七〇年の夜明けは、悪
 夢とともに始まった。十二月三
 十一日、四名の退学処分（大晦
 日の深夜、処分通告の呼び出し
 電話）。二十四名「無期停学
 桐喝——確約書」処分。

右に引用したのは、ノンボ
 リ・生徒から、退学処分を受け
 た一人、古川杏子さんへ宛てた
 手紙の一節だ。次ページに、そ
 の全文と、古川さんから彼女へ
 宛てた返事を掲載した。

去年の10・21から11・25まで
 の立川高校闘争の経過は「週刊
 アンボ」第四号「高校生のひろ
 ば」を読んでいただきたい。そ
 の後まず生徒会長が辞職した。
 （どの高校でも、生徒有志が質
 問状なり要求なりを出したとき
 学校側は「非法団体だから」と
 という理由で取り合わない。そ
 のホンネは——立川高校では生
 徒会での大衆的な支持があった
 にもかかわらず「執行部は一部
 の生徒の代弁者になっている」

という理由でつき離された）さ
 らに中央委員会は議長をリコー
 ルし、自ら解体を決議した。そ
 して収拾策としての会長選挙は
 大衆的な阻止行動で一日延期さ
 れ、結局全校生徒の四分の一そ
 こその投票率で強行された。

学校当局は最後の切り札とし
 て処分を持ち出したのだ。しか
 し、冬休み明けの一月八日から
 再び闘いは始まった。連日の校
 門前ピラマシ、それを阻止しよ
 うとする教師たち、私服刑事た
 ち。（腕をねじる、地面や壁に
 たたくつける——ヘルメットは
 必需品——なぐる、ける、服を
 破る）ことはもとより、門の内
 側にはテレビカメラがすえられ
 校長室、教頭室、職員室に受像
 機があるという。（しかも「朝
 日新聞」の記者が取材に来ると
 その日に限って、妨害は、なか
 った）下の写真は一月十九日、
 校門前、中央が古川さん。手、
 顔をつかんでいるのは、立川高
 の教師たち。



第一の手紙

古川さん、お元気ですか

こんな空々しいことは書きたくないけれど、悲しいかな私にはこの際、他に適切な言葉が思い浮かばないので。それに実際お元気がどうか心配なのです。今週の月曜日から一度もあなたの姿をみないし、他の人たちの門前でみかけないようだから。あんずちゃん——あなたはこう呼ばれてだけれども親しまれていた。今だって、あなたのことを話するとき白々しくも古川さんという人は滅多にいません。私は貴女と直接、あまりおつきあいしたことがありませんが、でも一、二年同じクラスで時々お話をしましたね。私にとってあなたはしっかりしていて、その考え方には、とてもついてゆけないような気がしていました。仲よくお話しもした代りにずい分貧弱で（私がです）力量の不均衡な論争もしました。私はそのたびに、自分の不勉強を自覚させられました。

十月二十一日の反戦デーには私は参加しませんでした。理由は、反戦の何たるかを考えず、安易に戦争反対を叫んで、しかも反戦と授業放棄との関連や、反戦デーをきっかけにして展開

されるべき運動についての何らの見解ももちあわさない人が大半だったからです。（私がそう思った人の多くは後の民青の主力にさなりました）また、二十一日以降のバリケードストライキにも反対でした。主旨がよくわからなかったし「解放バリ」という閉鎖状態の矛盾を感じたからです。でも、二十四日にバリの中からやってきたあなたと一寸お話をして、私は少くとも貴女方の主張のごく皮相な面を理解できたと思いました。そして、それまでもっていた自分の中の矛盾、今までの秩序を肯

真実の無意味さ



ぞらしさについて説教されました。でも、自分で考えて自分で決意した生き方だと思つと、そんな大人のイヤミなどは平気でした。大杉栄にひかれ社会主義をもっと勉強する必要があると痛感したのも、そのころです。でも、私は結局そこまででした。私は何も行動することができなかつた。それどころか目前にせまる受験におのき、授業再開の現実の必要性と、真実の無意味さのジレンマに悩むばかりで、厳然たる現実の前には私の決心も怪しくなるのでした。そんな私にも警察官導入とロッ

定すべきだという義務感と、全ての抑圧を排撃すべきだという権利意識の萌芽を整理し、家族や教師や目上の組織全てに対する義務を廃する方向にすすむという決心をすることができました。あのころから私は、今までの教師に対する（できない）模範生」のからをつきやぶり、親に対する「家の子らしいいい子」のわくを脱しようと試みはじめましたので、双方に急に反抗的になったとみられたらしく、教師からは生れてはじめていやらしい皮肉を浴びせられ、家でも父にやんわりと、社会主義のお

に顔を出したり、父と大学の相談をしたりすることを余儀なくされてしまったのです。私があの闘争の中でたとえ何らかの行動を起こしたとしてもそれが余程のことでない限り、処分の対象にはなり得なかつたでしょう。私の経歴がきれいすぎるからです。それにしてもあの処分、私はお正月の七日間を暗い、憤った気持ですごしました。元日に新聞で処分を知った気持はなんとともいえません。処分そのもののへの怒りと不安とが、私にお正月気分も感じさせず、勉強に手をつけさせませんでした。そして八日の門前の闘争と教師の冷い眼差、私はそこにはじめて、教師の本当の姿、仮面をはいだ赤裸な姿をみたような気がしました。それなのにあなた方の闘争に対して、なんの態度も示さず、単に教師から顔をそむけてとることが精一杯の抗議であることの辛さ。私は今まで、信じたい信じたいと念じてきた教師とあなた方のあの闘争に何度、口惜しさ、情なさの涙を流したかしれません。

毎日を、受験勉強に汲々として、今、私は完全なる敗北者以外の何者でもありません。大学に入っても闘争は私から縁どおいものであるでしょう。自分の顔をいじめるのが今からおしかれるのです。でも、私のように自分ではなにもできないおくびょうものもありながら、あなた方の闘争を自分たちの闘争にしてゆきたくて声なき声援を送っているものも多いのです。私はあなたがたが処分闘争を貫徹されることを希みます。自分はなにもしないくせに、と思うでしょう？ 私のもそう思います。理解してくれとはいいません。ただ許してほしい。この体制が私のような人間を多く育成していることを考えて。

友人のMさん二人がこんなことをいいました。「何らの前提もなく、相手の人格や思想に対する認識もなしにお元気で、などというのは無責任で、おかしい」「敵に対してその健康を折るのはおかしい。教師がバリの中の人の健康を慮って、説得するというのは欺瞞である」この人たちと同じ立場から私は貴女に心から言います。

「健康に気をつけて」と、「健康に気をつけて、決して敗北者とならず、挫折せず闘争にゆかれることを祈っています」と。

一月三十日

立川高校の一朋友より

第二の手紙

手紙、ほんとうにありがたう。夜眠れないことを除いて、たいそう元気でいます。

十月には、あんなにきらきら明るい微笑と躍動する肢体と諷いの意志が重なりあって「生活」をつくり、進歩と増殖と蓄積の巨大な貧しきでぬり固められた日常性の蔓延る、そのシルクスクリーンを、べったり闇に塗りつぶすんだと、と駆けだしたのに、あなたの手紙読んだら、まるで、権力を睨みつけつつも、踏みこむ側と踏みこまれる側との、相互了承性があるように、あたしたち、九十日たっても、やるせないほど脆弱いのだと思った。

七十年に入って、少年係から公安へ、私服二名から十六名へ制服二十名から六十名へという官憲による立川警備体制の強化の中で、更に高揚する緊張関係の創出において（それも「生徒会」などという、居直りの安住地帯を破壊した地平で——それはまた、一切の何々主義者の大衆操作の場をも奪い取る、自立の拠点でもある）どこまでやれるか、という信じられないような賭けとして、処分闘争は始まったのでした。そして、立高襲

撃闘争は、根源的な混乱状況の創造を、最も厳しい弾圧化で実現する、極めて、ラディカルな性質を、あなたにもみせつけたにちがいない。魂の痙攣で闘争があるのではない限り、この賭けは、「絶対処分させない」ところから復び永久律動の輪を広げてゆくでしようし、あたしたちみんな極左冒険主義者で挑発者で犯罪者で、最後まで憎まれ役でありたい。とはいっても市民社会秩序での遠近法で区切られた時間感覚の渦中では、「革命的前衛」が「展望」を語る時さえ、それらの威厳に溢れた言葉

……明日はない



の端にぶらさがってしまふ市民社会への幻想は、どうしたってあるのだ。

一月三十一日の、大量処分、立高アウシュヴィッツ粉砕の市街デモで、二人の仲間を官憲の手にわたしてしまつて、あとの集会で多くの人たちが「彼らへの真の連帯は、われわれの闘争そのものだ」といつていたけれど、あたしってば、やっぱり、どうしてみんな立川署殴り込み、奪還闘争を組織しようとなないのかと思つたんだ。でも、それだつて思うだけ。そうして「蜂起の日まで」という発想の

袖に住む魔者は、一方で「今はその時でない」と八今日Vの賭けに全額はたぐくことにおびえ、一方で、「耐えてゆく」思想性と綱領の獲得に溺れてゆく、こうして現在を明日に売りわたす時、全生活の中で失なわれる、とりかえしのつかないものは何か。類型は、権力の側の終身刑の鉄則だ。生かさず殺さずうまうやってきた奴ら、「明日」という字は明るい日と書くのね」という残酷このうえない歌に「俺たちに明日はない」と叩きつける、そんなこと第3世界でしかできないというのも実はデマな

のに、結局何に敗けるつたつて、こんなに凄まじく暖かい化物にやられるほどみじめなことはない。あたしはといええ、ヌターリニストぶせいに首切られて、殴られ蹴られ、体育科教師どもからは「お前なんか女じゃない」と罵倒され（あいつらは女を知らない。女というのは、もっと強いものだ）それでも極左な方針だし続けられるだけの生活感覚と技術と肉体をもっているわけではなかった。切斷された首が視た世界の視野は気の遠くなるほどかくて、自己否定なんて言つて、自分でうそい

ってるんじゃないかハラハラ涙が止まらなかった。でも、云々の覚悟がなければ聞えない、とか、云々の立場でなければ聞えない筈だ、とか、「語る言語がない（ある）」の一切合財、いつだって抑圧者の側の「闘かわせない」論理でしかなかったじゃないか。あたしたち、市民社会の甘い汁を吸っているとの瞬間からだってニタツと笑つて、ひっそり立ちあがってゆく。

凍てついた路上で、軍手をはめた番犬たちと、あたしたちと、鉄格子の陰に潜んだ私服との乱れた境界に、「通りがかりの者ですけれど」とかわうついで侵入してきて、したり顔で「先生の言うことお聞きなさい」「静かに勉強しなさい」「なんです、その乱暴な言葉は」とか、へドのするような御託さつとくさくさべたて、あたしたちの引き裂かれた衣服は視ないことにしていた母親たち——あなた方が間違っている。あたしたちの一人が「平和なんて欺瞞だ」と叫んだ時、ズラツと並んで一斉に、ウキウキと狂信的なまでに笑った母親たちの、あわさった歯と歯の間で噛み殺されてゆく叛逆の嬰兒は、「母」の太古噴をつくるだけの量になるだろう。ともかく、「生活」の陰に隠れようとしたって誰れも

隠れられる生活なんか持つてやしないのに、持ったことにしている自己操作で街は一杯だ。

あたしたち、敵とか味方とか、状況においての一回性ぬきで規定するのやめよう。語っている肉体が忘れ去られれば、言葉は現実感覚でのワン・クッションになり下がる。沈黙がじつと危機的様相をおびて立ちすくんでいるのなら、あたしたち、再び街で出会うことによって、これらの言葉は、かき消されなければならぬ。あなたの、そして「聞えない」部分の咎科の痛みは、じゅくじゅくとあたしたちを苦しめるだろうけれど、いまのところ痛みを全身にひろげていく以外、まともに他人の顔みて生きてゆく方法はないように思えます。

あとになりましたが、まったく無断で、あなたの手紙を公開してしまつてごめんなさい。どうしても、誰があなたの手紙を受けとったか知らせてく、この雑誌に無理にお願いして載せてもらいました。あなたの顔をあたしが知らないのは、あたしの恥です。では、お元気で。

二月五日

あんず

アンポ法律

写真を撮らせ ない権利

肖像権とは、私たちがどんな人でもどんな状態にあるときでも持っている人格権の性格の権利である

■ いたらない撮影

デモ行進をするさい、報道機関や、アマチュア、それに私服の警察官がさかんにデモ参加者の写真をとる。

デモをするのは、誰かに何かを訴えたいと思うからこそするのだから写真をとられることは望むところであるが、警察官の撮影だけはいたらない。いったいあれは適法なのだろうか。

そこで肖像権というものから考えてみよう。肖像権というのはいったい何だろうか。

カメラという写す技術のないところでは、自己の姿が映像として自己から分離することはないはずだし、写すことによって定着化した映像も、出版・TVなどの公表の技術のなかったところでは、肖像権というものを考える必要もなかったはず。とすれば肖像権とは、技術に

よって自己から分離し、自己の物理的支配を脱した自己の映像を、観念の力によってふたたび自己の支配下に回復しようとするものだといえそう。

そうだとすれば、これはほんらい個人的な、人格権の性格のものだ。

しかし権利にはちがいがなく、したがってどんな人も、どんな状態にあるときでも持っている権利であるといえる。

デモ行進中でも、肖像権そのものは参加者一人一人が持っている、したがって写す人が誰であれ、写されることを拒否することはもちろん、いったん写されたものであっても、写された人の意に反したかたちで公表されることを拒否することができるわけだ。

■ 警察官に肖像権はあるか

しかし写す人が報道機関などの私人である場合は、一般には

意に反した公表はされないという一定の信頼があるから、さして問題はない。が、問題は警察官によって写されることだ。

デモ参加者は警察に見てもらおうとしてデモしているのではない。つまり信頼関係がない以上、警察官がデモ参加者を暗黙の承諾を得て写しているのだという理由はたない。

デモが適法であるかぎり、警察官が撮影する何の権限もないわけである。

もし写すなら、肖像権の侵害であり、違法である。だから写されることを拒否できるばかりか、写された人は、写したフィルムを引渡せと要求することもでき、写されたことによる損害の発生が明らかである場合は、違法行為に対する正当防衛として、許される範囲の実力の行使も可能である。

しかし実は、この場合、肖像権を侵害したということを、かれこれ法律的に争う必要はない。

というのは肖像権以上に重大なデモ行進の権利そのものが侵害されているのだから、このことを理由とするだけで十分。

ところで、私たちデモ参加者が、逆に、警察官を写すとき警察官の肖像権はどうなるか。

デモ規制の警察官に、そのとき、肖像権を主張できないののである。なぜなら、彼らが国家機関の

アンポ政治

公明党よ、 まず行動で……

■ 疑われた公党の資格

社会党とともに公明党もまたいまや、深刻な反省、と党体質改善論議に明けくれている。

深刻な反省、というのは、信仰者集団的言動についてであり、党体質改善、とは、創価学会員政であることをやめて、非学会員を党に吸収していかうというものである。

こうした大改革の動機は、昨年暮れの総選挙期間中に起った公明党の、出版妨害、事件である。

藤原弘達氏の創価学会批判書の出版に、公明党が圧力をかけ、さらにその効果を上げるべく、公明党にとって、敵であるはずの自民党幹部まで動かした

手段として公務を執行しているのである以上、個人としての権利である肖像権を行使できるはずがないのである。(弁護士)

教義問答から、党体質改善、は不可能。特定の信仰集団の代弁者への訣別は大政治行動を起すことだ

たというものである。

信仰というのは、絶対的価値をみずから信ずるものに見出さなければ成立しない。だから創価学会が自身の信ずる価値への真向うからの批判に対して、文字通りの拒絶反応を示し、反攻に立ちあがるのはあたりまえである。もっとも、このさいでも言論圧迫が許されないことはあたりまえだ。

しかし、公明党が特定の信仰集団への批判・攻撃に対して拒絶反応したり、反攻したら公党としての資格を疑われても仕方なからう。

公明党が、こんどの、出版妨害、事件で、言論の自由を犯したのではないかという疑惑と同時に、公党としての立場も疑わ

れたのもこの点にある。

■教義問答は不毛

いうまでもなく公明党の政党としての成りたちは他党とはいささかちがう。

創価学会という特殊な信仰集団の会長の「お声がかかり」で誕生し、その主要メンバーの全部、全体の九割が創価学会員で占められている。「公明党は創価学会の政治部門」というのが彼らの規定だった。

だから今回の創価学会批判書の出版について、公明党がまさに政治的に「対処」したのは、それが選挙期間中であつたという以上に、当然の筋道であつたのだ。

出版妨害、言論圧迫の事実について答えないまでも、公明党がこのような事態をひき起す大本の党と学会の密着に、まずとりくみはじめたことはよいことだ。

しかし、現状の「党体質改善」論議は、どうも文字通りの教義論争に終始しているフシがある。「教義問答から、改革の道を見出すことは、新党を作るよりもむづかしい」と、ある人が社会党の再建論争を評したが、このことはよりいっそう公明党にあてはまるだろう。ではどうするか。公明党に投

じられた票が何を望んでいるかを知り、日米安保解消であれ、日中復交であれ、汚職追及であれ、公害追放であれ、党幹部は街頭に出て先頭に立って、大行

アンポ教育

反戦派高校生になる方法

■まず手紙を書こう

高校生のキミに、はじめに話してみたいことがある。

本格的な△反戦高校生▽になるためには、どうしたらいいかということだ。

実際の日常生活をふりかえってみたとき、いろいろな面で自分が孤立しており、自分の考えなり、行動を、いかに反戦につなげるか、まったくわからなくなるだろう。

そこで、どうしたらいいか。

まず、新聞、本、雑誌、テレビで感動した人がいたら、つまり筆者や語り手に、とにかく手紙を書いてみよう。

たんなる感想でもよい。質問

動をおこすべきであろう。そのなかでこそ、ほんとうの市民の党として成長できるのだ。

(市民B)

ファンレターを書き不良派にも友人をもち教師に彼の学生時代を語らせてみよう……

や討論をしかける形にまで自分の考えを煮つめて書けば、なおいいだろう。

一人でも返事があれば、キミはもう孤立してはいない。

(小田実)は忙しいだろうな、だからかならず返事がくるとは、かぎらない。でも遠慮はいらないんだよ)

住所がわからなければ、雑誌社や出版社に往復ハガキか何かで問合わせればいい。出版社気付で手紙を出す手もあるが、忙しい会社が多いから返事が届かない公算の方が大きいだろう。

次に、学校で「仲間」を作っていく。これはなかなか困難かもしれないが——やらなければならぬことである。そのさ

い必要なのは、多くの仲間を集めることである。その場合さまざまな仲間をいかに集めるかが、その集団を成功させるか否かの決め手になると思う。

議論好きの仲間、スポーツ派の仲間、音楽派の仲間など、多様な層から「仲間」を集められたら——極端に言えば、ガリ勉派に一人、不良派に一人、強力な仲間ができたならば、それでもう戦闘体制はできたのだ。

キミ自身についていえば、理屈で説明する相手と、直観や情感で説得する相手を持つことで、キミ自身がまったく反対の型の人間に對したときでも恐れず率直に自己の意見を伝達できる、いわば真の力ある△反戦派▽に鍛えられる一つの布石となるのだ。

■教師に語らせよう

教師には、まず相手に語らせよう。相手の年齢と戦後史年表を見くらべて、ある人には一九五六年の砂川闘争を、あるいは一九六〇年の安保闘争をいって、たぐあいに、つまり彼の「輝しき青春の記憶」を語らせるとい、警職法反対闘争などというのもあったね！

「デイトを邪魔する警職法」なんていうスローガンが女性週刊誌にのった時だ。あれはとに

かくツブしたんだ。——などと語

らせば、「それだけのことをやってきた先生が、いまは何をしているんですか」と切りこむことだってできるはずだ。

そのときキミは、そうだ、もうはきりした△造反派▽△反戦派▽に成長している自分を発見するだろう。

そうしたら街へも出よう。怒濤の(？)デモンストレーションが、キミを待っている。

(造反技師C)

■もしもあなたが、

自衛隊員なら、聞かせてください。「週刊アンポ」の感想を、自衛隊の生活を、それからあなたのことを。

小西誠元三曹を知っているでしょう。彼が隊内でまいたビラ、「アンチ安保」には、「誰が自衛隊の敵で誰が味方なのか」という根本的な問題についての訴えがありました。

あなたはどうか考えていますか？

あなた自身は、どう感じているのです？

手紙を書いて下さい。秘密は守ります。それでも心配な方は、匿名なりなんなりで。「週刊アンポ」編集部投稿係



■市民運動入門

■個人の自発性と個人主義

■吉川 勇一

ここに一定の世界観・社会観を求めてはならないのであるし、あるはずがないのである。

それなのに市民運動を「市民主義」などとはまず規定し、「積極的な世界観・社会観をその基礎にもっていさえない」といって批判したり、さらにそれでも何かあるのではないかと探しまわったすえ、「個人主義（おおよびその現代的ヴァリエーションとしての主我主義）」こそが市民主義のイデオロギーの基礎に横たわっていると云える」などと断定してそれを非難している人が相変らずいる。（半田秀男論文・芝田進午編著「現代日本のラディカリズム」所収）

ベ平連はよく個人原理ということをいう。市民運動一般がそれを重視する。私はそれを自主性、自発性のことだと理解している。

このことはイデオロギーとしての個人主義ではないし、またもちろん、自分勝手、他人のことは一切知らずという無責任な態度のことでもない。ありとあらゆる機会にいたり書いたりしているのだが、ベ平連にしても、いわゆる市民運動にしても、異なる思想や立場をもつ人びとの共同の行動の場なのであるから、そ

を参加者に前提として要求したり、あるいは注入することをあらかじめ意図するものではない。こんなことはまったく自明のことであり、今さらいうのは恥ずかしくなるくらいだ。

組織者としての責任

個人の自主性、自発性ということが個人主義や自分勝手ということでない以上、運動の中で他の人びととの関係が当然考慮され、自分の行動の選択がそれとの関連で律せられてくるということである。

行動がある。集会でも、デモでも、ピラマキでもいい。自分一人だけでゆくのではなく、人をさそう。さえば、そこでは自分と、自分がさそった相手との関係が生じ、それが自分の行動に影響を与えるはずである。単に一人で個人的に参加した場合とは違った新しい状況が生まれているのだ。自分以外の人を行動にさそうということは、組織者になるということだともいえる。

十年前の六〇年安保闘争の中で、このことはすでに指摘されている。

市民デモに対する右翼の攻撃があったことと関連して、荒瀬豊氏はこう書いている。

「抗議行動が、直接的暴力にさらされる恐れがないほどに市民のがわが局面の主導権を握っているときには、それがあらゆる市民を結集するゆとりのある示威集団となることは当然でもあり、またの

ぞましい。しかし権力のがわからの無制限の反撃が予測されるときには、抗議行動の成員は戦闘にたえられぬ人に危害がおよぶことを、最初から避けていなければならぬ。市民の行動を組織し、ひろげ、ふかめようとするものには、つねにきびしい状況判断が要求される。鶴見和子は、この一カ月のあいだ「声なき声の会」のある父親がとった行動を紹介している。彼は、六月四日までのデモのときには、子どもをつれて抗議に参加していた。しかし、六月十一日以降は、局面の緊張を考慮して子どもを連れないうでデモに行っている（子どもとアンボ「作文と教育」八月号）。この父親の行動をささえているものは、自分が連れてくる立場にある子どもにたいする責任である。そこにはすでに、すべての組織者に要求される義務が、きびしく問いつめられ、実行されている。参加者が同時に指導者としての義務を感じ、指導者なき集団にやがて到達する芽が、ここにはあった。」（日高六郎編「一九六〇年五月一九日」岩波新書）

自主的に、自発的に行動に参加するということとは、決して自分一人の個人的満足のためではないのだから、他の人びとを誘って一人でも多くその行動に加わるよう求めるのは当然であって、そしてそのことは「組織者としての義務」の自覚にみちびくのであり、それが、前回に書いたような「6・15方式」を成立させる基礎にあるのである。

20世紀の谷間から

作詞・ビタミンC
作曲・たに なをと



に じゅっせいきの たにまか ら めたしー はさけ ぶ

つな を おろして つな を おろしてーおくー んー

うえから みてるひと は いるー けれど だれもー いとさえ

おろして くれ ない よう たにまかー ら たにまかー ら

1. 20世紀の谷間から 私は叫ぶ
網をおろしてエ 網をおろしておくれエ
上から見てる人はいるけれど
誰も糸さえおろしてくれない
2. 20世紀の谷間から 私は叫ぶ
腹へった オニギリなど落しておくれエ
上から見てる人はいるけれど
誰もパンクズさえほってはいくれない
3. 20世紀の谷間から 私は叫ぶ
ヨーシわかった 今やっとわかった
人をあてにはするものか
私が自分で登ってみせよう
谷間から 谷間から

★ 週刊アンボ4号～7号までにこのページにのったフォークのテープを東京フォークゲリラが作りました 問い合わせ→アンボ社“うた”係(往復ハガキで)

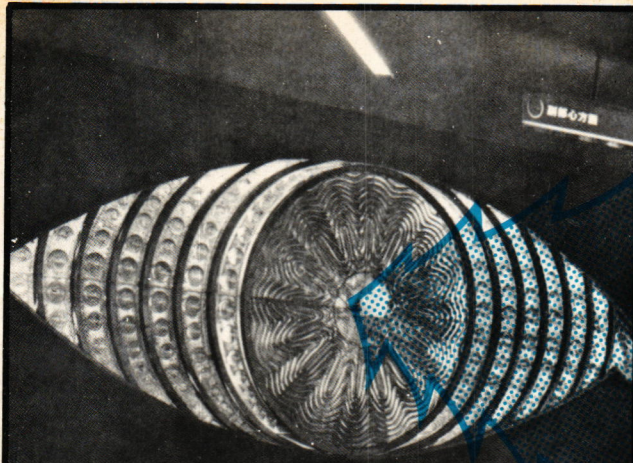
★ 各地フォーク集団を紹介します
「20世紀の谷間」社
兵庫県川西市笹部島田170
坂本 洋 気付
「やるぞどこまで」工房
埼玉県浦和市文蔵1672
東 気付
「福岡フォーク戦線・トステロブ」
博多郵便局私書箱12号
「東京フォークゲリラ」
東京都世田谷区玉川等々力町3の74

© Copyright 1970 by 「20世紀の谷間」社 OSAKA

フォーク集会 70 第1弾

— 西口広場裁判へ向けて —

2月28日(土)PM6 / 池袋・豊島公会堂
中川五郎(予定)・たになをと・小黒弘ほか
スライド / 西口フォーク集会「終りから始まる」
東京フォークゲリラ「20世紀の谷間」社 共催



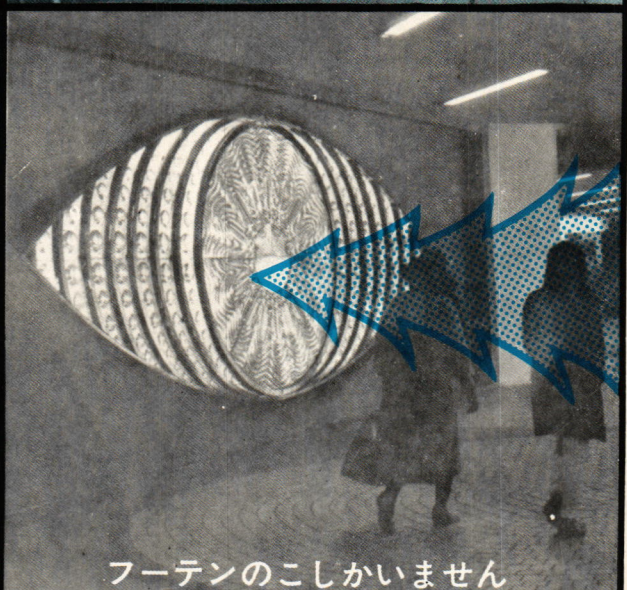
新宿駅西口地下通路に



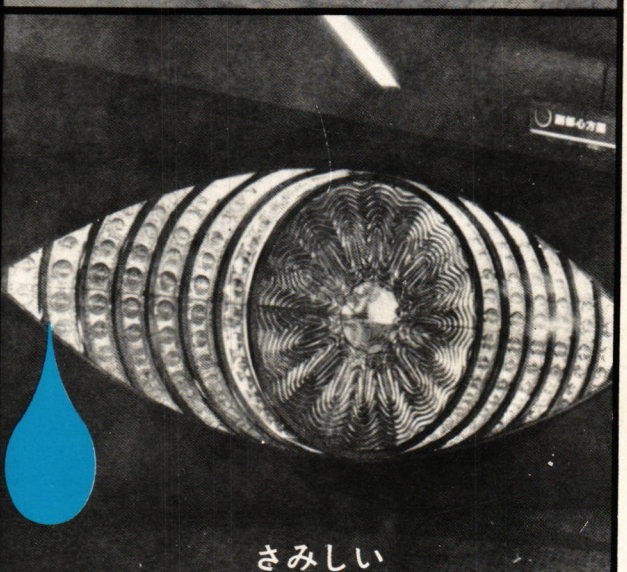
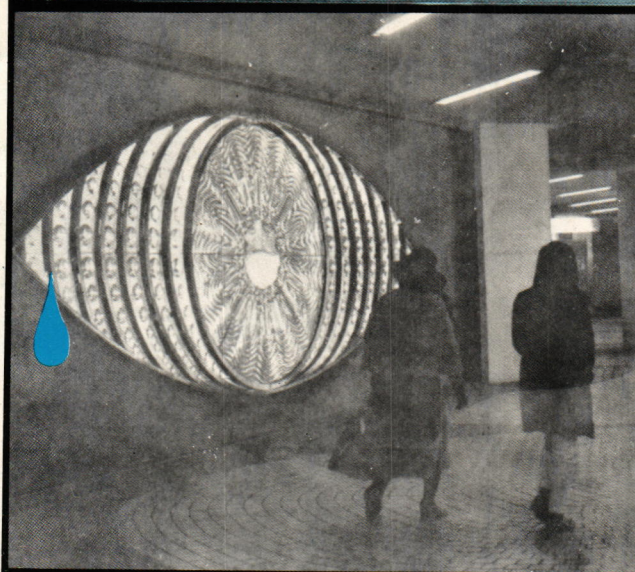
お上の目？が表われて



今はもう



フーテンのこしかいません



さみしい